
妖怪学助教授 祁答院晶の調査レポート

来島トウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪学助教授 祁答院晶の調査レポート

【Nコード】

N3018R

【作者名】

来島トウジ

【あらすじ】

「私は事件に対してこんな仮説を立ててみた……」
私立実岡大学で民俗学を教える主人公、祁答院晶^{けどういんあきら}は、自他ともに認めるイケメンかつヘンな人。そんな彼と傍若無人な相棒の行く手には、歴史の闇と妖怪、殺人事件が待ち受ける！ 第一弾は「伊織神社の伝説について」。悲恋に彩られた龍神伝説の矛盾を、学者が華麗（？）に解き明かす！

序文（前書き）

はじめまして。来島トウジと申します。本作品は私が脚本を担当し、
さる2011年2月20日、好評のうちに終了したワークス仮想風
月旗揚げ公演「妖怪学助教授 祁答院晶の調査レポート」のノベラ
イズ版となります。

ノベライズ化にあたっていろいろな追加要素もありますので、新規
の方はもちろん、公演をご覧になられた方でもお楽しみいただけ
ると確信しております。ぜひ私の駄文にお付き合いくださいませ。
では、拙作を始めさせていただきます！

本作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件とはいっさ
い関係ありません。

序文

彼女は水底で夢を見ている。

それは昔々で語られるべき物語。ただ、彼女にとっては三年前の出来事だ。

彼は言った。

「必ず戻る。この刀に誓って」と。

彼女は答えた。

「お持ち、申し上げております」と。

それは平凡な物語。突き抜けるような青空と、生命を謳歌するセミの声に彩られた、ある夏の日の思い出だ。

……しかし、誓いがはたされることはなく。

彼は二度と彼女のもとへ戻らなかった。

彼を責めることはできない。どこか遠い地で、凶刃の前に倒れた彼を。

そして、彼女は決断した。

彼の許へ逝こう。

だから彼女の行動に迷いはなかった。

……しかし、願いが叶うことはなく。

彼女は湖底に眠っている。

ただ、想う。会いたいと。

そのみを念じ、彼女はたゆたう悠久にいた。

とぷん。

不意に耳朵じだを打ったのは、水音。

何かが池に投げ込まれた音。反応した彼女はまどろみの中で無意識に手を伸ばす。

つかむと、それはとても汚れていた。

が、彼女は感じたのだ。その奥底で「帰りたい」と慟哭どうくする彼の心。

これは彼のかげら。誓いはいまだ生きていた。いや、侍たる彼が誓いを違えるはずもなかったのだ。

ならば、彼は必ず帰るだろう。

ならば、出迎えねばならない。誰よりも早く声をかけ、抱きしめるために。

彼女はぼんやりした意識のまま、ゆっくりと登っていく。やがて湖上に姿を現した。

夜。月は薄雲をまとい、虫たちは季節をあの日と同じ夏だと教えてくれている。

目を転ずれば、林には逃げるように走り去る人影があつた。

彼とどこか似た印象のある男。けど、彼ではない。茫洋^{ぼうやう}と見送った彼女は水面を歩き、地面に降り立つ。ここに、

——龍神は三百年の眠りより解き放たれた。

序文（後書き）

……これだけだと何のことか分かりませんね。

ご安心を。私もこれだけじゃ分かりません（笑）！

いずれ意味を持ってくるので、どうか末長いお付き合いを！

序章 手記とあるレポートについて？（前書き）

さて、本文スタートです。「長い！」と友人たちにもさんざんこきおろされた前フリをお楽しみ（？）下さいませ。

序章 手記とあるレポートについて？

私はM県のローカル紙、さねおか実岡日報新聞文化部の記者である。名前はまだない。

……すみません。ちゃんとあります。ですが覚えていただかなくても結構です。なぜなら、私は物語というストーリーテラーのような立場にすぎないので。

さて、自己紹介はこの辺にさせていただきますとして。

いま私が座るデスクには、一部のレポートが置かれている。もちろん読むつもりでプリントアウトしたものだ。読むしかないのだが、私はマグカップ片手にその表紙をながめていた。そのまま読むのがもったいないような気がしたからだ。

——伊織いおり神社の真実。

そう銘打めいたれたレポートには、研究者として「有川ありかわにしき」「石和修二さわしゅうじ」「けどういんあきら祁答院晶」と三人の名前が列記れっきされている。共同研究の際はボスの名前を最後に書くのが一般的なので、祁答院晶という人物がこの論文の責任者になるだろう。

——祁答院晶。

なつかしい名前だ。私の旧友にして、今は大学の助教授として教鞭うべんをとり、このごろは新進気鋭の民俗学者として注目されている男である。

ひさしぶりに会ってみたい。

そう思いながらコーヒーを口へ運んだ私は、なかば無意識でタバコを探る。取り出してからようやくここがオフィスだと気づいてポケットへと戻したとき、一挙両得の妙案も思いついた。

祁答院に取材を申し込み、その解説付きで読めばいいじゃないか。

私はさっそく編集長に彼を取材したいと打診してみた。当然、思いつきはナイショだ。

結果は一発でゴーサイン。ローカルTVにもコメンテーターとして出演する祁答院の知名度を考えれば、当たり前なりゆきだろう。むしろ編集長は私と彼が旧知の仲と知って驚き「コネクションを利用して、コラムの集中連載を頼め」と大号令をかけてきたほどだった。

上機嫌でデスクへと戻った私は、すぐさま祁答院に連絡をとる。コールは三回。名乗り、用件を伝えると、彼は電話の向こうでバリトンがかった声をはずませていた。

『ひさしぶりだね。元気にしていたかい？ 私の取材？ それは光栄だ。ちょうど新しい論文も完成したばかり……え、もう手元にあるのかい？ うれしいね。ぜひ来てくれたまえよ』

快諾を受けた私が祁答院を訪ねたのは、秋も深まったある日の午前的ことだ。

我らが母校、私立（さねおか）実岡大学。卒業以来すっかりごぶさたしていたキャンパスは記憶よりいくらか古ぼけた感があり、当時よりまだいぶ洗練された服をまとう若者たちが吸い込まれていく。

時代はやはり流れている。

私は校門の前にたたずみ、そんな感想を抱いていた。

だが彼らをよく観察していると、案外そうでもないのかという結論にたどりつく。大きなヘッドホンをつけてポケットに手を突っ込み、背を丸めて歩く孤独な男の子。威勢のいい会話に花を咲かせながら通り過ぎる華やかな女の子のグループ。鍛え上げた肉体を誇示（こじ）するかのようにはが物顔でのし歩く運動部軍団。手を振りながら別々の方向へ向かうカップルは学部が違うのだろう。

外見が変わっただけで、行動自体は七年前とたいして変わっていないようだ。目立つ点は、携帯電話をいじっている学生が格段に増えたくらいだろうか。

私は口元をほころばせつつ校内へと足を踏み入れ、大きな案内板の前に立った。

目的地の名前は知っているし、かつては毎日通った場所。地理は頭に入っている。だが建物が計画性を持たずに増改築され続け、学内間の引越しもひんばんに行われるこの大学で、昔のデータは役に立たないのだ。

案の定（あんじょう）、目的地は記憶と違う場所だった。山一つをまるまる学校にした、広大な敷地のいちばん奥。徒歩で十五分はかかるだろう。

やれやれと息をつき、歩き始める。

道中、坂を登り、坂を登り、坂を登り。

こっちはもう若くないんだ、ふざけるなとどなりたくなったころ、
ようやく頂上へとたどりついた。

あと半分。息を整えるために立ち止まる――

序章 手記とあるレポートについて？（後書き）

……主人公が出てきませんでした。

ちなみに次回も出ません！ よろしく（笑）！

序章 手記とあるレポートについて？（前書き）

今回、ようやくレギュラー陣が初登場します。本気で前フリ長いな

……

舞台版でも大活躍（？）した彼女たちの非道っぷりをご堪能あれ。

序章 手記とあるレポートについて？

あと半分。息を整えるために立ち止まる。

ふと振り返れば、眼下^{がんか}には東北随一の美しさと謳^{うた}われる実岡^{さねおか}の街並みが広がっていた。

中心街からやや離れた場所には小高い丘があり、壮麗^{そうれい}な天守閣も建っている。あれがご当地の英雄である戦国大名の城。その全景をカッコいいと思ってしまうのは、地元びいきな私の色メガネだろうか。男伊達だったと伝わる大名の威風^しを偲^{しの}んでいるのかもしれない。

そうそう。カッコいいといえば、祁答院^{けとういん}は相当なカッコつけだ。

外見は男女問わず美形と言わせるほど完璧だし、服のセンスだっ
てかなりのもの。性格に関しても表面は温和で知的なキャラを保
っている。わりとすぐ崩れるのが欠点だが、その裏には勇氣と優しさ
がある。二枚目と三枚目を使い分けられる彼のよさと受け止めるべ
きだろう。それゆえに親しみやすいのだから。

ちなみに。

彼にはもう一つ致命的な欠点がある。これについては心ある友人
としてあえて触れずにおくが。

それはさておき、前述^{ぜんじゆんぜ}した祁答院の特徴を考察するとかかなり女性
受けしそうな気がする。じっさい学生のころ、私は女性から彼との
仲を取り持ってくれと何度も頼まれたことがあるほど。しかし大学

時代から現在にいたるまで、彼の浮いた話は一つも聞いたためしかなかった。

『それどころではないのだよ。私には手のかかる相棒がいるからね』

理性的な瞳^{ひとみ}に親愛の情を込め、当時の彼はそう笑っていたものだ。

なつかしい。彼は今も変わらないのだろうか。

疑問には会えば答えが出る。気合を入れなおして歩き出した私は、しかしすぐに足を止めてしまった。

原因は周囲にただよつただならぬ気配。

神経を研ぎ澄まし、あたりの様子をうかがう。あきらかに好意ではない。かといって、敵意とも少し違った。あえて言うなら、獲物を狙う肉食獣の気迫、がもっとも近いイメージか。

理由も正体も分からないまま、私はおそろおそろ気配を感じた方へ顔を向ける。

その先には高さ二メートル、直径はゆうに八メートルはある巨石があった。

この岩の名前は、通称「てっぺん岩」。しめ縄が巻かれているのは大学の守り神として扱われているせい。学生同士の待ち合わせにも使われ、近辺では怪奇現象が絶えないと大学七不思議の一つにも数えられる名物だ。

ただあたりに人気はなく、それ以外の物も見当たらない。さすがに石はにらまないだろう。気のせいだと片づけて先を急ごうとしたとき、私は視界のはじめに犯人を見つけた。

岩の陰。外見は十歳くらいの男の子、ではなく女の子——鼻つ柱の強そうな顔をしているので、パツと見は男の子に見える——が、小首をかわいく傾^{かし}げてこちらを観察していた。

姿を確認した私はゴクリとつばを飲み込み、思わずあとじさる。

いかに私が格闘経験のない文系人間とはいえ、たかが武器を持たない女の子ひとり。恐れるに値しない。それでも私が恐怖した理由は、彼女の正体を知っていたから。

彼女の名は古砥部^{こていぶ}。祁答院に取り憑^よいている犬神である。

犬神は、犬神に限らず神や妖怪^{たぐい}の類は、本来その姿を見ることができない。当たり前だ。ではなぜ私は見えるのか。問われてしまうと、生まれつきとしか答えようがない。これは見鬼^{けんき}という能力らしい。とにかく見えてしまうのだ。

しかし私にはそれ以上の力、たとえばお祓いしたり退治したりできる特殊能力はなかった。ほしいとも思わないが。だいたい、そんな力はタブロイド紙ならとにかく一般紙の記者として生きていく上でまったく役に立たない。唯一の恩恵は、古砥部が見えたがゆえに祁答院との仲が続いているくらいだろう。

また、私の耳学問^{じがくもん}を披露^{ひょう}すれば、犬神は狗神または隠神とも表記し、人に憑依^{ひょうい}する犬の霊である。伝承に伝わる代表的な姿は体長二十センチ程度。体にまだらがあり、尾の先端が分かれているという。

私は改めて古砥部を観察してみる。先ほどの知識がほとんど当てはまっていなかった。人型の彼女は藍色の狩衣をまとい、下はすね丈の袴に裸足。将来はきつと有望であろう容貌には、まるで歌舞伎役者のような赤い隈取りが施されている。

そして、きれいな茶——キツネ色をした髪からぴよこんと飛び出た、柴犬のような耳。私を知る七年前と寸分変わらない容姿をしていた。

おそれることはない。古砥部とは知り合いじゃないか。

私は自分にそう言い聞かせ、ひさしぶりと声をかけながら一歩進み出た。しかし古砥部は私にチラリと一瞥をくれるだけ。パイと元の場所を凝視し始める。どうも忘れ去られているらしい。それで悟った。古砥部の目は、私を捉えているのではないと。

私は一回二回と首を交互に傾げる古砥部——見た目のかわいさにたまされてはいけない。あれは肉食動物が獲物を狙うとき、音を聴いて距離を測るための動作だ——の視線を追う。

到達点は私の手元。そこには、他ならぬ古砥部への手みやげにと用意した「焼き鳥つめ合わせ」入りのビニール袋が握られていた。

ビニール袋を右へ、左へ。つれて古砥部の顔も右へ、左へ。

間違いない。狙いはこれだ。つい調子に乗った私は、「お預け！」
と試してみる。

「……………」

これは失言だった。古砥部の顔色はみるみる変わり、目には剣呑^{けんおん}の色が宿っていく。

しまった。古砥部は犬扱いすると怒るんだったな。

思い出した私はあわてて謝り、ビニール袋を差し出……そうとした瞬間、反射で引いた腕にすどい痛みが走る。続いて通り過ぎた風の進行方向には、先端が割れたしっぽと髪をなびかせて猛然と走り去る古砥部の後ろ姿があった。

私はあつけにとられて見送ったあと、手が妙に軽くなっていることにも気付く。焼き鳥入りのビニール袋は、取っ手部分を残してなくなっていた。

気分はまるで、針ごとエサを取られた釣り人状態。単なるゴミと化したビニールをポケットにしまい、ついでに上着のソデをまくって痛みの元凶を確かめる。かみつかれたらしい。腕にはくつきり歯形が残っていた。

そう言えば、犬神の力は呪詛^{じゅそ}。呪われ、取り憑かれた人間は災難にあつて財産を失ったり、犬憑きと呼ばれる病気（症状は狐憑きとほぼ同じ）になって死ぬこともあるという。そうやって命を落とした人間には、体のどこかに必ず犬の歯形が残るらしい。

災難にあつて財産（焼き鳥）を失う。被害者の体に歯形が残る。ある意味で正解か。

また、犬神使いには二通りのケースがある。
生きている犬を残酷な方法で殺して犬神にする単発の使い手と、

家系——いわゆる犬神筋の人間に遺伝（？）で伝えられるケース。
祁答院は後者だ。

ともあれ、行こう。

私はため息をつき、トボトボ歩き始める。

と、すぐに後ろから声をかけられた。

「あの、すみません。ケガ、しませんでした？」

振り向くと、申し訳なさそうにした女の子がいる。歳は二十歳前後で、白いニットの上衣に細いデニムというさっぱりした外見。この現役生だろう。

私は驚き、大丈夫だと手を振りながら彼女に訊ねた。彼女の発言は先ほどのやり取り、すなわち古砥部が見えていなければ出てこないからだ。

「私もよく解りません。でも見えるものは見えるんだから、それでいいじゃないですか」

彼女はおそらく本来の持ち味であろう魅力的な笑顔で答えてくれ、私が古砥部を知っており、その相棒、祁答院の友人であることや、今日は彼を訪ねてきたことを告げると、彼女は案内も買って出てくれた。

私はありがたくお願いし、連れだって歩き始める。

「センスにもちゃんと友達いたんですね」

辛^{しん}らつな中にもどこか親しみがこもった物言いをする彼女は、有川にしき。人類文化学科の三年で、祁答院ゼミのゼミ生だと自己紹介してくれた。

「それにしても、古砥部ってホントに犬神なのかな？ 私はそのういうのくわしくないし、犬神っていうのも自称ですからねー」

笑いをかみ殺す有川の言葉は、私にもなんとなく理解できる。

古砥部の第一印象はオオカミ少年かイヌ少年。呪いや災厄を人にもたらすと言われる犬神本来の恐ろしさをまったく感じない。実害を受けた私からして、他^{たあ}愛^{あい}ない子供のイタズラくらい大目に見よう、程度にしか思っていないのだから。

「でもそういうの抜きにして、古砥部はホントかわいいと思いますせん？ いつも元気いっぱいなのに、イタズラを注意したらシューンってなっちゃうし。こう、思わずギューってしたくなっちゃうくらい」

それは有川も同じのようで、小動物と子供の一体化というある種の魔術めいた魅力に完^{かん}膚^ぷなきまでやられてしまっていた。

二人で世間話をしながら下る遊歩道の向こうに目指す建物が見えてくる。記憶よりさらに古くなった四階建ての校舎。人類文化学科が入る十三号棟だ。入り口のわきには大学のマークが入った白いワゴンボックスが停まっており、後部ドアが開放されている。資料の搬入作業だろう。そばにはやはり学生らしき青年がいて、やる気ゼロといった様子で台車に段ボール箱を積み上げていた。

「修二おはよー」

顔見知りらしい有川が、ボサボサ頭にしわくちやのシャツ、カーキ色のカーゴパンツをはいた、いかにもしょっぱいその青年に声をかける。

「にしきか。これ運ぶの手伝ってくれ」

「やだ。だって見るからに重そうじゃん、それ。それより人があいさつしてるんだから、ちゃんとあいさつで返してよ」

「……へいへい。はよっす。んじゃ、これ手伝」

「やだ」

これだけで力関係が分かるやり取り。身もフタもない有川の返事に、修二と呼ばれた青年はぶぜんとした表情で作業を再開する。

それを見た有川はさすがにかわいそうだと思ったのか、

「いまセンセを訪ねてきたお客さんの案内をしてるから、あとで手伝ったげる」

と彼の背中に告げた。

先ほどの件といい、根は親切な子だと私は感心したのだが、青年の様子はおかしい。手を止めて有川を疑惑の目で見ている。

彼女はそれを気にせずくると踵かかひすを返し、

「ランチおごってくれたらねー」

邪悪な笑みからくり出す捨てゼリフと共に、すたすた建物に入ってしまった。

私は青年、おそらく石和修^{いさわしゅうじ}二君に内心で合掌しつつ、有川のあとを追う。

二階に上がって長い廊下を歩く途中、私はあることに気付いた。リノリウムの床を、小さな足跡が同じ方向へ向かっている。しかも裸足で泥は生乾き^{なまがわ}。答えは一つしかない。はたして足跡は有川が立ち止まった地点でドアに吸い込まれて消えていた。

そのドアにはゴチャゴチャと貼りものがされている。

まずネームプレート。「研究室No.13 祁答院晶」とある。十三号棟の13号室。偶然なのか狙ったのかは分からないが、ここまでこだわれば、いっそ清々（すがすが）しい。

もう一つ。「猛犬注意！」のプレート。よくホームセンターで売っているアレだ。下には有川が描いたらしい、古砥部が毛を逆立て「シャギヤー！」と警戒しているラフスケッチが張り付けてあったりする。

他にも、こんな文書があった。

祁答院ゼミ 三ヶ条の心得！

一、古砥部と仲良くしよう！（存在を否定したり犬扱いすると怒ります。呪われたり、かぶりつかれたりするので注意！ 肉をお供えすると効果的。ドッグフードは物によって。不味いと逆上するので要注意！）

二、先生に対して「変」あるいは「変態」と言わないようにしよう！（激しく取り乱します。おもしろいので、あえて言うのは可。そのさい発生する周囲からの誤解と気まずい空気、および先生が終了後にやる露骨なごまかしは笑顔でスルーして下さい）

三、恵まれない先生に愛の手を！（古砥部の破壊活動により、学内における先生の立場は非正常に危うくなっています。ホントはどうでもいいけど、路頭に迷わせるのはさすがにかわいそうなので、みんな協力しましょう）

……私があえて触れなかった祁答院の欠点は、二番あたりで学生たちにもバレバレのようだ。愛されてはいるようだが、もてあそばれてる感もかなり漂っていた。

ノックを二回。「失礼しまゝす」と言いながらドアを開ける有川に続き、研究室に入る。八畳間の空間は、およそ三分の二を林立する本棚に支配されていた。残りのスペースには、安っぽい応接セットと昔なつかしいねずみ色をしたスチール製のデスクが置かれている。

焼き鳥の香ばしい香りに包まれた室内には二つの人影があった。

小柄な一人は応接セットのソファに腰かけ、一心不乱に何かをむ

さぼり食っている。たぶん焼き鳥祭りだ。

もう一人の男性は、デスクのへりに腰を預けて本を読んでいる。いずれも窓からの光が逆光となり、ここからでは容姿が分からない。

「センセ、お客さんを連れて来ましたよ」

声を張り上げる有川に促され、私は部屋の中ほどまで進んだ。

「やあ、君か。待っていたよ」

気付いた友人は腰を上げ、姿があらわになる――

序章 手記とあるレポートについて？（後書き）

お約束通り、主人公はまだ登場しませんでした！

その分、次回の彼は恐ろしくしゃべります！ 舞台版では真っ先にカットした、原稿用紙換算で三枚以上の長ゼリフにこうご期待！

序章 手記とあるレポートについて？

気付いた友人は腰を上げ、姿があらわになる。

すらりとした長身を黒いスラックスとチヨツキ、品の良いネクタイに包み、ゆるくウェーブがかかった髪からのぞく顔立ちは、日本人離れした彫りの深さ。文句なしの美形だ。低音で響く渋い声も、男の私が聞きほれるほど。

彼こそが祁答院^{けとういんあきら}晶。当年とって二十九歳を迎えた、私立実岡大学文学部、人類文化学科の助教授である。

私は再会のあいさつをし、苦笑しながら「やられたよ」とばかりに腕を見せた。

「……やはりか。悪かったね。ほら古砥部^{こてべ}、彼に謝るんだ」

あたたかい笑みを浮かべる祁答院は、古砥部の頭を軽く叩いて促す。

「あ、さっきのヤツ！　むー、古砥部は悪くない！　お預けなんから悪いんだ！」

焼き鳥から顔を上げた古砥部はようやく侵入者の存在に気付いたらしい。私を見るなり不満の声をもらした。

しかしあの時、古砥部はどう見ても焼き鳥の強奪を企てていたはず。実害もこちらだ。それでも当人が子供人以上、ここは大人が手本を示すべきだろう。私が自己紹介しながら謝ると、祁答院が言葉

を接ぐ。

「ほら、彼もあやまっているだろ？ 古砥部もあやまるんだ」

「むー、……ごめん」

しぶしぶ、といった感じで古砥部が頭を下げると、祁答院はにっこり笑いながら彼女の頭をなでる。その光景はまるで親子のようだった。

「じゃあセンセ、私は修二を手伝ってきますね」

この報酬はファミレスじゃ安いよね、と極めて不穏な発言を残して有川が退室する。軽く肩をすくめてそれを見送った祁答院は私に席をすすめた。

「さて。さっそくはじめようか。私のレポートに関する取材、でいいんだよね？」

優雅な足の運びで移動した祁答院は、例のレポートを片手で取り上げながらデスクに寄りかかる。私は頷き、すすめられた席――再び焼き鳥祭りへと没頭しはじめた古砥部の対面に腰を下ろした。

胸いっぱい炭火焼き臭。だが満面の笑みを見ると、なんだかこちらもうれしくなってくる。

私が目を細めて注視していれば、気付いた古砥部はピタリと動きを止めて「む、一本食うか？」とばかりに無言かつ超スピードでつくねを突き出してきた。彼女なりの仲直りの証だろう。私は何も言わずに顔へ飛んだタレをぬぐい、ありがたういただく。

「じゃあ話に入る……前に、妖怪学について軽くおさらいしておくか。君も現役を離れてずいぶん経つしね」

どこまでも親切な祁答院の提案。私は少し考える。憶えてはいるが、悪くはない提案だ。ただ、「よろしく」と返事をしようとした口はつくねを頬張っているためにふさがっている。仕方なく首を縦に振った。

「分かった。まず妖怪学とは、民俗学という学問の一ジャンルにカテゴライズされる学問だ。

民俗学とはズバリ『日本人とは何か』をテーマに各地に散らばる民話や伝承、絵画あるいは文化などを通じ、昔の人々の生活や考え方を知らうという学問だね。

そして妖怪学は、中でも妖怪伝承を通して民俗学を研究する学問だ。決して、妖怪の能力や弱点を研究する学問ではないよ」

根がまじめな祁答院にしては、珍しい諧謔^{かいぎョク}。渋い笑みをたたえたままの唇は、分かっていると目で伝える私を確認して講義を続ける。

「具体例を挙げてみようか。たとえば鬼という妖怪。頭に角を生やし、屈強な肉体に普通の人間とは違う肌の色、トラ柄の腰巻きを身に付け、金棒を持ち、悪事を働く、というのが一般的なイメージだ。

これを解析していこう。まず、異様な容姿。これは当時の中央政府とは明らかに違う人種を指していると推測できる。アイヌなどの異民族、鉱山労働などの特殊な職業につく人、あるいは日本に住み着いた外国人……こういった人々を学術用語で『異人』と呼ぶんだ

が、彼らをデフォルメしたと考えるべきだろう。

次に、屈強な肉体。これは当時の人々がどれほど彼らの強さをおおそれていたかの証拠だね。

トラの腰巻きに関しては、トラがこの国にいないことを考え、彼らはそれほどまでに遠くに住んでいると考えられていたのだと推察できる。

そして、なんと言っても鬼の金棒。これは彼らが鉄を精製できる技術力を持ち、かつ武器にしていた証拠だ。

悪事を働く点に関しては、彼らがやはり時の中央政府に敵対する存在だったからだろう。異民族か、はたまた純粹に山賊か。そこから想像すれば、桃太郎のおとぎ話などに登場する鬼の宝は異民族が領有していた鉾山を分かりやすいイメージにした可能性がある。

桃太郎がどんな事実を元にした話なのか、まだ正確には判明していない。まあ有力説はあるし、大元のオリジナルは西遊記らしいけどね。とにかく現時点で、桃太郎は必ずしも正義の味方とは言えない。それどころかただの侵略者だった可能性もあるわけだ。

また、鬼は『おぬ』。すなわち『隠』とも関わりを持ち、さらには疫病とも結びつけられた。見えないから正体が分からない。しかし、人を殺す恐ろしいモノ。なら、きつとこんな姿をしているのだろう――

……こうして、鬼には形が与えられた。

そして我々は、鬼というフィルターを通して当時の人々を知るこ

とができるんだ。これが妖怪学だよ」

「どうかな？ と祁答院は私の顔色をうかがう。

問題ない。まだ私も基本は憶えていたようだ。つくねを食べ終えて首を縦に振ると、頷いた祁答院は懐かしむように言葉を紡ぎ出していく。

「では本題に入ろうか。あの調査は本当に思い出深いよ。なにしろ本物の龍神様が現れて、私と言えば探偵の真似事までするハメになったんだから。まあとにかく。我々が調査に行ってきたのは三ヶ月前。お盆の頃だ。あの日はまず昼過ぎに大学を出発して……」

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

彼らが乗せたワンボックスカーが目的地——I県奥村町の道路標識を通り過ぎたのは、夕方に差し掛かるうという時刻だった。

車窓を流れる景色は見わたす限りの水田とため池。あちらにぼつん、こちらにぽつんといった具合で小山もあり、それぞれの山のふもとには二、三軒ずつ民家が建っている。さえぎる物のない視界は遠くに色あせた市街地も望め、それらはすべて傾きかけた夏の日差しに染まっていた。

「あとどのくらいで着くんだい？」

車内もまた、絵の具を流したような茜色あかねに包まれている。ハンドルを握る祁答院けとういんは、正面に来た西日に顔をしかめながら同乗者達に訊ねた。

「むー、まだかー？」

まず反応したのは助手席の小さな相棒、犬神の古砥部こしへ。手足をバタつかせながらむーむー唸りうな続けている。すでに大学を出発してから五時間強。表をかけずり回るのが大好きな彼女にとって、自分で走れないドライブは退屈極まりないらしい。

「こら、暴れないの。これあげるから」

続いて後部座席から苦笑いで伸ばされた有川ありかわにしきの手には、小袋に入った犬のおやつが握られている。古砥部は目にも止まらぬ早

さでそれを奪い取り、満面の笑顔でぱくぱく食べ始めた。到着うんぬんはもうどうでもいいらしい。

「有川さん。今はあまり食べ物を与えないでくれ」

祁答院は心配げに助手席を見やった。

食べているときと寝ているとき以外、片時もじっとしていられないこの犬神（野生児）は、文明の利器と相性が悪い。イコール、乗り物酔いがひどい。しかもガマンという言葉を知らないので「む、気持ち悪い」発言からリバーズが発動するまで、タイムラグもない前兆として動きが鈍くなる、口数が減る、といったサインがあるので保護者が見逃さないよう注意する必要があった。

「もう大丈夫ですよ。地図見たら、そんな大きい町じゃないし。かかってあと二十分くらいじゃないですか？」

楽天家ではあるが、現実家でもある有川の見立てにまず間違いはない。祁答院は「そうか」と短く返答し、運転に集中し始める。

と、助手席から「げふー」という満足げな声が上がった。

古砥部はもうおやつを食べきつたらしい。視界の隅にはウェットティッシュで彼女の口元を拭う有川の手と、くすぐったそうにしながら大人しくしている古砥部の姿があった。

微笑ましい光景に、祁答院は相好を崩しながら思う。

祁答院が生まれてこのかた、古砥部はずっと今の姿で共にあった。そして自分以外の人間に姿が見えない彼女は犬神だと、子供の頃は

信じて疑わなかったものである。

だが祁答院が歳を重ね、興味を持って調べていくうちに疑問が生じた。

いわゆる家系に伝わる犬神は、伝承には女系遺伝とされている。その一族の女性にしか取り憑かない。古砥部に質問しても、『よく分らん!』と自信満々に言うばかり。自分は生まれる性別を間違えたのではと落ち込みもしたが、さらに調べ、研究を重ねていった祁答院はいつの間にか大学で民俗学と妖怪学の教鞭きょうべんを執るに至っている。

若くして助教授の地位を手に入れられた理由は、古砥部の助力も大きかった。

専門的な知識がなくとも、本物の人外である彼女のアドバイスは本質を的確にえぐる。それに歴史的証明を付け加えた祁答院の論文は、彼を大きな成功へと導いたのだ。使い手に幸福をもたらすという犬神の伝承そのままだった。

もともと、祁答院が幼少期に周囲から孤立し、現在に至るまで？変人？のレッテルを張られ続けているのも古砥部のせいだが。

どうも彼女の行動が周囲に影響を与えた場合、見えない人間には自動的に？近くににいる誰かがやった行動？として認識されるらしく、必然ひつぜん、一番そばにいる機会が多い祁答院がその責任をかぶるハメになるのだった。

「あと十五分くらいすよ」

ここでようやく最後の一人、三人のやりとりを「苦々しいが興味なし。なるべくなら他人を装っていたい」という態度でながめていた石和修二が沈黙を破った。

それも仕方ない。古砥部が見えない石和の目に、三人のやりとりは？ 祁答院が犬のおやつをすごい勢いで食べ、その口を有川がふいていた？ という謎の現象として映っていた。さらに三人の会話から古砥部のセリフを抜いた光景を思えば、彼の反応は当然と言える。祁答院と有川の言動はイタイ電波を受信中なカップルのそれだ。はたから見ればまず近寄りたくない人種だろう。

「次の信号、右です」

頭痛をこらえるかのように吐き出す地元民、石和の指示に従って祁答院はウインカーを出す。交差点を右折すると、景色は田んぼばかりいかにも古くさい商店街へと変わっていった。

「はー、これはホントに田舎ですねえ」

外をながめていた有川の直球な感想に、石和は顔を天井に向けて唇をとがらせる。

「来る前からそう言ってただろ。遊ぶとこなんか、駅前のパチンコ屋と俺が高校の頃にできたカラオケボックスくらいだ」

ちょうど駅前のロータリーを通り過ぎる。こちらも周囲に負けず劣らずのひなび具合で、目立つのはオンボロと呼ぶにふさわしい木造の駅舎と最大手のコンビ二軒、これだけはむやみやたらとデカイパーラーなんとかというパチンコ屋くらい。そのカラオケボックスとやらは確認できなかった。

「……つぶれたらしいな」

ワンボックスの中に、石和の乾いた声が響いた。

ともあれ、車はひた走る。景色はいちおうの繁華街から昔は武家屋敷が建ち並んでいたらしい一軒あたりの敷地がやけに広い住宅街を抜け、やがてゆるやかな峠道へ。

アップすると原生林、ダウンすると田んぼや用水池、たまにぽつんと人家という、おそらく日中を通りがかれば緑一色、夜間に通り過ぎれば黒一色だろう丘陵（きゅうりょう）地帯を走り抜けていく。

（なるほど。都会に住む人間の心があもささくれ立つのは、目に入るものからしてストレスを感じるものばかりだからなのかもしれないな。だとすれば、鉄筋コンクリート造りの校舎で勉強する子供達の心がすさむのも当然ということか）

ゆるやかな道と優しい景色は見る者の気持ちもゆるやかにするらしい。見る者——祁答院はリラックスしながらそんな思考に耽り、いや、こんなことを考えている時点でまったくリラックスしていないじゃないかと脳内にツツコミをかまし、しかし私は学者であるからにして、いかなる時にも論理的な思考をしまうのは仕方ないのだと自己弁護までしてしまう。

そんな祁答院が一人上手つぷりをいかんなく発揮していると、不意に視界がひらけた。

「うわ……」

たちまち上がる有川の感嘆。^{かたん}

景色はこれまでとほぼ同じでありながら、明確に違う点があった。山に囲われた盆地いっばいに広がる茜色の田園は、立地条件のせいだろう、送電用の鉄塔やよく線路沿いの田んぼに立っている看板がまったく見当たらない。都会っ子な有川の心をわし掴^{つか}みにしてしまふほどの素晴らしい場所だった。

印象的なのは、背後に大きな池と雑木林を抱えて建つ鳥居か。ぱっと見では人家も見えないこの空間において、それはとても目立ち、アクセントを加えていた。

「スッゴイきれい」。あ、あれが例の神社じゃないですか？」

来てよかったとはしゃぐ有川の気持ちは頷^{うなづ}き返す祁答院にも理解できる。

ここは、かつてこの国にありふれた風景を今なお保っていた。

日本人なら誰しもが心の奥に思い描く、なつかしい故郷。それを現実のものとし、初めて訪れた人間にすら強烈なノスタルジーを与える場所。

（たしかに絶景。少し怖いくらいに）

まるで時の流れに取り残されたかのような土地。車を運転している祁答院ですら、ここへ入った一瞬は時間の概念を見失いかけた。

—— いったい、今はいつの時代だっただろうと。

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

—— いったい、今はいつの時代だっただろうと。

わずかに身ぶるいする^{けとついでん}祁答院が駆る車は、これだけがかるうじて現代だと教えてくれる^{ほそつ}舗装道路を走り抜けていく。

目的地はもうすぐそこだ。間もなく到着し、鳥居のかたわらにある^{いしづみ}碑に、

—— 伊織神社

と銘^{めい}打たれているのを確認した祁答院はバンを停めた。

「みんな、長時間のドライブお疲れさま。荷物は車に積んでおいて、まずはお参り。それと、現地の確認をしよう」

「着いたー！」

^{こしへ}古砥部は話の途中で飛び出していく。

「あんまり遠くに行っちゃ駄目だよー！」

^{さわ}有川の注意は届いているかどうか。ドアを開けた彼女に続いて石和も車を降り、それぞれに体をほぐし始めた。

「まったく。開けたら閉めると何度言ったら分かってくれるんだか……」

祁答院は眉を寄せながら上体を伸ばし、助手席のドアを閉める。キーを抜いてから自分も道路へ降り立った。

とたんにアスファルトから熱気が立ち上ってくる。体はまだかうじてエアコンの冷気をまとっており、心地よい暑さだと認識しているが、汗がふき出すのは時間の問題だろう。

少々オヤジくさい感慨にふける祁答院が肩や腰を回していると、有川が歩み寄ってきた。

「ずいぶんかわいい神社ですね」

彼女の言葉に頷き返す祁答院は、改めて今回の研究テーマに選んだ神社を見た。

遠くから見かけたときには遠近感がつかめず、どの程度の大きさが分からなかったが、間近で観察すると意外に小さい。鳥居にいたっては大人が手を広げれば両の柱に手が届きそうなほど。鳥居も一般的イメージの朱色ではなく、石造りそのままの灰色だ。

多くの観光客が訪れる名刹のような壮麗さはない。が、元来の地域に根ざした土地神——産土を祀る神社はこんなもの。ろくな管理もされずに荒れ放題な社も多い中、立地条件、管理の状態、神社自体が持つ趣。いずれを取っても携わる人々の心根のよさを感じさせる。小さいながらも素晴らしい神社だった。

「うつむ……」

しかし見つめていた祁答院は何かに引っかかりを感じ、立ち入り

をためらう。

そもそも、夕刻に神社へ立ち入るのはあまり良くないとされる。ちゃんとした理由もあり、それを知る祁答院が二の足を踏んでしまうのは、自分自身でも分かる。分かるのだが、

（この違和感はなんだ？）

体をおそうのは、この土地へ入った瞬間に感じ、今や最高潮となった不安。じわじわと真綿で首をしめられるような圧迫感を覚えた祁答院はため息とも深呼吸ともつかぬ息を吐き出した。

他の人間は気付いていないらしい。祁答院は目をこらし、それがなんであるかを探り取るうとする。が、見えるだけのド素人である彼に正体は分からない。歓声を上げながら鎮守の森を走り回っている古砥部なら理解できるかもしれないが、彼女の説明は言葉が足りない場合も多い。あまり当てにはならないだろう。

「……まあ大丈夫だ」

心に刺さった小さなトゲを振り払うべく、祁答院はわざと口に出した。

「センセ、ボーツとしてないで、ちゃっちゃんとお参りしちゃいましょう」

肩をたたく有川に、祁答院は微笑びしょうを作りながら答える。

「そつだな。では石和君、指導をよろしく頼む」

「へ？　ここは特別な形式なんかないっすよ？」

二人の会話は、お参りの仕方について。正式、というより基本的な参拝の作法は存在するが、中には出雲大社いずもおおやしろや伊勢神宮など、独特の参拝形式を持つ神社もある。

「分かった。ではオーソドックスにこう」

祁答院は二人を促す。まず最初の作法として、敷地の外から拝殿に向かって会釈した。

この行為をたとえるなら、家の呼び鈴をならす行為くらいに相当するだろうか。神域は屋内に準じる場所だと認識していいだろう。また、神様へ敬意を示すために、敷地内へは帽子やコート類を脱いでから入るのがマナー。このへんの礼儀作法は、形は違えどよその家を訪問するときとまったく同じだ。

ついで鳥居をくぐる。ここでも注意点が一つ。参道さんどうの中央は神様の通り道であるため、はしを通らなければならない。が、

「つーか、鳥居と参道の幅はばがこんなじゃ、無理ですって」

やろうとすれば力二歩きしかない。至極しごくもつともな石和の指摘に従い、三人は堂々と中央と通り抜ける。

中はセミの大合唱。会話に支障をきたしそうなほどの喧騒けんそうに包まれていた。息がつまりそうな樹木の香りもただようが、池から流れる風が心地いい。いくらも長さのない参道を歩いて行く。

やるべきことは、もう一つあった。穢けがれを祓はらうため、手水舎てみづやあるいは神前に流れる川で手と口をすすぎ、楔みそぎを行わねばならない。

「水、どこにもありませんよ?」

今度は有川の一言。手水舎はおろか水道すら見当たらなかった。

「ペットボトルの水で……」

「古砥部がぜんぶ飲み切っちゃいました」

「よし、そのまま行こう」

祁答院は華麗に解決策を提案し、三人は拝殿の前に立った。そろって二礼二拍一礼し、賽銭箱にお金を捧げる。

「二人とも五円って……修二はまだ分かるけど、センセはシヨボすぎです」

つごう三枚の硬貨がさいせん箱へと消えた後、五百円玉を投じた有川が批難の視線を向けてきた。

「し、神道の神は、金銭を強制的に徴収する存在ではないのだよ。自分の罪に応じ、それに見合った金額を差し出すのが正しい。断じて、古砥部の食費と減給のせいで家計が苦しいわけでは、ないんだぞう?」

動揺うごゆしてはならないと思えば思うほど、解説という名の言い訳は声が震えていく。最後が疑問符になってしまったのが致命的。しかしありがたいことに二人からのツツコミはなかった。単に見透かされているだけかもしれないが。

——古砥部がもうこれ以上、大学の備品を破壊しませんように。

摂氏一度くらい気温が下がったような微妙に寒い空気がただよう中、祁答院は祈る。

その脳裏に浮かぶのは、つい先日の悪夢だった。

資料室から引つ張り出し、研究室のデスクへ置きっぱなしにしていた時価ン百万の稀観本^{きこうほん}は、明くる日に古砥部のイタズラでちり紙にも使えないほどビリビリに。保険が適用されたおかげで弁償^{べんしょう}は勘弁してもらえたが、ペナルティは三ヶ月間二十パーセントの給料ダウンだった。

「……一つ気になったんだが、さいせん箱だけやたらと真新しいのは、どういうことなんだ？」

お参りを終了した祁答院は、理由を知っているであろう石和に質問をぶつけた。

「ああ、こないだ賽銭^{さいせん}ドロがぶつ壊したらしくて、新しいのを買ったんすよ。勘弁して欲しいっすよね。いくらも入ってない中身の被害より、ガワのお値段のがずっと高いってのに」

「いくらくらいなの？」

会話に有川が割って入る。

「十五万弱」

「それは、けっこう痛い……」

「だろ？　たく、盗むんなら壊さないように盗んでほしいよ」

石和の意見は根本が間違っているような気もするが、意外と神社側の本音らしい。

「なるほど。では、本題に移ろうか。古砥部もな」

祁答院はちょうど目の前を走り抜けようとした古砥部を捕まえ、言葉を続ける。

「我々がこの伊織神社にまつわる伝承の調査に入る前に、まずは伝承そのものをみんなが知っておく必要があるだろう」

言いながら、一冊の本を取り出した。

——伊織神社の由来。

タイトルにそう記された小冊子の装丁は安っぽく、値段もついていない。おそらく著者である郷土史家——石和隆史が、神社を訪れた人達への配布を目的として制作したのだろう。肝心の伝承部分については文体がおとぎ話調になっており、読み物としても充分楽しめる内容になっている。祁答院はそれを朗々（ろろろ）と読み上げ始めた——

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

祁答院はそれを朗々（ろうろう）と読み上げ始めた。

* * *

むかしむかし（一七〇三年。元禄^{げんろく}一六年）。この地には伊織^{いさわ}とい
う貧しい武士のむすめと、石和^{いさわ}小兵太^{こへいた}という、これまた貧しい若ざ
むらいが住んでいました。

二人は好き合い、けっこんの約束をしていましたが、ある日、大
じけんが起ります。

小兵太のお父さんが、五郎左^{ごろうざ}というさむらいに殺されてしまっ
たのです。

その後、五郎左は逃げてしまい、小兵太はお父さんの死をとて
悲しかったです。

ですが、小兵太はさむらいです。さむらいであるため、お父さん
のかたきを取らねばなりません。小兵太はかたきうちの旅に出る決
心をし、お殿さまのゆるしをえました。

おはかまいりを終え、家宝の刀をこしにさし、いよいよ旅立とう

とした小兵太の前に、伊織があらわれます。

伊織は、泣きながら小兵太を止めました。

「五郎左はとても強い。小兵太さまもころされてしまう」と。

小兵太は、言いかえました。

「やる前からできないと決めつけるなんて、さむらいのはじだ。それに行かなければ、みんなから勇気がないとばかりにされてしまう」

伊織はさらに言います。

「勇気がなくてもかまいません。だから、二人で逃げましょう」

それは、小兵太もほんとうはそうしたいと思っていたことでした。

でも、小兵太はさらに言いかえます。

「二人で逃げたら、わたしのお母さんをみすてることになってしま
う。それはできない」

小兵太のお母さんは、もうおばあちゃんです。足もふじゆうで、
いっしょに連れて行くことはできません。

それに二人だけで逃げれば、こんどはお母さんがみんなからばかに
されるでしょう。親孝行な小兵太には、とてもできませんでした。

お母さんもだいじだ。小兵太のことばに、伊織はなにも言いかえ
せん。

それでも、伊織は小兵太のきもをつかんで引きとめます。ここで小兵太を旅に出してしまえば、きつともう会えなくなる。だからひっしにとめました。

「ごめん！」

そんな伊織を、小兵太はつきとばします。

心の中であやまりながら旅立つ小兵太のせなかに、ころんだ伊織は声をかけました。

「小兵太さま。いつまでもまっています」と。

立ちどまつた小兵太は「かならず帰る。この刀にやくそくしよう」と言いのこし、旅だつていきました。

しかし、一年たち、二年たつても、小兵太は帰ってきません。

伊織のお父さんは、「もう小兵太さんは帰ってこない。だからおまえのけっこんあいては、ちがう人にしよう」と伊織に言います。

伊織は「小兵太さまでなければ、いやです」とことわりつづけ、ついに三年たつたとき、町にはあるうわさがながれました。

小兵太が、どこか遠くの土地で五郎左に殺されてしまった、といううわさです。

伊織もこれを聞き、とても悲しみました。

そして悲しみのあまり、龍神さまが住むという大きな池へ、身を投げてしまったのです。

「小兵太さまのかたきを」

池にしないでいく伊織は、龍神さまにそうねがいます。

そのとき、伊織はふしぎな声を聞きました。

「おまえのねがいをかなえよう」

そして伊織は龍神と一つになり、池より舞い上がったのです。

ごろごろ、ぴしゃーん。

怒りに燃える龍神は大あらしを呼び、いかづちをまとって五郎左を追います。

追われた五郎左は、近くにあったお寺（旧仁？寺。現在は跡地）へと逃げ込みました。

でも、それくらいでひるむ龍神ではありません。口からまっかな炎をはき、五郎左をさらに追いつめます。

ついに逃げ場をうしなった五郎左は、お寺のつり鐘のひもを切り、その中へとかくれてしまいました。

なおも龍神はあきらめません。つり鐘を体でぐるぐる巻きにし、

ごうごうと炎をはきだします。

けつきよく、五郎左はつり鐘の中でむし焼きにされてしまい、伊織はねがいを果たしたのでした。

それでも龍神の怒りはおさまりませんでした。

お寺を焼きはらい、この地に大あらしをもたらしつづけます。いよいよ洪水が起こるすんぜんとなり、こまりはてたみんなは、そろっとお殿さまへおねがいました。

「この大あらしは、龍神となった伊織が怒っているせいです。このままでは、みんな死んでしまいます。なんとかしてください」

もちろん同じことを考えていたお殿さまは、さっそくけらいに命令して、池のほとりに神社を建てます。この神社に伊織神社と名づけてみんながまつると、ようやくあらしはおさまったのでした――

* * *

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

「……とまあ、それがこの伊織神社の由来だ」

一気に話し終えた祁答院けどういんは本をしまい、代わりに取り出したハンドタオルで汗を拭ぬぐった。

太陽はさらに赤く染まり、間もなく山の稜線りょうせんへ沈もうとしている。セミの声も、ヒグラシのどこか物悲しいカナカナという泣き声がいづ割合を増していた。

「はあ……悲しいような、いちおう仇は取ったからハッピーエンドと言えなくもないような、ちょっとしんみりするお話ですね。でも私は小兵太こへいたの行動にちよつと納得できないなあ。いくらお母さんが大事でも、伊織さんがホントに好きなら旅に出なきゃよかったのに」

感想に加えてはつきりとした自分の意見を述べる有川の姿は、夕闇に染まり長い影を落としていた。

「小兵太はあんまり頭がよくないぞ。強い相手に無理してケンカを売っても、いいことない。悔しくても、逃げた方がいい」

一方の古砥部こしへは、だー、と両拳を突き上げて話の内容に不満を示す。二者二様の答えは、現代人の感性と争いごとにおける鉄則だ。それぞれに正鵠せいこくを射ていた。

「当時の侍にとって、恥や武士道に反する行いは死に勝る不名誉と

されていたんだ。そうなるくらいなら、いつそ腹を切る。自ら死を選ぶことで、名誉を保つ。それが法律より重い不文律ふぶんりつだったんだよ。まあ、実際はそれほど厳密に守られていたわけでもなかったようだがね」

ただ、当時の人々の考え方や文化を知る、という民俗学の領分からは外れる。祁答院は興味や意見を持たせることに成功した教育者としての喜びを隠しつつ、おだやかに二人を諭した。

「はあ……それで仇討ちですか」

「別にやんなくてもいいじゃん。んなの」

「当時はそれが許される空気じゃなかったんだよ。分かるだろ、こう言えば？」

「古砥部、やるのが当たり前だから、やらなきゃいけなかったってコトだよ」

すでに理解した有川も加え、今度は二人がかりで言って聞かせる祁答院に、むーむー唸る古砥部はいまだ納得できないとぴょんぴょん跳びはね始める。

「んなの、ぶつちぎればいいじゃんよー」

「あんな古砥部、妖怪にもルールくらいあるだろう？」

祁答院は軽く嘆息した。外見以上に子供な古砥部にこれを分らせるのは確かに難しいし、そもそも学生どころか人ですらない彼女に、勉強を強要すること自体が間違いかもしれない。だが人と一緒

に暮らし、生きていく以上、道德についてぜひ学んで欲しかった。

「妖怪いうな！ 古砥部は犬神だ！ 貧乏神だって、立派な神様なんだぞ！」

しかし論点のズレた逆噴射を見せる古砥部は、犬歯を剥き出しにして唸り始める。彼女の必殺技、土佐犬も真つ青な連続かぶりつきの予備動作だ。

「っ、分かった。訂正するから、かぶりつこうとするな」

さらに姿勢も下げる古砥部に、本気を見て取った祁答院はあわてて手を振る。

古砥部は仮にも人外。普通の人間では、とうてい力のおよぶ存在ではない。腕つぶしのなさにとっても自信がある祁答院は、家庭内かぶりつきにあっさりと屈した。

「ふん。アキラが古砥部に敵^{かな}うわけないだろ」

鼻を鳴らす古砥部は、両手を腰に当てて勝ち誇る。

「……でも、確かにあるぞ。あんまり人を殺しちゃいけないとか。人間にもすごいヤツがいて、たくさん殺すと、そいつらが古砥部を退治しに来ちゃうんだ」

しかし続けた言葉に、古砥部は途中から下を向いて唇を噛んだ。^{くちひる}
基本的にお山の大将な彼女は、殺人がどのというより、自分より強い存在がいるのが悔しいらしい。

「へえ……そんな人、ホントにいるんだ？」

その様子に母性愛をくすぐられたのか、有川は古砥部を後ろから抱きしめつつ質問する。

「うん。アキラの知り合いにもいる。ヨシカゲっていう、黒い兄ちゃん」

「センセって、そんな人も知り合いにいますか？」

「まあ研究の都合上、いろいろとな……」

——やしまよしかげ八島義影。？狂犬？の異名をとる、国内トップクラスの人外キラー。

だが、ただでさえ怪しげな仕事だ。彼は表に名が知れわたるのを好んでいない。それを知る祁答院は、口を濁して話を戻す。

「とにかく、江戸時代の仇討ちあだというのはやるのが当たり前で、しかも制度だったんだ。自分の親が、誰それにこうこうで殺されました。細かいルールの説明は省くが、それを所属の藩と幕府に届け出る。すると、許可が出る。政府公認の殺人かたきという訳だな。で、仇を求めて旅に出なければならなかったんだ」

「はあ……でも、写真もない時代ですよ。そんなの成功するんですか？」

「うん……正確な数字は私も忘れたが、成功率は1%くらいだったかな？　まず無理だ」

「んゝな守れない約束、よくルールにしてたな。人間はバカだ」

「それはけっこう正解かも。古砥部、賢い！」

偉そうに腕を組む古砥部はツボだったらしい。有川は至福の表情で顔を古砥部の頭にこすりつけている。

「有川さん。さっき自分で言ってただろう。やるのが当たり前だから、やらなきゃいけなかったって。まさにその通りなんだよ」

彼女の賢い発言は、すなわち可愛いと同義。祁答院は教え子の悪癖^{へき}のために息を交えながら解説を続けた。

「ま、そうなんですけどね。じゃ、質問一つ。忠臣蔵^{ちゅうしんぐら}なんかはどうなるんですか？」

「うん、いい質問だ。忠臣蔵、すなわち四十七士の場合、ルール上では仇討ちと認められない。刀を抜いてはいけない場所、つまり殿中^{ちゅうちゅう}で刀を抜いた浅野内匠頭^{あさのたくみのかみ}が悪いからな。でも赤穂浪士^{あこう}達は、討ち入りせざるをえなかった。理由はやっぱり武士道なんだ。浅野内匠頭は刀を抜いたが、吉良上野介^{きらいじやうけのすけ}を殺せなかっただろ？　しかし武士が刀を抜いた以上、それは必殺でなければならぬ。だから浅野はルールを破った以上に、侍失格として天下の物笑いになってしまったのさ」

「でも、浅野内匠頭は切腹したんでしょ？　充分じゃないですか」

「本人はな。しかし残された連中はそうもいかない。藩^{かいえき}を改易されて仕事がなくなったのに、あの能なし大将の元手下かと笑われて、再就職もできない。で、名誉挽回、元同僚の再就職を助けるために、

彼らは討ち入りしたわけさ」

「はあ……けっこう現実的な理由だったんですね」

「だな。当時の侍の就職活動は、かなり厳しかったそうだから」

「あゝ、そういうのは今も昔も変わらないんですね……」

有川は情けない声を上げる。就活の開始を間近に控えた彼女には、身につまされる話だったのだろう。そこへ、

「シューシヨク浪人だ！」

古砥部のとても素直な感性から出る一言が、追い討ちをかけた。

訪れるわずかな沈黙に、祁答院はおずおずと口を開く。

「……古砥部。それは大学三年生の有川さんに言ってはならない言葉だ」

「む、そうなのか？ ……にしきごめん」

「いいよ。気にしてないから」

そう言って古砥部の頭をなでる有川の顔は、少し青ざめて見える。ばりばり気にしていらっしゃる様子。

「ところで！ 石和君はどこへ行った？ 姿が見えないが？」

祁答院は空気の流れを変えるべく、努めて明るい声を出した。左

右を見回す。が、見当たらない。いつの間にか消えている。今日も石和のサボリ癖は絶好調だった。

「センセの長話が始まった瞬間からいませんでいたよ」

「シュウジなら、あそこで寝てるぞー」

今さらですかと呆れる有川に、ある一点を指し示す古砥部。ここからでは木陰になってよく見えないが、ひときわ幹の太い大樹の枝に投げ出された足が確認できる。器用な男だ。木の上で寝ているらしい。

「古砥部……だと石和君が気付かないか」

「シュウジは見えないからなー」

「じゃあ有川さんに頼……」

「いいですよ」

祁答院の言葉をさえぎり、有川はさっさと歩きだした。

（妙だ）

彼女は性格上、頼み事をするとき必ずなんらかの見返りを要求してくる。なのに、今回に限ってそれがなかった。後ろ姿を見送りながら理由を考えた祁答院は、三秒で結論に達する。

「なるほど。ちょっと遅いが、青春か」

思わず頬が緩む。思い当たる節もあった。

今回のフィールドワークは、祁答院と古砥部に帰省を兼ねた案内役の石和という三名が当初のメンバーだった。そこへ直前になって有川が『私も行きます！』と強引に付いてきたのだ。そこへ今の行動を踏まえれば、この仮説はほぼ間違いないはず。

「ふむ……」

今度は石和について思う。

彼は性格に難がある上、パツと見もさえない。が、顔の造作^{そつさく}自体は悪くない。しかも教え子達の中では、博士課程にいる学生をも凌^{しの}ぐ優秀な男。要領もいいし、磨けばきつと光る。彼自身も有川を悪くは思っていないようだし、きつと上手くいくだろう。

「ほら修^{しゅう}二、ちゃきちゃき歩く！」

「んなデケえ声出さなくても、聞こえてるって」

「じゃあ態度も改める！」

「……！ ……へいへい」

ムチを振るう世話好き有川に、やればできるダウン系の石和。相性もよさそうだ。騒ぎながらも仲むつまじくこちらへやってくる二人の様子は、祁答院の説を証明するに足る充分な証拠だった。

「ふっ、やはり私の説はいつも正しい」

かぶりを振ってひとり悦^{えつ}に入る祁答院に、

「アキラ、変だぞ」

古砥部の無邪気かつ悪意にあふれる一言が炸裂^{さくれつ}した。

変。あるいは変態。これはもう一人の祁答院を引き出す爆弾ワードである。チキンと言われるとキレる、バツ。トウ・ザ・ユーチャーの主人公のように。人格が……

「っ、古砥部に言われたくない！ お前は分かてるのか？ 子供の頃からお前が見えた私が、どれだけ周りから変人扱いされてきたのかを！」

しかし、祁答院とて伊達に歳を食っていない。自らの欠点くらい、熟知しているのだ。なんとか踏み留まり、精一杯の反論を行う。

だがそれも、

「にしきも、アキラは変態だって言ってたぞー？」

ここまでだった。

祁答院の意識はここで途切れる。その間、古砥部が目撃したのは

能面のような真顔になった祁答院が、中腰で「変態……変態……」
とうわごとのようにつぶやきながら、首を水平に動かし続ける姿だった。胸の前に掲げられた両手は何かを探求めるように動いているが、目の焦点が明らかに定まっていな。そのうちピタリと動きを

やめ、今度はバイオハ。ードのゾンビのように上体をゆらゆら揺らし始め――

「はっ！ ……ふっ、誰のことかな、それは？」

帰ってきた祁答院は髪をかき上げ、ごまかすために白い歯を光らせる。とりあえずカッコをつけてみた。

「だから、アキラが変態、だー！」

祁答院の意識はここで途切れる。その間、古砥部と戻る二人が目撃したのは――

両腕で自分の体をしっかりと抱きしめた祁答院が、ハニワのような顔をしてエクスタシーに浸る光景だった。かと思えば再び真顔に戻り、「そうだ、京都に行こう」とかつぶやいて遠くをながめながら腕をグルグル回し始める。交通手段は人力飛行のようだ。魂がコンドルに乗って飛んでいく――

「センセ、大丈夫ですか」。戻ってきて下さるい」

「ったく。またぶっ壊れたのよ」

「はっ！」

帰ってきた祁答院が周囲を見回すと、半笑いを湛える有川と石和が目の前にいた。

「……ふっ、大丈夫だ。それより石和君。私がせっかく講義をしているんだ。真面目に聞きたまえ」

鮮やかな笑顔を浮かべた祁答院は、威信回復を目論んで軽く叱責しっせきした。もちろん、空白の時間にはあえて触れないまま。

「どうせあの本を読みながら、神社の由来について講義してたんでしょ？ んなの俺ア聞かなくても知ってますよ、ここの管理人なんだから。つーか、あの本センスに渡したの俺じゃないですか」

気怠けだるげな石和は不快の念を表しながら、さも当然と内容を推測してみせた。

「……センス、そんなの修二に講義しようとしてたんですか？」

それを聞いた有川は、とたんに冷淡な口調で詰問きつもんしてくる。石和がここの関係者だとは話の流れで理解していたようだが、管理人だとは初耳だったようだ。

「いや、そのな……」

面倒くさがりな石和は、どうせ『へいへい、すんません』と謝るだけだろう。そう思って小言を言った祁答院は返答に窮きゅうした。

（まずいな。このままでは……）

教師と生徒の関係とは、すなわち仁義なき関係。弱みをさらけ出してしまえば、たちまち餓狼共は食い付いてくる。この場を切り抜けるべく必死で言葉（言い訳）を探す祁答院へ、

「つーか合宿場所も俺の実家って、どうなのよ？」

理由を知っている石和が、さらなる急所をえぐってきた。

「く……」

ここで取りつくろえば、あとでどんな嫌がらせをされるかわかったものではない。観念した祁答院は、せめて威厳は保とうと重々しく口を開いた。

「……この間、研究費で高い買い物をしてしまった……」

「で、もうホテル代も出せない」と

すかさず石和が不満をぶちまけるように言葉を継ぐ。最後まで帰省を渋っていた彼は、この件をいまだ根に持っているらしい。

「い、石和君の実家を合宿所にした理由はそれだけじゃないぞ。なにしろここに近いし、広いんだろ？ デジタル化していない資料を拡げるには場所がある。ビジネスホテルではそれだけのスペースが取れないし、だいいち一番近いのは隣街だ。それに買い物は……」

「サイテー」

祁答院の長口上を、目に軽蔑の色を宿す有川が両断した。

「う……」

その迫力に、言い訳を最後まで言わせてもらえなかった祁答院は口をつぐむ。

「はは、アキラサイテー」

有川の言葉を真似する古砥部の言葉は、もはや耳に入らなかった

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

「はは、アキラサイテー」

有川ありかわの言葉を真似する古砥部こてへの言葉は、もはや耳に入らなかった。

あつという間に完成した包囲網けどついでん。ちよっぴり目に涙を貯めながら、
祁答院けとついでんは思う。

買い物をしてしまったのは、このフィールドワークの計画を立て
てから。先ほど読んだ小冊子せうさふしは確かに石和からもらった物。非は自
分にある。

が、そこまで言うほどひどいだろうか。なけなしの研究費で購入
したのは室町時代に描かれた妖怪絵巻で、重要文化財の指定を受け
ていてもおかしくない品。

『実は今、少しお金に困ってしまして。先生がお買いにならないな
ら、骨董商こつどうにでも売ることにします』

かねて懇意こんいにしていた所有者がこんな感じで話を持ちかけてきた
のだ。保存の仕方也不知道コレクターの手に渡ったら貴重な文化
遺産を破損されかねない。下手をすれば行方知れずとなってしまう
可能性もある。民俗学の学者として、こう言われては買う以外の選
択肢がないだろう。

そしてもう一つの言い訳。石和家いさわを宿泊所しゅくぱくじょに選んだ最大の理由は、

——石和の父である郷土史家、石和隆史。いさわたかし

だ。彼はすでにこの世の人ではない。が、石和いわく、その書齋しよさいは手つかずの状態で放置されているという。

おそらく膨大な資料ぼうだいが眠っているはず。総合的に言って、石和の実家が拠点として最も便利な場所だった。

「だから……」

以上の理由は、いくら胸の内で説明しても理解してもらえないだろう。めげずに口を開こうとする祁答院の言葉を、

「にしき、もうあらずじは聞いたんだろ？ そのあと、この神社はそんな時の殿様からウチが管理を命じられて、それが今も続いてるってワケだ」

石和がわざとらしい大声で押し潰つぶした。

「へえ。でも修二んちって神社じゃないんでしょ？ 神主かみさんは？」

「いや、そのな……」

「ここらで一番デカイ奥村神社から宮司みやじさんと呼んで祭祀はやってる。ウチは地主としての管理だけ」

「なるほど。じゃあご神体は？」

「なあ……」

「池だ」

「名前は？」

「あの、聞いて下さい……」

「まんま。伊織ヶ淵いおりがふち」

「ご利益は？」

「私が悪かったから……」

「恋愛成就。あと水難よけ」

「納得。でも神社って不思議だよなあ。ここもそうだけど、平将門たいらのまさかどとかって、神様っていうより怨霊って感じじゃない？ なのに、みんな拜んでるんだもん」

「……………」

「そうだなあ。そいつは……」

「それは！ 怨霊となった人物の恨みのパワーが強ければ強いほど、いざ神様となった時の力も強いと昔の人々に信じられてきたからだ！ この考え方を、神道では御霊信仰ごりやうしやうという。いま有川すがわらのさんが言った平将門や、菅原道真すがわらのみちさねなんかが代表格だな。伊織いおりが祀まつられる理由もそうだろう。大嵐を起こせるほどの力を鎮め、同時に自分達の味方

に付けようと考えたんだ！」

一気に喋って息を切らす祁答院を前にして、邪悪に笑う石和有川はアイコンタクトで会話する。「この辺にしといてやるか」「だね」という意思疎通がなされたあと、再び古砥部を後ろから抱きしめた有川が口を開いた。

「ふうん。でも、伊織さんが暴れる気持ちは分からなくもないなあ。ある意味、社会全体が小兵太を殺しちゃったんでしょ？」

「ふん。真面目なヤツが馬鹿を見る。時代が変わっても、そいつは変わらないってことだ」

石和はそっぽを向き、どこまでも冷めた自論を展開する。

「修二冷めすぎ。小兵太って、いちおうごアンタのご先祖様なんですよ？」

聞き咎めた有川は、すぐさま体を古砥部ごと振り向せかせて噛み付いた。

「直系じゃない。しかも三百年前の先祖だぞ？ 他人と同じだろ」

「けど、修二は少し見習った方がいいと思うよ？」

「足して二で割ると、ちょうどいい感じだろう」

そこへ、やはり見立てに間違いはないと結論づけた祁答院が割って入った。

「センセまでそういうこと言うのかよ……」

「さっき無視したお返した」

「……小つさ」

ぼそりと上がる有川のつぶやき（裏切り）に、祁答院は反論の言葉を失う。

この二人は最悪だ。二人きりだとケンカしなくせに、第三者が現れると瞬時に連合して息のあったコンビネーションを見せる。そして確信した。ここに味方はおらず、目の前の二人は敵だと。この状況をごまか、もとい、回避す、訂正、教育者の本分はやはり講義であるう。

というわけで、祁答院はまたしても語り出した。

「……コホン。真相はともかく、この神社にはそうした言い伝えがあり、伊織は神様として祀られているわけだ。このように、神道では人が神として祀られる例は少なくない。特に悲劇的に死んだ人物が神として祀られる場合は、死んだ直後に天変地異が起こったり、恨みの対象となる人物が死んだりしたことがきっかけとなったケースが多い。民俗学の学者として言わせてもらえば、不可解な事件の原因に理由をつけて、恐怖を理解しようとしたんだろう。正体が分からないものがいちばん怖い、というわけだな。それは、今も昔も変わらない……」

不意に石和の腰から電子音が響く。教師の天敵である授業中の携帯電話に、祁答院は顔を歪めて話を中断した。

「もしもしー、姉貴ー？ …… ああ、無事に到着してる。もう伊織神社にいるよ。 …… 了解。 んじゃ、適当に切り上げて帰るわ」

よく電波が届いたな、ともらす石和は携帯を取り出し、半分眠っているような声で味気ない会話を済ませてから祁答院に向き直る。

「センセ、夕飯の支度ができたって家からっす」

「む、そうか？ まだ？ 全っ然？ 講義し足りないんだがな……」

ポロリと本音。 祁答院はその手の人間の例にもれず、学者バカである。 オタクとも言つ。 好きなことを語らせれば、一昼夜はぶっ通しで話し続けられる自信があつた。 それを学生達から非常にうつつとうしがられていることも知っているのだが、なにしろ止まらないのだ。

読書も同様で、とにかく止まらない。 以前、飲まず食わずでまる一日ぶつつづけて本を読んでいたら、自律神経が一時的におかしくなつたらしく、立てなくなつたこともあつた。 生まれたての子鹿のようにヨロヨロ、朦朧^{もうちゅう}とした意識で「読書は体に毒である」と思い知つたのだ。

もちろん、それを知っているゼミ生達や古砥部は相手にしない。

「夕飯食べながら聞きますから」

祁答院の肩を叩く有川は、微妙に無視します発言を残して歩いて行く。

「さっさと行きましょう。 ウチなら壁はいくらでもありますから」

同、石和。たしかに壁なら何時間でも我慢強く聞いてくれるだろう。

「早く行くぞー。バカアキラー」

同、古砥部。もはやなんのひねりもない悪口である。

「く……」

こんなところでゆとり教育に負けるわけにはいかない。よろめく体を、祁答院は教育者としての闘志を燃やして踏み留まらせ、

「私は負けん！」

気合いと共に決めポーズを取ってみた。

そんな祁答院に突き刺さるのは、生暖かい眼差しを送る三対の双眸。

「さ、行こうか」

気付いた祁答院は、爽やかな笑みでサムズアップする。吹き抜ける風は夜気をまとい、とても涼しく感じられた。

* * *

四人が石和家に到着したのは、あれから五分後のことだった。

「たでま（ただいま）」

「おじゃまします。修二、もうちょっとしっかりあいさつできないの？」

「ほら古砥部、よそのお宅に入るときは？」

「バカにするなアキラ！ おじゃまするぞ、だ！」

石和を先頭に、一行は引き戸をにぎやかくぐる。と、古い農家特有の広い玄関先や家自体の外観で予想はついていたのだが、広いタタキに広い廊下、生ツバを飲み込んでしまいそうなダシの匂いが出迎えてくれた。

さらに――

「修二、おかえり」

出迎えてくれたのは、この旧家と一体化しているかのような印象を受ける大和撫子。

歳は石和や有川より少し上だろうか。藍色あゐの紬つむぎの上から割烹着かつほうぎを着っけ、たばねられた腰までの黒髪は白いうなじを強調しているように、むしる色っぽい。にっこりと微笑む細面は、穏やかたおにして嫺やかひな。鄙ひなにはまれな、という形容は失礼に値するのではないかと思われるほどの、ものすごい美人だった。

「……ただいま、姉貴」

気恥ずかしいのか石和は目を反らし、つぶやくように言う。

衆目を集めていることに加え、およそ二年半ぶりの帰省という後ろめたさ。おまけに相手が向けてくる、姉弟にしても度を越した親しみの感情。あまり女性ズレしていない石和にとって、これはたしかに荷が重い。

「たまには顔見せに帰って来なさいって、言っておいたのに。メルしても、ちつとも返事してくれないし……筆無精なのは知ってるけど、元気にしてる、の一言くらいは返してくれてもよかったんじゃない？」

ただ、そう言いつつもまったく怒った様子を見せない彼女の気持ちとしては、実のところ母親が出来る悪い息子へ対するそれに近かった。

「……ワリい」

石和も同様で、彼の心境としてはイタズラを母親に見つけられた気分。もつとも二人の態度——特に彼女の容姿や表面の態度が、他人に与える印象を必要以上に怪しげなものに変えているが。

一方、祁答院ははりきっていた。

（ふむ……左の薬指に指輪はなし。玄関に男物の靴もない。表に停めてあったのは、いかにもオーナーが若い女性らしき軽自動車が一台だけ。家の奥からは他の人間の気配もしない。ようするに彼女は独身で、この家に一人暮らしだということ。これは、チャンスだ！）

女性の容姿に陶然と見入りながらも二人の真実に気付き、その上でムダな観察力を発揮して集めた情報で、彼女を彼氏ナシだと断定する。

多くの人が意外だと言うが、祁答院はモテない。

外見は他の追隨を許さないほどいいと自他共に認めているし、学歴だって実岡大は世に難関と謳われる名門。おまけにその助教授なら、収入も高い部類に入る。社会的に見れば、祁答院は間違いなく掘り出し物だろう。

それでも、モテない。

言い寄ってくる女性自体はたくさんいるのだが、デートが二回目以降に発展したことは皆無なのだ。理由はもちろん古砥部。放置して出かけるわけにもいかず、連れて行くとデートが終わる頃には完全に電波扱いされているのだった。

なお彼本人は意識していないが、祁答院はかなり結婚願望が強い。これは生い立ちに起因するもので、？普通？ではないと周囲に言われ続けて育った彼には、？普通？に強いあこがれがあるため。

——普通であるためには、社会通念上模範的であるべきだ。自分くらいの歳になれば、とうぜん結婚を考えるべきだろう。それが普通——

それが祁答院の深層意識。

そんな理由で結婚したいのかと女性は閉口するかもしれない。が、悪いことばかりでもない。先述のせんじゆつとおり彼は社会的に優等生で、そのための努力も重ねてきた。おそらく結婚しても、常に良い夫であろう、良い父であろうと努力するだろう。あとは本当に相手を想う気持ちさえあれば、きつとうまくいくはずだ。

「あ、すみません。お客様をないがしろにし……」

再会のあいさつを済ませて祁答院へと振り向いた石和の姉は、思わず言葉を途切れさせた。その容姿に驚いたらしい。祁答院は計画をさっそく行動に移していく。

「とんでもない。私が大学で修二君を教えている祁答院です。突然お願いした上に大人数で押しかけて、こちらこそ本当に申し訳ありません。ごやつかいになります」

「……こちらこそ修二がいつもお世話になっております。お疲れでしょう。玄関で立ち話もなんですし、どうぞお上がり下さい」

下心を巧みに押し隠してダンディに一礼する祁答院に、彼女はほんのり頬を赤らめた。

（うん。今度こそいけるかもしれない）

第一印象はかなりの高評価。その様子を見た祁答院は内心でガッツポーズをとった。我ながら男子高校生並みだと笑ってしまうが、それに気付いているだけまだマシと自分を励まして言葉を続ける。

「すみません。では……と、その前にぞうきん雑巾をお借りできますか？」

「え？」

自覚なしの発言に、石和の姉は怪訝^{けげん}な表情を浮かべた。

「ああ、古……足を拭^ふこうと思ひまして」

素足^{すあし}で表^{おもて}をうつろつく古砥部を家に上げるためには、足を拭かなければならない。早くも計画が崩れ去りつつあることに気付きもせず、祁答院は理由をのべた。

「はい、すぐお持ちしますね……？」

石和の姉には、なぜ必要なのかが分からない。祁答院がやるのだとすれば、足に水虫を飼っているオツチャン並みの行動だ。出会いから一分とかからず——まさに秒殺で幻想を打ち碎かれた彼女は、首をひねりつつも奥へと引っ込んでいった。

「センセ、がんばって下さいね」

だいたいの事情を飲み込んでいる石和は、慚愧^{ざんき}に堪^たえないといった表情で祁答院の肩を叩き、さっさと上がっていく。

「……あ！」

そして今、本人が気付いた。

「……そんな、バカな！ この私が……！」

続けて、大仰^{たいやう}に体をわななかせる。

そのマンガじみた行動が変人だと人に言わせるゆえんなのだが、
祁答院はその場のノリでついやってしまう。学生たちの間で人
気が高い理由は、授業のおもしろさよりも芸人として、というのは
公然の秘密である。

「あの二人の雰囲気は、なんなの……」

今回、残念ながらオーディエンス兼ツッコミ役のリアクションは
なし。いまだ玄関に立ちすくんだままの有川は、石和姉弟が消えて
いった廊下の闇をにらんで肩を震わせていた。

「いや、あれはな……」

「センスには聞いてません！ 修二、私はどの部屋を使えばいいワ
ケ〜！」

眼光一閃。祁答院の説明を封じた有川は靴を脱ぎ、ドスドス床板
を踏み鳴らして石和を追いかけていく。

「アキラ、古砥部はまだ入っちゃダメなのかー？」

誰一人としておとなしくしていない。まるで無法地帯だ。

「……すぐに石和君のお姉さんが雑巾を持ってきてくれる。もう少
し待て」

たぶん幼稚園の保育士さんは、毎日同じ気分で仕事をしているの
だろう。私には無理だ、と祁答院がため息をつきながら待てば、間
もなく雑巾を携えたたすき蘭生が現れる。受け取った祁答院は、奇異きいの視
線で見つめる彼女の重圧に耐えながら古砥部の足を拭き、ようやく

石和家へと足を踏み入れた。

「お部屋はもう用意しておりますので、こちらへどうぞ」

石和の姉は一連の出来事など気にも留めていないかのような、やわらかな態度。祁答院を案内すべく、しずしずと歩んでいく。

「すみません」

祁答院はホッと——まだ脈は残っていると思いながらついていった。

「あ、申し遅れました。私は蘭生そのおと申します」

ごく自然に、しかしおそらくは意識的に速度を落として祁答院の横へ並んだ石和の姉——石和蘭生は、祁答院の顔をのぞき込むようにしながら微笑ほほえみかける。

「蘭生さん……いいお名前ですね。楚々（そそ）としていながらも、凜りんとした雰囲気がある。本当によくお似合いです」

祁答院は態度を作り直し、齒が浮きそうな美辞麗句ひつねごを返した。自分の容姿はこういうセリフを堂々と言う方が似合うという目算があったること。すると蘭生は口を開かず、伏し目がちに微笑むことで返答とする。

（む、これは……）

かえって蘭生の雰囲気を引き出していた。

祁答院は彼女を見ながら、奥で有川、さらには追いかけていった古砥部も含めてギャアギャア騒いでいる石和と比べてみる。

たしかに姉弟だ。目元や鼻の形など、なるほどと思わせる類似点がいくつもあった。それでも態度が態度だし、一方は服装や髪型からして人目を気にしていないので、月とすっぽんの表現で間違いはない。

「しかし、これは褒め言葉になるかどうか分かりませんが、私は蘭生さんほど女性らしい女性に今まで出会ったことがない」

「そうでしょうか？ でも、私の雰囲気はお仕事の関係かもしれないよ？」

「それは？」

「奥村神社で巫女として働いております」

「なるほど。ぴったりだ」

卵が先かニワトリが先か、という理論のような気もするが、間違はなく似合う。祁答院は丁寧に頭を下げる彼女に優しく言葉をかけた。

「こちらをお使い下さい。すぐに夕飯にいたしますので」

やがて南向きの客間に祁答院を案内し終えた蘭生は、微笑を残して去っていった。

（今回のフィールドワーク、サイコー！）

部屋に残された祁答院は、一人で小おどりしつつほくそ笑む。

あれほどの美人。しかも性格もいい。これ以上、なにを望めばいいのだろうか。

——ちなみに。

ここではつきりさせておきたい点がある。石和蘭生のような女性
がはたして現実にいるのかという疑問だ。

結論から申し上げれば、いるかもしれない。

が、いたとしても年の頃はせいぜい十代のなかばまで、であろう。
二十歳を超し、社会で働く女性があんな浮世離れた性格をしてい
るわけではない。

そう。蘭生の大和撫子っぷりはもちろん演技である。

（いい男……名門大学の先生……高収入……玉の輿……ちよつとオ
ヤジ臭いくらい、マイナスにならない……）

裏はむしろドロドロのグチャグチャ、と言った方がいい。清純派
の外見や男好きのする表面の性格に、垣間かいま見せるおそろしいまでの
色気。それらを完璧に操って男を手玉に取る彼女は、弟をして『我
が姉ながら、恐ろしすぎてドン引きする』と言わしめるほどである。

あやうし祁答院！ はたして彼は生きて石和家を脱出できるのか！

……まあ普段の彼を見れば、蘭生の方が態度を改める可能性が極めて高そうだが。

「蘭生さんの手料理か。……エへ」

見破れなかった祁答院は不気味な笑いをもらし、スキップするよう
うに夕餉ゆうげが待つ居間へと向かって行った……

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

……そして晩餐^{ばんさん}の後。

「『料理は』おいしかったね」

「うむ、満腹だ！ シュウジの姉ちゃんメシ作るの上手だなー」

石和家の居間には何やら浮かない顔でくつろぐ有川^{ありかわ}と、対照的な
上機嫌^{たため}で畳をごろごろ転がる古砥部^{ことへ}の姿があった。

「ホントにね」

有川は生返事^{なま}をし、心の保養に古砥部をながめながら思う。

大皿に盛られた煮物を始め、高級魚であるシマアジの刺身や黒ムツの煮付け、焼きナスなどがところ狭しとちやぶ台に並んだ料理は、確かに絶品だった。

だが、それ以外は不満しかない。言っても仕方ないと自覚もあるが、気分と理屈はまた別の話。鬱屈^{うっくつ}するものはするし、ましてそれがいくら努力しても埋まる可能性がない部分もあると分かれれば、なおさらだ。

（性格とかは無理。なら、せめて努力で埋められる部分だけでも努力しよう。まずは料理の腕かな？）

打ちのめされてもすぐ立ち直り、具体的な目標を掲げて努力できる。簡単そうで、なかなか真似できない有川の長所だ。よし、と心の中で力こぶしを作っていると、

「それに比べてアキラのヤツは……」

福々（ふくぶく）しい笑顔で転がり続けていた古砥部が、いきなり回転をやめて仁王立ちした。

「ん、どしたの？」

「ゆるせん！ たまに古砥部のメシをドッグフードで済ませようとするんだ。アキラはいつもあれくらいのメシを用意しろ！」

古砥部はむおー、と拳を突き上げる。

「ぶ、くくくく……」

それを見た有川は、こみ上げるものをこらえきれず、悩み事も忘れて笑い出した。

「む？ なにかおかしかったか？」

不思議そうな顔をして古砥部は振り向く。

「だってこないだ古砥部、ドッグフードのコマーシャル見て、食べてみたーい、て騒いでたじゃない」

「むぐ！ それは……めっちゃめっちゃ美味しそうに食べてたし……」

後半は消え入りそうな声で古砥部はしよげ返った。

ちなみに彼女が最も尊敬する人物は、某携帯電話会社のCMに登場するお父さんである。あこがれの人らしい。古砥部に言わせれば、とてもカッコいいのだそうだ。

「あゝもう！ 古砥部、かわいい！」

有川はたまらないとばかりに古砥部を捕まえ、一緒に畳へダイブする。

「む、古砥部もにしきは好きだぞ。古砥部が見える人間は、だいたい古砥部のことを嫌な目で見るからな。にしきはそんなこと全然ない。だから大好きだ！」

「みんな、きつと見る目がないんだよ。古砥部はこんなにかわいいのに」

「む、そうか？」

「お待たせしました」

今度は折り重なって畳をごろごろ。そんな二人が我が物顔で占拠する居間へ唐突に声がかかり、徳利と猪口ちよこを乗せたお盆そのおを手に蘭生が入ってきた。

「っ！」

気付いた有川は居住まいを正して席に戻る。こわばった表情で相

手を見上げれば、蘭生は知らず険を宿^{けん}して見つめる有川の態度にも所作^{しよさ}を崩さず、穏やかな手つきで酒を注いでいた。

（何から何まで気に入らない……！）

理由は考えたくもないのだが、自分より美人で、料理が上手で、男受けしそうな性格をしていて、石和と妙に仲が良くて、とにかくム力ついたから。完璧に逆恨みである。

「どうぞ」

内心で齒がみする有川を知ってか知らずか、蘭生は上品なしぐさでお猪口を差し出す。

「……いただきます」

うつむき加減で有川は受け取った。無言で一気飲み。それを見た蘭生はゆつたりと微笑み、動きと速さがまるで合わない高速で徳利を干していく。

「ね、有川さん」

しばらく下を向き、古砥部を膝に抱いて交互にお猪口をなめていた有川に蘭生から声がかかった。

「……なんでしょう？」

有川は顔を上げる。そこには嫺やかな笑みをたたえる蘭生の顔と、わずか三分あまりで空になった二合徳利が二本転がっていた。

「弟なんですけど……」

続いて蘭生の口から漏れた言葉に、有川は目を見開く。

「ありがとうございます！」

一方、居間のはす向かいでは――

「ほう。これは大したものだな」

石和に案内され、古きよき文豪の仕事部屋を思わせる和室――故、
石和隆史の書齋へと足を踏み入れた祁答院が感嘆かんだんの声を上げていた。

出迎えてくれたのは、壁を埋めつくす書棚とすき間なく収納された蔵書。文机には未整理なのか山積みふづくえされている本もある。そのほとんどは郷土史や民俗学、神道に関する本だ。やはり郷土史家の看板に嘘はなかったらしい。

「こんなの、売って金にするくらいしか使い道ありませんよ」

一瞥いちべつしてしまいましたげに吐き捨てた石和は「ちつと待つてて下さいね、すぐ見つけ出しますから」と目的物を探し始めた。

その後ろ姿に軽く肩をすくめた祁答院は、手近の本棚から適当な本を一冊抜き出してパラパラとめくってみる。

「っ……！」

しかし先ほど済ませた夕食の光景が目の前をちらついて、内容がいつさい頭に入ってこない。仕方なくあきらめ、思い出したくもない過去の栄光を思い出していく。

まず有川。彼女の機嫌は、けっきょく夕飯を食べている間も回復しなかった。

理由は容易に察しが付く。祁答院の言葉に耳を傾けないままに蘭生と石和、二人の仲を勘ぐる彼女は、蘭生の見た目に打ちのめされ、出された手料理にも衝撃を受けていたから。

あきらかに自分が劣ると悟った有川は、食事中ずっと石和にコイツコロス光線を送りながら『うう、負けた』と呪詛じゆそのようにつぶやき続けていた。その間、有川の視線にまったく気付かず平然とし、その神経を逆なでし続けた石和の鈍感もかなりのものだが。

次に祁答院と古砥部。玄関でのやりとりにもめげず祁答院を優遇していた蘭生の態度は、夕食が終わるころにはだいぶ冷たくなっていた。

『お客様は三人とうかがっていたのですが……』

と訝いぶかる蘭生に、

『その通りです。見えなくてもちゃんといいますから』

と祁答院が強引に説得して人数分の料理を出してもらい、電波ポイントプラス1。夕食が始まり、並んだ料理を高速で平らげながら欠食児童のように「お代わり」ラッシュを繰り返す古砥部の行動がすべて祁答院の行動に見え、電波ポイントプラス1。さらにその横

で、祁答院は『胃が痛い……』と呻いていたので、プラス1。

合計3ポイント。たぶん5ポイントも貯まれば避けて通られるようになるだろう。園生には祁答院が胃痛を訴えながらお代わりを連打し、二人前の食事を平らげていたように見えていたはずだ。

（泣きたい。完璧に変人だと思われたらうな）

夕食後、園生がお茶を差し出しながら自分に向けた目を思い出し、祁答院は重く長いため息を吐き出した。

（またいつものパターンか……）

むしろいつも以下。まだデートすらしていない。

（きっと将来もそうだろう。古砥部がそばにいる限り、私はこのまま結婚どころか永久に変人扱いだ）

さらに陰鬱^{いんうつ}なため息を、祁答院は陰々滅々（いんいんめつめつ）とした面持ちで吐き出す。

ただ、古砥部を嫌っているわけではない。むしろその逆で、言葉では言い切れないほど感謝し、大事だと思っている。彼女がそばにいないければ、家系を理由にイジめられ続けた幼少時代を祁答院は乗り切れなかった。そのころ自殺も考えたほど悩んだ祁答院にとって、古砥部は命の恩人なのだ。それを見捨てられるほど冷酷にはなれなかった。

「お、あつたあつた」

どうやら目的物らしい大学ノートを発見し、石和が彼にしては明るい声を上げる。

「どしたんすかセンス？　口にするのはばかられるような名状めいじょうしがたい顔をして？」

「私はクトゥルー神話の怪物じゃない」

石和なりの気遣いは、分かりにくいブラックジョーク。祁答院は軽くつつこみ、もと来た廊下を歩き始める。

「それより石和君。細かい資料の探索は後にして、早く居間へ戻ろう。有川さんを放っておくと蘭生さんに何を吹き込むか分かったものじゃない」

酒盛りが始まっているらしい居間からは、歓声が聞こえてくる。

有川VS蘭生の一方的冷戦は、お酒が入った時点でたちまち終結を迎えたいらしい。

「……そりや間違いないっすね」

上がった蘭生の笑い声は、有川による祁答院と石和、どちらかの暴露話で間違いない。二人は大急ぎで居間へと戻った。

？章 到着「伝承の詳細および疑問点の提起について」？

「で、ですねえ……」

「ストップだ有川さん」

ふすまを開けた祁答院は、手の平を大きく前へと突き出す？ちょっと待ったスタイル？で居間へとなだれ込む。

「ち、もう戻って来やがったんですか」

膝で古砥部を抱っこする有川は一瞬だけ邪惡な表情を垣間見せ、すぐ元の笑顔を作った。古砥部はいえ、赤い顔をしてふらふら揺れている。こちらはもう夢見心地らしい。

「修二、もうちょっと女の子に気を遣ってあげないとダメですよ」

蘭生は若干壊れ気味。嫺やかさも残ってはいるが、雰囲気はそれ以上に色香を漂わせるものに変わっていた。

「姉貴、もう寝ろ。明日も早いんだろ？」

むろん姉弟にその手は通じない。石和はすかさず正論で姉を説得しにかかる。何を喋られたかは分からないが、ロクでもないことに決まっていた。

「修二がおんぶで連れてつてくれたらね」

蘭生は取り合わない。酒乱の気があるのか、妖しく微笑みながらぐいぐいお猪口ちよこを手酌てしやくで煽あおるだけ。また冷戦ほっばつが勃発すると祁答院はあわてて振り向くが、有川にも変化はない。こちらも笑っていた。

何かよからぬ企たくらみがあるなと祁答院がにらんだ矢先、

「ザルでウワバミの姉貴が、酔っ払うワケないだろ？ おら、とつとと部屋帰って寝ろ」

この場で蘭生を誰よりも知る石和から、冷静な指摘が入った。

「あ残念。バレたんじゃしょうがないわね。じゃあ修二、私は寝るからあとよろしくね」

そそくさ立ち上がった蘭生は、有川へ何やら意味ありげな視線を送る。彼女の頷うなづきに満足げな顔を見せたのち、しっかりとした足取りで自室へと戻っていった。

「……何を話してたんだ？」

横目で姉を見送った石和は、一段低くした声色で問いかける。

「べつに」。古砥部のコト話してたんだよね」

有川は黄色い声を上げ、古砥部の頭に頬ほおずり。が、笑ったままの目は石和をとらえて離さない。ごまかすつもりもない挑発行為だった。

「く……」

「あきらめよう石和君。ここは我々男性陣にとってアウェーではない」

石和の震える肩を祁答院はそつと叩く。じゃあホームはどこにあるんだと聞かれれば、首を捻るしかないのだが。

ただ、有川と蘭生の行動を見た祁答院には読みがあった。

当初はあれほど蘭生に敵対姿勢を取っていた有川の変貌^{へんぼう}ぶりは、なにか彼女にとってうれしい提案が蘭生の口から出たに違いない、と。それに有川が乗り、密約が成立したのだ。

そして、それは蘭生にとって一銭の価値もなく、かつ有川には価値があるもの。でなければ、初顔合わせである二人の取引は成立すまい。内容はおそらく、

「……石和君の身柄引き渡しについてだな」

「はあ？」

「なんでもない。そのうち嫌でも分かるだろう」

独り言を聞きとがめた石和の問いを軽きいなす祁答院は、カマかけに一瞬すつと細められた有川の——それ以上言っな——目を見て確信した。

「なんすかそれ？」

「ヒントは充分に出した。あとは自分で考えたまえ」

再度の質問を人生の先達^{せんだつ}として突き放した祁答院は、腰を下ろして石和から受け取った大学ノートを開く。

——石和家家史。^{いさわけかし}

と表題されたそれは、ありがたいことに中身が現代語訳されている。もちろん旧かな遣いでも問題ないのだが、祁答院は編者^{へんしゃ}に感謝しながら読み始めた。

「大学ノートが古文書なの？」

祁答院の手元を見た有川が、怒りのぶつけ先を座布団に見出して座った石和へ問いかける。

「原本は痛みが激しくてな。これは死んだオヤジが書き写したヤツだ。センセ、どうです？」

「渡されたばかりだぞ。感想も何もないと思うが。まあ気になったことについて記述^{きじゆつ}があればいいな」

「そんなの、なんかありました？」

有川が今度は祁答院に質問をぶつける。

「伊織神社の由来についてだ。石和君、私は読み進めているから、有川さんに説明を頼む」

「へいへい」

ノートから顔を上げない祁答院の言葉に、やる気の欠片かけらも感じられない返事をする石和は夕方に祁答院が読み聞かせたものと同じ小冊子を取り出し、示しながら解説を始めた。

「んじゃ始めるぞ。伊織神社の伝承には、説明が足りない部分と疑問点がある。まず一つ目。小兵太こへいたのオヤジは、なんで殺されたんだ？ 伝承には理由の説明がなかっただろ？」

「あ……」

有川は素っ頓狂とんきょうな声を出す。

これが最初の疑問点。殺人には、通り魔を除いて必ずなんらかの理由がある。はっきりしない限り断定するべきではないが、現時点で与えられた情報から有力な原因を推察すれば、？侍同士のケンカが刃傷沙汰にんしょうさたに発展、闇討ちされた？が有力説だ。

理由としては、江戸時代の仇討ち制度あだうにはいくつかのルールがあり、条件をクリアしないと許可が出なかったこと。その主な条項おもを列記すると、

- 一、武士（相手、本人とも）に限る。
- 二、犯人が確定している場合に限る。
- 三、自分より目上の人間（父母、兄）が殺された場合に限る。
- 四、藩主の命令で殺された（上意討ちの場合、認められない。
- 五、正々堂々の果たし合いで殺された場合は、認められない。
- 六、敵討ちの敵討ち（又敵討ちまた）は、認められない。

將軍の命令で藩主が殺された忠臣蔵は四に該当する。

条件を満たさない場合は意趣返しいしゆ返しと呼ばれ、実行後に切腹し
なければならなかった。

だ。小兵太は殿様に許可を取ったと明記されているし、武士であるともはつきり書かれている。仇である五郎左ごろうざも同様。小兵太の父に関しては不明だが、家が貧しいとは書かれているので、裕福な商人である父が小兵太に侍の位を買い与えたケース（当時、売官は存在した）は、まず考えられない。石和家が代々続く旧家である点も踏まえ、小兵太の父は当時この地を支配していた奥村藩の武士だったと考えるのが妥当だろう。

また、家が貧乏であれば、物盗りで殺されたとも考えにくい。すると残るのは怨恨で、犯人が判明している以上は行きずりの浪人とのトラブルも考えづらいし、友好関係からいけば恨みを買いやすいのは、同僚、と結論づけるべき。

以上が、闇討ちを小兵太の父が殺された有力説とする理由である。

「次。犯人の五郎左は、なんで近所の寺にいたんだ？ 小兵太は五郎左を追って旅に出たんだろ？ しかも三年も旅をして？」

石和は冊子しふしに添付された地図を有川に指し示す。

「確かに、言われてみれば……」

五郎左が伊織に焼き殺されたとされる仁に？寺の跡地あとちから伊織神社までは、直線距離で約二十キ口。これなら龍神となった伊織が五郎左をあっさり見つけても不思議はないが、代わりに石和の示したも

つと大きいクエスチョンが付く。五郎左がここにいた理由付けも、ここが故郷であつたなど極めて弱いものしかない。

「最後。安珍、あんちん きよひめ清姫伝説つてお話がある。これは安珍つてイケメンの坊さんが結婚サギして、だまされた清姫が蛇神へびがみに変身。寺の釣鐘に隠れた安珍をドラゴプレスで焼き殺す話だ」

空前絶後のばっさり感で石和は簡潔に説明した。

補足したい。この伝説はかなり古くから近畿地方に伝わるお話で、熊野神社への参拝さんはいを毎年の恒例行事としていた僧、安珍が、その定宿うやどとしていた清姫の家で主人に気に入られ『清姫を嫁に』と冗談を飛ばされていたのだ。この冗談を本気にした清姫が安珍に結婚をためより、その執念を怖れた安珍は、話をこまかして逃げてしまう。以下は……というのが大まかなストーリーである。

厳密には結婚サギではない。が、邪推じゃすいすればかなりいちゃもんが付く話だ。話をふる以上、家主やぬしはあるていど本気だったのだろうし、世話になっている安珍も強い否定ができず、拒絶の意志を示しながら頷うなづいていたと考えるのが妥当な気がする。

あるいは、安珍はすでに清姫へ手を出していたのかもしれない。話をこまかして逃げるあたり、安珍は相当に臭い。むしろ真相は時代の彼方だが。

「なんか、伊織神社の話と後半部分が微妙に似てるね」

「だろ。で、清姫伝説は少なくとも鎌倉時代以前のお話で、伊織神社の創祀そうしは江戸時代。この点を考えれば、伊織神社のお話はそもそも嘘か、元ネタに清姫伝説が混じった作り話である可能性が高いっ

てわけだな」

「なるほどね」

石和の説明を聞き終わり、有川は納得の声を上げた。

「そうだ。龍神はものたえで、大嵐なんかは伊織が自殺したときにたまたまやって来たんだろう。仁？寺の焼失は、雷が落ちて燃えたと考えるのが適当だろうな」

そこへ依然としてノートに目を落としたままの祁答院がトドメを付け加えた。

「センスは夢がなさ過ぎです！　そこまで言ったら、お話が台無しじゃないですか」

有川からたちまち上がる抗議の声。祁答院は顔を上げる。

「しかしな有川さん、この手の話から歴史の真実を探ろうとしたら、現実では起こりえない出来事は何かのたとえ話として検証するべきなんだ。例をあげれば、古事記の話で高御産巢日神たかむすひのかみが高天原から矢を落として、出雲にいた天若日子あめのわかひこを射殺すというくだりがある。これは高御産巢日神が刺客を放って天若日子を暗殺した、と解釈するべきだろう。私は妖怪の存在を信じるしかない人間だが、残念ながら学問の上では別だ。伝承というトンデモ話のオンパレードは、だれかが真実を都合よく改ざんしたものだと考えるべきなんだよ」

「センスはメルヘン成分が足りません！　せつかくいいお話なのに」

酔いもあるのだろうが、有川の激昂はメルヘンがビタミンやカルシウムと同列の扱いとされているかのような口ぶりだった。

「にしき、お前夢見すぎ。それに話だってベタベタじゃん。ひねりもないし、物語としても三流だろ」

「修二まで」。それにおとぎ話って、だいたいそんな感じじゃない」

恨みがましい有川の声に、取り合わない石和は天井を仰いでうそぶいた。

「んなの、サンタと同じ。幼稚園で卒業だろ」

「アンタ……なんか恨みでもワケ？」

「別に。ただ俺はクリスマスプレゼント、幼稚園の時からオヤジと一緒に買いに行ってたぞ」

「……夢も希望もないお父さんだね」

「しかも、超ろくでなしのな……」

石和は新種の汚物でも吐き出さんばかりに顔を歪める。よほど死んだ父親が嫌いらしい。

何かあるのか？

そろって問いかけの目を向ける祁答院と有川に、気付いた石和はことさらにすつとばけた表情を作って堂々と話を逸らし始めた。

「……ああ、そついやセンセ。明日なんすけど、午後三時でアポ取れましたから」

姿が見えない母親も合わせ、触れられたくない家庭事情があるのかも知れない。それに、いくら教え子とはいえ二十歳を超した男だ。必要があれば、自分から話すくらいの分別はあるだろう。そう判断した祁答院はあえて会話に乗った。

「……助かる。じゃあ午前中は、もう一回伊織神社に行ってみようか」

「了解つす。んじゃ、俺は先に寝ますわ」

祁答院の意図を正しく理解したのか、それとも単にこれ以上は胸の内を悟られまいという逃げなのか。会話はこれで終わりとはばかりに石和は立ち上がり、居間を後にしようとする。

「ちよつと、修二！」

それを逃げたと解釈した有川が、鋭い声を飛ばした。

「悪いな。気分がよくねえんだ」

だが石和は背中を向けたまま、じゃあな、と手を振りながら去っていった。

「……まったく、秘密主義なんだから。ってコラ！」

有川の叱責は、自分の膝から抜け出して石和の後に続く小さな背中の中に。

「古砥部は付いていかないの！」

「え？　だってシユウジの部屋も探検したいじゃんよー」

「それは、興味あるけど！」

あるんだ。

肩を揺らして笑いを押し殺す祁答院は、再びノートに視線を落とす。憤懣やるかたない罵声を上げつつ手酌で飲みを再開した有川を尻目に、読み進めていった。

……そして、月をいただく奥村の夜は更けていく。

間章（1）

彼女は水底^{みなそこ}で夢を見ている。

それは昔々で語られるべき物語。ただ、彼女にとっては三年前の出来事だ。

まるで昨日のことのように思い出される情景は、突き抜けるような青空と生命を謳歌^{おつか}するセミたちの鳴き声に彩られていた――

――時は元禄^{げんろく}十六年（西暦一七〇三年）。

昨年末に起こった忠臣蔵、四十七士達による吉良上野介邸討ち入りも記憶に新しいご時世。東北地方に位置する奥村の地でも、短い夏を迎えたある日のことだった。

日はすでに中天へと差し掛かり、なさけ容赦なく大地を照りつけている。ただ、彼――石和小兵太^{いさわこへいた}が歩くその場所は不思議とひんやりしていた。

苔むした石畳^{いしだたみ}と、湿気を保つ粘土質な土のせいだろう。左右には無数に並ぶ石塔。花は持たず、線香と桶^{おけ}のみを携えた彼のわらじは力強く地面を蹴る。

やがて目的の人物を見つけた小兵太は、その前に佇^{たたず}んだ。

きれいに清掃しようと思っていたのだが、きのう四十九日の法要

を済ませたばかりの父にほとんど汚れはなかった。二度、三度と、桶が空になるまでゆつくりと水を打ち、線香を供えて膝ひざを折る。

そして静かに合掌がつしょうした。目は瞑つむらない。冥福を祈るのは、旅より無事に戻つてからの話。侍たる小兵太がいま父に語りかけるべきは、報告と決意のみだ。しかし、

——はたして、自分になしえるか。

こみ上げる弱気の虫に、小兵太は肩を震わせた。できる、できないを論ずること事態が侍として怯懦きょうたのそしりを免まぬれぬ。なさねばならないのだ。

小兵太は腰のものを抜き放ち、自分と父の間に掲げた。

澄明ちやうめいなる刀身は二尺四寸、反そり四分。相州五郎正宗そうしゅうごろうまさむね。

わずか五十石扶持いっごふくいふちの石和家には、分不相応——大名ですら望んでもそうそう手に入らぬこの差料さしりょうは、石和の家に代々伝わる家宝。まさしく伝家の宝刀である。

持ち出す理由はただ一つ。

「見ていて下さい、父上。この正宗に誓い、必ずや、仇を……！」

一語一語、かみしめるように言い切った。武士に二言はない。言った以上、必ずやらねばならないのだ。これは己が一命より重い鉄の誓約だった。

小兵太は刀を鞘さやに戻し、立ち上がる。父と交わすべき言葉はこれ

以上ないし、長々とここに留まるのもよくない。奮い立った気持ち
がなえてしまう。なぜなら、

「小兵太様」

会いたくない女性に、見つかってしまうから。

目深まぶかに被り、片手で端をつまんだ笠の下。はじかれたように立ち
止まった小兵太は、感情の爆発を真一文字に結んだ口でおさえつけ
る。体に活かつを入れ直し、許嫁——伊織の横を通り過ぎようとした。
ジャマしてくれるなど、願いながら。

「小兵太様」

願いはむなく、伊織の行動は小兵太の予想を超えた。か細い、
だがしっかりとした声で呼びかける彼女は、まなじりに力を込めて
小兵太の前に立ちほだかる。

「伊織。みなまで言わずとも分かっていよう。そこをどきなさい」

目を合わせず、できる限り穏やかな声音で小兵太は諭さとした。

「……………」

対し彼女は、無言で拒絶の意志を示す。

「どいて欲しい。仇討あだうちの旅は藩に許可されたのだ。もはや私には
禄ろくもなく、なさねば帰参きさんもゆるされぬ身」

「伊織は、そのようなものがなくとも……………」

禄。すなわち給料がなくてもよい。仇討ちの旅へ出る侍にその間の給料は支払われないのだ。それでもいいと言う伊織が、どれほど自分を慕ってくれているか。小兵太にとってこれ以上なくうれしい一言だった。

「そのようなものがなくとも！ このままでは、石和の小せがれめは親の仇も討てぬ臆病者よと、城中の者から後ろ指を指されよう！ そのような屈辱、耐えられぬ！ 腹でも切った方がマシだ！」

だからこそ、小兵太は力の限り叫んだ。他ならぬ自分を叱咤するために。

「ですが！ 仇の五郎左は！」

伊織も負けじと声を張り上げる。分かりきっていることを指摘され、小兵太はさらに激昂した。

「やる前から臆すなど、武士の恥よ！」

恥よ、恥よ。響き渡った声が反響して消え、墓地に蝉時雨が戻った頃、伊織は硬直していた口をようやく動かした。

「……父は申しました。小兵太様はもう戻らぬ。私の縁は他の者を探すと」

「……で、あろうな。それがいい。そうしなさい」

自分の気持ちとは正反対の一言は、感情を殺すこととするりと出た。少し冷たい言い方になってしまったが、むしろ好都合ととらえ

るべきだろう。小兵太は再び脇をすり抜けようとする。

「嫌です！ 小兵太様、どうか私をお連れになって下さい。浪人暮らしでも構いませぬ。仇討ちなど忘れて」

彼をよく知る伊織が、その程度の嘘を見抜けないはずがなかった。胸元を掴んですがり付く彼女に、小兵太は真実を絶叫する。

「私とてどんなにそうしたいか！ だが、この地へ置きざりにされる我が母はどうなる？ 死ぬまで物笑いの種だ。夫は土道不覚悟、息子は女と逃げたとな。そのような親不孝が、私にできると思つか！？」

「……………」

答えは沈黙と、静かに横へ振られる首。伊織とて分かつてはいるのだ。もう一押しとばかりに小兵太は言葉を接いだ。

「分かったであろう。手を離しなさい」

「……嫌、です」

それでも伊織は踏み留まり、頑強に自分の意志を示す。

「っ！ 御免！」

もはや議論の余地はない。心の中で手を合わせ、小兵太は伊織を突き飛ばす。手応えからして、転んだであろう。確認せず足早に立ち去る。

「小兵太様！」

その背に、伊織の声が響いた。

「お待ち申し上げております」

「……必ず戻る。この刀に誓って」

いったん足を止め、小兵太は柄を叩く。彼が後ろを振り向くことは、なかった――

彼女は水底で夢を見ている。

はたされなかった誓いに、涙しながら。

夏は夜。聞こえるのはスズムシの音色と、山犬の遠吠え。景色は見慣れぬいずこかの山中へ飛ぶ――

「く……」

小兵太は仇敵きゆうてきを前にし、正眼に構えた正宗まさむねの剣先を細かく震わせていた。

彼とてむろん道場に通っていたし、腕にも多少とは言わせぬほどの覚えがある。だが、戦国の世など遠く百年の昔。武士だの侍だのといくら口でさえずってみても、人を斬った経験などないのだ。そ

れは今、握る刀へ如実に表れていた。

比して、

「ふ……」

対峙する着流しの男——編み笠を目深に被った五郎左に動揺の色は見えない。剣を持った右手をだらりと垂らす放胆な構えは、音に聞こえし柳生新陰流、無形の位だろう。

五郎左は同流派の印可を受け、当節としては珍しい剣一筋で仕官の道を切り開いた剛の者。人に言えぬ因業の一つや二つ、長きにわたる浪人暮らしでとうに経験している。いまだ訪れぬ二人の決着は、しかしこの時点で誰の目にも明らかだった。

この差を埋めるものがあるとするならば、相討ちしかない。

——それだけは、できない。

初めて立つ殺し合いの舞台。ゆで上がった頭で小兵太は考える。帰ると約束した以上、それだけはできないのだ。

——ならば、なんとする。

答えが出るわけもない。代わりに小兵太へのしかかるのは、刹那を刻むごとにいや増す死の重圧。そもそも敵うはずなどなかった。いや、ここまでならみ合い、生を保っただけでも大したものではないか。

——さあ、楽になれ。

忍び寄る甘いささやき。小兵太は奥歯をかみしめ懸命に堪えしのが、息は上がり、踏みしめる地面はまるで荒海のように揺れていた。

じり、と。

不意に小兵太の前足が動く。五郎左との距離を詰めるためなのか、この場が平坦であることを確かめるためなのか、自分でも分からないまま、動いた。

「ふ……」

月明かりにそこだけが覗く五郎左の口が、薄い笑みを形作る。「そうでなくてはな」と言わんばかりだった。

——吞まれてはならぬ。いまいちど体勢を立て直せ。いや、彼奴きやつがそんなスキを許してくれるか。なら、一か八かだ。ばち

小兵太の構えがゆっくりと変わっていく。上段の構えと八相はっそうの構えの中間のような、剣の柄つかを顔の右横で支えて刀身をほぼ垂直に立てる、独特の構えに。

「ほう？」

途中でその意図を察した五郎左の口から、楽しげな声がもれ出る。

「小僧、よもやその剣を習っていたわけではあるまい。付け焼き刃であろう。そんな剣で、この俺に勝てると思ったか？」

言葉とは裏腹に、五郎左の声は弾んだままだった。

それもそのはず。小兵太の構えは、遠く薩摩（鹿児島県）に伝わる示現流（じげん）？ トンボの構え？。幕末には剽悍無比（ひょうかんむひ）の薩摩志士達と共に天下無双の剛剣と讃えられ、先手必勝、一撃必殺（むね）を旨とし、防御の型は存在しないという突撃剣だ。構えは、初太刀にすべてをかけた小兵太の意志表示に他ならなかった。

「それに、肩と手に力が入りすぎておる。かような体たらくで、この俺は斬れぬわ」

絶死の気炎を前にして、五郎左はなお相手の悪所を指摘できるほどの冷静を保つ。

その自信の裏には、

——ずどん、と。

月夜の峠に響き渡る銃撃音があった。

「な……？ この、卑怯者、めが……！」

不吉な鳴き声があたりを覆う。カラスが一斉に飛び立っていく中、小兵太は胸（うが）に穿たれた衝撃に体をよろめかせた。

「勝つためになんでもやる。それが兵法。のこのこ飛び込んできた貴様が、阿呆なだけよ」

これが真実とばかりに五郎左はせせら笑う。小兵太の耳に、その哄笑は山びこのように聞こえた。痛みはなく、嘔吐感のみ。視野が急速に狭まっていく。

ならば、せめて。

「キ、エエエエエエエエエエ！」

肺に残された最後の呼気を、小兵太は振りしぼる。もう無駄な力が入らない体は、五郎左の想像を上回る速さで正宗を振り下ろした。

だが、想いは届くことなく。

月下に瞬いた刀身もまた、届くことはなかった――

伊織は水底で夢を見ている。

嘘とも真ともつかぬ事実^{じじつ}に身を震わせながら。

それは池へ何かが投げ込まれた水音で終わりを告げた。

反応した彼女は無意識に手を伸ばし、それを掴む。

掴むと、それは人の血で汚れていた。

が、彼女は感じたのだ。その奥底で「帰りたい」と慟哭する、小兵太の心を。

これは彼の欠片^{かけら}。約束はいまだに生きていた。侍たる彼が誓いを
違えるはずもなかったのだ。

ならば、彼は必ず帰るだろう。

ならば、出迎えねばならない。誰よりも声をかけ、抱きしめるた
めに。

伊織はぼんやりした意識のまま、ゆっくりと登っていく。やがて
湖上へ姿を現した。

夜。月は薄雲をまとい、虫達は季節をあの日と同じ夏だと教えて
くれている。

林には逃げるように走り去る人影があった。

小兵太とどこか似た印象のある男。けど、彼ではない。茫洋と見
送った伊織は水面を歩き、地面に降り立つ。ここに――

――事件は発生し、龍神は現代へと蘇った。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

奥村町は朝を迎える。

今この場所には？凶悪？と十人が見れば十人が言うであろう容姿を持つ男がタバコをふかしていた。

車のドアに寄りかかる彼は、煙を盛大に吐き出しながら周囲を見回す。

雑木林の間に、こぢんまりと拓けた広場。正面には人一人くぐるのが精一杯な鳥居があり、後ろには彼が三人も入れば身動きもできなそうなサイズの社があった。

この神社は伊織神社いおりというらしい。入り口の碑いしぶみにもそう書いてあったから間違いない。

林間に目を転ずれば、少し離れた場所にブルーシートで囲われた一角があり、無数の人間が忙せわしく出入りしている。

彼らの服装はさまざま。スーツに身を包んだ者もいるし、桜の代紋をあしらった帽子をかぶる制服もいる。街中をうろつくには少々恥ずかしい、鮮やかな青色をした作業服を着た者もいた。

もはや語るまでもない。ここは殺人事件の現場であり、彼らは警察官である。

そしてもちろん、いま新たなタバコへ火を点けた彼も警察——刑事だった。

彼——前園俊馬まえぞのしゅんまは、I県警奥村警察署の捜査課刑事一係、ようす

るに殺人事件などを主に担当する部署の巡査部長である。

歳は三十と少々だが、高卒すぐの任官なのでキャリアはそれなりに長い。身長は百七十そこそこ、ゴツイガタイ（特に胴回り）にゴツイ容貌、乱暴な言葉づかいで、周囲からはゴリあるいはジャイ。ンと皮肉を込めてあだ名されるデカだ。

今、前園は猛烈に機嫌が悪かった。昨日の深夜にようやく以前から追っていたヤマを片付けたというのに、それからわずか三時間後の朝六時に事件発生でたたき起こされたのだ。デカの仕事は労働法などあつてなきが如しとはいえ、人使いが荒いにもほどがある。腹を立てるなというのが無理な話だろう。

原因はそれだけではない。むしろおまけとさえ言えた。

「おい、さつさとしろ！」

前園はや二混じりのツバをいら立たしげに吐き捨て、覆面パトカーのドアをノックする。

その運転席には不機嫌の元凶、青い顔をしてその場から動かない刑事——折田新一郎巡査（二十五歳）の姿があつた。

「いま行きます！」

大声で答える折田は、しかしピクリとも動く気配を見せない。すでに到着から三十分以上たつというのに、その両腕はいまだしっかりとハンドルを握ったまま。シートベルトも外していなかった。

「お前なあ……」

前園は相棒へ向け、怒りを乗り越したあきれを言いよんだ。

折田が動かない理由は前園も知っている。この新人刑事は死体が怖いのだ。それだけならケツを蹴っ飛ばしてでも経験を積ませて克服させればいいのだが、彼のそれは筋金入りで、めまいや吐き気、失神をとまってしまう。もう立派な病気である。

「たく。死体見るたんびにいちいち貧血起こしやがって。テメエ警察向いてねえよ。今すぐ辞めちまえ」

「そんな……カンベンして下さいよ……」

八つ当たり気味に前園が言うと、折田はめそめそ泣き始める。イジメられっ子オーラ全開だ。相当にウザい。

「のび太のその態度が、よけいム力つくんだよ！」

前園は全開でイジメっ子理論をどなった。

「ボクは……のび太じゃありません。折田です」

「テメエなんざ、のび太で充分だよ。今すぐ改名しろ」

「そんな、無茶な……」

折田は嗚咽おえつをあげてしゃくり上げ始める。前園は頭を抱えた。

こんな奴が東大法学部卒なんて、世も末だ、と。

「何度も言ったが、なんでテメエはノンキヤリで入ってきたんだよ。東大君の頭なら、国家一種も楽勝で受かるだろ？」

それならオレ達はコンビを組まずにすんだのに、と前園はうらみ言に近いつぶやきを放った。

ご存じの通り、警察官は大きくノンキャリア組とキャリア組に分けられる。

ノンキャリアは地方公務員試験合格後、大卒なら八ヶ月、高卒なら一年間（都道府県によつては異なる場合もある）を警察学校で訓練期間に充てられる。

学校という響きのせいで誤解されている部分もあるが、名目上はすでに警察官であり、言いかえれば警察学校という部署で研修を受けるという？仕事？をしているわけだ。もちろん給料ももらっている。そして研修期間の最後の二ヶ月を交番で実地訓練にあててから、晴れて実戦デビューとなる。

一方のキャリアは国家一種に合格後、およそ二週間程度の研修をへていきなり警部補デビュー。一年も経てば自動的に警部だ。役職的には普通の署でも課長補佐で、奥村のような田舎の警察署では課長である。

さらに二年半後には警視で、これは署長、副署長級。ここまでくれば高卒の前園にとつて雲の上。給料は段違いだし、同じ署内にいてもたまに顔を合わせる程度。時おりほめられたりお小言をもらえはすむ関係となる。どう考えても水と油なお互いにとって、その方がいいと第三者でも断言できるだろう。

なのに、なぜか折田はノンキャリアで警察に入ってきた。それならそれでせめて事務方でもやっていけばいいのに、こともあるうに刑事を希望して、しかもそれが通ってしまったのだ。

本来、刑事は優秀な人材（勉強の出来ではなく、実戦で）にのみ、道が開かれる。階級上は交番に務める人間と変わらないのだが、一

般人が持つイメージ通りに格上の存在なのだ。

では、なぜ有能無能以前の問題である折田が刑事になれたのか。

前園は当然として訝^{いぶか}しんだ。が、折田の答えは簡単だった。彼の父は同県警の重鎮なのだそうだ。

（やってられねえ。いまだに血縁人事かよ）

前園は内心で毒づく。

それを知ってなお態度を変えない彼は、組織の圧力に屈さないと意味でいい刑事だろう。単なる権力嫌いかもしれないが。

それに、しょっちゅう現場で倒れる折田を彼はなんだかんだ言いつつ世話している。根はそれほど悪い男ではない（と、折田は思っている）。それを補ってあまりある悪党ヅラと乱暴な性格、言葉遣いの持ち主なだけで。

（終わったか……）

新たな一本に火を点ける前園のそばを、担架^{たんか}が通り過ぎていく。どうやら遺体に関する見分は終了したらしい。

「ゾノ」

声に振り向けば、好々爺^{いっしや}然とした壮年の刑事が立っていた。

「トクヤマ先輩。お疲れさまです」

前園は大先輩の登場にいちおう姿勢を正す。

「おう。こいつが状況だ。オレはあっちに付き添うから、こつちを頼むぞ」

「了解です」

警察をはじめとする制服組の公務員は、ムダを徹底的に排除する。最小にして必要充分なやり取りで担架を追いかけていくトクヤマの背中に頭を下げた前園は、受け取ったメモを開いた。

（どれどれ……）

達者かつやわらかさを感じる字体は、おそらくトクヤマの直筆。前園は読み進めていく。

（被害者は仁科政義^{にしなまさよし}、五十四歳、男性。職業、建設作業員。死亡推定時刻は昨日午後十一時^{さくじつ}ころから本日午前一時ころまでの間。遺体には腹部を含める三力所の刺し傷があり、それ以外にめだつた外傷はなし。遺体の周囲から出た血液反応の量と合わせ、死因は失血。犯行現場もこの伊織神社だと思われる。一方で財布から現金は抜かれていた、と……）

ここまでの情報で特筆すべき事項は、死に直接関係する傷をのぞいて遺体に傷がないこと。すなわち争つた形跡がないということだ。ただし、不意を衝かれたか顔見知りなのかまでは判別できない。

また、財布の現金についての情報は無視してかまわない——イコール、通り魔の可能性は皆無であると前園は結論づけた。

現場の立地条件などを判断するかぎり、犯行時刻には人通りが絶える場所。少なければ通り魔としては最高だろうが、まったくない

となれば話が別だ。獲物がいない場所で狩猟が成り立たないのと同じ理屈である。現金は怨恨という動機を隠すために抜かれたのだろう。これは計画された殺人と見て間違いない。

（発見時刻は本日午前六時ころ。第一発見者は朝の体操をしに神社を訪れた七十代の男性。被害者とはいちおう顔見知りだが、あいさつをかわす程度。ね……）

横目でちらりと奥をながめれば、件の男性はまだ事情聴取を受けている。

（ありや、シロだな）

ツルのようにやせて腰も曲がり加減な老人は、見るもあわれなほど気を動転させている。とてもではないが土方を殺せる人間ではない。前園は一瞥するなりそう判断し、視線をメモに戻した。

（凶器などの遺留品はなし。ただ、現場には残された被疑者のものと思しき足跡あり。おそらくスニーカー。サイズは二十七センチ、と……）

このサイズなら、被疑者はまず男性だろう。

以下はこまごまとした補足事項が並んでいる。いずれもトクヤマの所見であり、自分は自分で現場を見て判断した方がいいだろう。そう考えた前園はメモをしまい、またタバコを取り出した。

「む……」

あと一本しかない。箱の残りを確かめて舌打ちする前園の耳は、

お待ちかねと思われるエンジン音を拾った。

（ハイブリッドか。いい車に乗ってやがる）

やがて姿を見せた黒のプリウスは、鳥居の前で停車した。
降りてきたのは、神職のテンプレートとも言える白衣びやくえに浅黄色あさぎ（水色）の袴はかまをはいた一人の男。歳は前園がその手の人間に対して抱いていたイメージより、だいぶ若い。三十がらみで、しかし見た目の穏やかさや物腰はイメージに違たがわなかった。

予想がほぼ正解だった前園は、吸いかけのタバコをもみ消しながら姿勢を正す。

「鹿神かがみさん。こちらです」

「おはようございます。すみませんね、お待たせしてしまいました」

前園の呼びかけに、彼を発見した男——鹿神昭典かがみあきのりは相好そこうを崩し、お辞儀をしながら歩みよってきた。

「いえ、とんでもない。こちらこそお忙しいところをわざわざお呼び立てしまして、申し訳ありません。私は奥村警察署の前園と申します」

「前園さん…… よろしくお願いします」

「こちらこそ」

鹿神が再びお辞儀し、前園も連れて頭を下げる。そこで彼は大事なことに気付いた。

「おい、のび太出てこい。鹿神さん来ちまったぞ」

「のび太じゃ……ないです」

「んなこたどうでもいい。早くしろ」

「はい……」

のそのそと車からはい出す折田に前園は軽い嘆息を交えた視線を送り、鹿神へと向き直った。

「いちおう紹介しておきます。こ……っちが私の相棒の折田です」

前園は「この役に立たないヤツ」というセリフを飲み込み、「いちおうなんて、酷いです」と小声でボヤク折田も無視しつつ、言葉を続ける。

「では現場について、何点かお聞きしたいことがあります。こちらへどうぞ」

頷く鹿神を先導しようと前園は歩き出す。が、その場で顔を蒼白にして一步も動こうとしない折田に気付き、すぐ足を止めた。

「んだよ。ホトケならテメエがハンドル握ってがんばってた間に、とつくに司法解剖へ回ったよ」

「そうですか、よかった……」

折田はとたんに顔を明るく輝かせて続く。もう怒るのも面倒くさ

い、と前園は思った――

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

＊ ＊ ＊

伊織神社は石和家から歩いて十分くらいの距離にある。

この距離なら車を動かすまでもない。祁答院達は朝の散歩を兼ねた徒歩で伊織神社へと向かっていた。

とはいえ、時期が時期。ワイドショーもすでに始まっているこの時刻では、気温的に朝とは言いがたい。アスファルトを歩けば上下同時攻撃で熱が襲いかかってくる。

（昔から思っていたが、よく裸足で平気だな）

十メートルほど先を有川と手をつないで歩く古砥部を見ながら、祁答院はそう思っていた。

もちろん靴を買い与えるお金はある。実際、過去に買ったこともあるのだが、古砥部が嫌がって履かないため、下駄箱のこやしとなっていた。

と、その古砥部がびよん、と何かを飛び越える。

間もなく祁答院にも正体が分かった。マンホールだ。さすがにこれは無理らしい。

「センス、何がおかしいんすか？」

光景のほえまじさに崩されていた祁答院の顔は、横を歩く石和にすかさず見とがめられた。

「いや、古砥部がな……」

「ストップ。なんだか分かりませんが、俺みたいな見えないヤツにその話題を振るのはやめといった方がいいっす」

「む……」

石和の言葉は正しい。祁答院は口をつぐんだ。

そのまま石和を観察すれば、彼は渋い顔つきで古砥部と談笑しながら歩く有川を見ている。彼の目には、有川が楽しげに独り言をつぶやいているように映っているのだろう。

祁答院にとっての有川は、古砥部を頼めるとてもありがたい人間。しかし、そのせいで彼女が周囲から自分と同じ扱いを受けるのだとしたら、これは考えものだ。
もっとも有川は、

『そんなの、センスが考えることじゃないです。私がどうしたいか、ですよ』

と爽快感^{そうかい}たつぷりの返事をしてくれたので、今さら言つべきではないかもしれない。

それに、彼女が祁答院ゼミに入った動機は古砥部である。どういった経緯^{いきわづ}なのかは祁答院もくわしく知らないのだが、キャンパス内

でたまたま出会って友達になつたらしい。

ある日いきなり古砥部が『古砥部の新しい友達だ！』と有川を研究室に連れてきたのが発端で、以後すっかり古砥部と仲良くなった有川は、古砥部がいるからという理由でゼミに入ってきた。

なので、もともとの彼女は祁答院の研究テーマに関心を持っていない。ただ、入った以上はちゃんと勉強するという彼女のスタンスは、教える側としても頭が下がる存在だった。

これと正反対なのが石和。

彼は、はつきり言って講義に出る必要がないほど民俗学についての知識を持っている。事実上、祁答院の右腕と言って差し支えない男だ。

にもかかわらず、民俗学への興味はほとんど見せない。ここに入ればいちばん楽に卒業できるという理由で入ってきたらしい。ある意味でとても合理的な人間だろう。

「あれ、警察？ 事件？」

鎮守の森に視界を奪われた最後の角。ここを曲がれば伊織神社の鳥居が見える——に差し掛かった有川が、唐突に立ち止まる。

「見てくる！」

その言葉を聞き終えることなく、古砥部は走り出していった。

「これは……」

「まあ、立入禁止でしょうねえ」

遅れて有川へ追いついた祁答院のつぶやきに、石和が言葉を継ぐ。目に飛び込んできたのは、昨日とは一変したもののいい神社の光景だった。鳥居付近に縦列駐車された車は、ほとんどが一目で警察関係車両と分かるツートンカラー。残りの車もパトランプを天井に乗せている。ヤジウマの姿も見受けられた。

「有川さん、古砥部は？」

祁答院はどんどん小さくなる背中を目で追いながら訊ねる。

「見てくるって、行っちゃいました」

「そうか。困ったな……」

「古砥部って犬神なんですよ？ 犬ならほっとけばさびしくなつて帰ってくるんじゃないんですか？」

苦い表情を浮かべてふたたび神社へと歩き出した祁答院に、並びかけた石和が突き放すような口調で質問してきた。

「うん……帰って来ようとはするんだ。しかし古砥部の場合、迷子になる」

「それ、取り憑いてるって言うんですか？」

「微妙なところだな」

祁答院にも自信がない。妖怪に取り憑かれた人間の話はわりとあるが、取り憑いている人間の元へ帰って来られない妖怪の話は、伝承でも聞いた試しがない。まさに前代未聞の取り憑き方だった。

「ぼろぼろ泣きながら帰ってくるのが、たまんなく可愛い。アキラ、どこ行ってたんだよーって」

さらにその横に続いた有川が口を挟む。

「そのへんは普通の犬と同じなんだな」

石和のイメージでは、飼い主の帰宅を泣き叫んで喜ぶ飼い犬と古砥部が被っているらしい。

「そこまでは、な……」

そんなにかわいいものではない、と祁答院は言いよどんだ。

「なんかあるんすか？」

「仕返して私の体を勝手に操るんだ。前は気付いたらパンツ一丁で駅前にたたずんでいた」

これが普通の犬とあきらかに一線を画すところ。

しかも仕返しの内容がえげつなく、かつ祁答院が他人に怪しく思われることを意図的にやる。注意すると家庭内かぶりつきに遭うし、手がつけれないのだ。でも、つい許せてしまう笑顔がある。さびしがり屋なお山の大将は、危険な魅力に満ちあふれていた。

「あゝ、よく捕まりませんでしたね」

合点がいったらしい石和は、聞いているだけで気分が盛り下がりのようなマイナー音で「ご愁傷様しゅうしょうさまつす」と付け加えてくれる。慰めの

言葉のはずなのに、体を重くする効果しかない。

「真夜中だったからな。カゼを引いただけで助かった」

髪をかき上げて自虐の笑みを浮かべる祁答院の目には、朝日に煌めく涙が一滴。今日も彼は（いろんな意味で）キマっていた。

そんなぐだぐだトークを交わす三人が鳥居のそばまで近付いたとき、駐車されたパトカーの間から古砥部がひよっこり顔を出した。あたりをキョロキョロと見回し、祁答院を見つけるなりトテトテと走り寄ってくる。

「古砥部、勝手にどこか行っちゃ駄目でしょ」

それを出迎え、優しくとがめながら彼女の頭をなでる有川に、古砥部は関係なくも無視できない一言をつぶやいた。

「中で人が殺されたみたいだぞ」

「――」

天下の往来。うかつな口はきけまい。祁答院と有川の視線が無言で交錯する。

「どつたの、二人とも？」

その様子を見て、ひとり古砥部の声を聞くことができない石和が口を開いた。

彼の口調は、また古砥部が何かやらかしたのかとでも言いたげな気安いもの。もっとも彼の場合、知ったとしても態度はまったく変

わからないだろう。それは祁答院も同様で、心配は自分達の調査に影響が出るなといった程度でしかない。

「殺人事件だそうだ。古砥部、死体は？」

石和に少し待つよう目で伝えながら、祁答院は問う。

「ないよ。匂いだけ」

「なら、もう運び出されたな。けっこう時間が経っているというところか」

「それでも、しばらくは調査できそうにないですよ？」

続くセリフの「どうします？」を表情に託した有川が、祁答院に顔を向けた。

「そうだな……いつまでも滞在できるわけでもないし……」

考えたところで、すべて相手次第の話。具体案が出るはずもない。思考は自分に今日の調査をあきらめろと言い聞かせているだけだ。

「今日はどのみちダメでしょう」

「うむ……」

「おや、修二君？」

消極的な行動に熱心な石和の言葉に祁答院が頷きかけたとき、ちょうど鎮守の森から出てきた三人組の一人——神職の装束に身を包

んだ男がこちらに気付き、声をかけてきた。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

消極的な行動に熱心な石和いさわの言葉に祁答院けどういんがうなづきかけたとき、ちよつど鎮守の森から出てきた三人組の一人——神職の装束に身を包んだ男がこちらに気付き、声をかけてきた。

「鹿神かがみさん？」

男を見た石和がわずかに高い声を張る。それで自分の言葉を確信したらしい鹿神はにつこりとほほえみ、スーツ姿の——おそらく刑事を引き連れて四人のそばまで歩み寄って来た。

「やっぱり修二君か。ひさしぶりだね。話は蘭生そのおさんから聞いているよ。」

「ども」

年下にも丁寧な口調と態度をくずさない鹿神に、石和は頭を下げるといふより首を前に出して頭の位置を下げるという、とても礼儀が正しくない会釈えしゃくをする。

「鹿神さん、そちらは？」

対照的な二人のあいさつが終わるのを見計らって、公務員には見えない、どちらかといえば極道者、百歩ゆずってマル暴な容姿と雰囲気を持つ男が口を挟んできた。

「あ、これは失礼を。彼が先ほどお話ししました石和修二君です。修二君、こちらは奥村警察署の刑事さんで……」

「前園まえそのです。こっちは私の相方の……何してるのび太、あいさつしろ」

全員の目がもう一人、古砥部こてへを凝視して動かない男に集まる。

「ははい、折田おりたです。よろしくお願いします」

もやしメガネの折田は古砥部をその目にしっかりとらえたまま、前園の怒りに押し出される形で自己紹介を行った。

相棒の挙動不審っぷりに盛大な舌打ちを発した前園は、放置で自らの怒りを静めながら用件を切り出す。

「で、石和君。君がここの管理人だそうだね。さっそくだが、少し話を聞かせてもらってかまわないだろうか？」

「え……」

「そんなに時間は取らせない。協力してもらえると助かる」

「はあ……分かりました」

「悪いね。じゃあ、こっちへ」

他の人間は部外者と見なしたらしい。前園は祁答院以下を一瞥いちべつし、気安く受ける石和のみを奥へ誘う。会話を聞かれないようにするための配慮だろう。有川に無言で手招きされた古砥部が折田を解放し、残る全員で三人が社やしろの方へと移動していく姿を見守る中、鹿神が唐突に口を開いた。

「あの、失礼ですが……」

「おっと、これは申し遅れました。私は実岡大学で民俗学を教えている祁答院と申します。石和君とこちらの有川さんは私のゼミ生です」

古砥部を前に抱きかかえる有川が、祁答院の紹介に合わせて頭を下げる。

「これはご丁寧にも。しかし、あなたがそうでしたか。お話は修二君のお姉さんからうかがっております」

「と、申されますと？」

「はい。私がこの伊織神社の神事をお勤めさせていただいております、奥村神社の鹿神です。まあこの格好を見ればお分かりになると思います」

やはり警察に囲まれ、多少の緊張はしていたらしい。鹿神は少しほぐれた態度で自分の衣装を示しながら笑みを浮かべた。

「そうですね。しばらくの間ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします」

おもしろくもない冗談だが、初対面の人間が交わす当たりさわりのないトークとしては合格。祁答院は気持ちを営業モードに切り替えて、自分の顔を笑わせた。

「しかし伊織神社の調査ですか。変わったことに興味をお持ちです

ね」

「そうかもしれません。伝説を解き明かしたところで、もうかりませんから」

「確かに。ですが私からすれば、どんな形であつても神道にご興味を持っていただけるのはうれしいことです。もしよろしければ、私どもの神社にも足をお運びください」

「かまいませんか？」

「ええ、ぜひ」

微笑を貼り付けたままで行われる二人の会話は、むろんお互いがどこまで本当のことを喋っているのを探りながら進む腹芸合戦。なかなか手強いと両者がジャブを応酬する一方で、

「アキラがマジメにお話してる。つまんないぞー」

「しょうがないじゃない。あんなんでも、いちおう先生なんだし」

二人を見守る古砥部と有川はつまらなかつた。

「では、お言葉に甘えまして。明日にでもお邪魔させていただきます。ところで鹿神さんは、伊織神社の由来についてはおくわしいですか？」

「ある程度は知っております。ですが、大学の先生の研究に役立つほどでは……」

「それでも、ぜひ」

「うむ、そうですね……。分かりました。では、お越しいただいた
際にでも」

「ありがとうございます」

祁答院の謝意で勝負は終わり、互いに礼。

一見すると祁答院の優勢勝ちにも思える。が、そもそも話を振ったのは鹿神なので、彼の作戦勝ちとも取れる。実際、どちらが勝ったのかは当の二人にも分からなかった。

全身全霊を込めた勝負——はたからはまったくそう見えなくとも、祁答院はそう思った——の健闘をたたえ合い、目でエール「なかなかやりますね」「あなたこそ」を交換していた祁答院に、古砥部が声をかける。

「む。アキラ、シュウジ戻ってくるぞ」

見れば後ろに刑事二人を従え、いつもと変わらないトボケ顔で帰ってくる石和の姿があった。

「石和君、お疲れさま」

「いや、ホント少しですし」

「では前園さん、祁答院さん、私はこれで失礼いたします」

頃はよしと見計らった鹿神が一礼する。祁答院との会話は、自分が警察に石和を紹介した手前、その話が終わるまで帰れないという

配慮の時間つぶしだったらしい。

「ありがとうございました」

いちおうは心のこもった前園の言葉に鹿神はうなづき、

「修二君も。またうちへ遊びに来るといい」

「ういっす。そのうち」

「では」

最後まで折り目正しい態度を崩さず、自分の車へと乗り込んだ。間もなく独特のエンジン音を立ててプリウスが起動し、祁答院が見送る中で走り去っていく。

それが角を曲がって見えなくなり、「さて、我々も」と祁答院が言いさしたとき、機先を制したかのような声が響いた。

「のび太、オレ達も署に戻るぞ。検死の結果、上がったそうだ」

振り向けば、いつの間に電話を済ませたのか携帯をしまいながら顔を引き締める前園の姿がある。

「り、了解……」

続いて、刑事二人。一方は無遠慮に祁答院達をながめ回し、他方はやっぱり古砥部をおびえた目で注視しながら覆面パトカーへと姿を消した。

「……なんだか、あわただしい連中だったな」

「そつすね」

まだ若葉マークが要りそうな、折田のぎこちない運転。二台目の車が伊織神社を去った後、祁答院と石和はそちらの方向を見やっただけで言葉を変えず。

「で、何を聞かれたんだ？」

「大したことは。管理についてどうのとか、んなもんですよ。ただ殺されたの、俺の叔父さんでした」

「お……」

うつかりしていると聞き逃しそうなほどさりと流された単語。祁答院は続くセリフをノドに詰まらせた。

「なあアキラー」

「古砥部、ちょっと待て。で？」

「近所に家があるし、昔から頻繁に付き合いのあった人なんで、しばらくは警察につきまとわれるかもしれせん」

「アキラってばー」

「だからちょっと待て。それは言ったのか？」

「言いました。変に隠していると、後でいろいろメンドくさそうだし」

「修二の行動原理ってそれだけだもんねえ」

「うっせ」

茶化すように真実を突く有川に、石和はむくれてみせる。が、普段より毒気は薄い。彼なりに気はつかっているようだ。それでもダウソウ系の態度に変わりはないが。

そんな教え子達のほほえましいやり取りに目を細める祁答院の腕に、

「むうー、アキラー！」

がぶり。置いてけぼりにされた古砥部の犬歯が突き刺さった。

「痛！ 何するんだ！」

「アキラが無視すんのが悪い！」

古砥部はへちやむくれてむーむー唸る。

「はいはい。私が悪かったよ。で、なんだ？」

祁答院が四つの大穴が空いた腕の痛みに顔をしかめながら訊ねると、

「龍神、復活してるぞ」

返ってきた古砥部の言葉は、とても聞き逃さないトンデモ話だった。

祁答院は有川を見る。どんな反応をするのが適当なのか、うかがっているような表情。次に首を目一杯にめぐらし、後方の伊織神社を見やった。

昨日と変わらない清楚な佇まい。

そして、一抹の違和感。

いや、違和感ではない。冷静に五感を働かせば、常人でもここから先は異常な空間なのだと理解できる。なにしろ、昨日はあれほどうるさかったセミの声が今日は外からしか聞こえてこない。鎮守の森にはただの一匹もないのだ。中で蠢いているのは、いまだ現場検証中と思しき警察関係者——もっとも危険に鈍感な生物（人間）だけだった。

気付いてしまえば、ミニサイズの鳥居はさながら地獄へと通じるハデスの門のように見える。湧き上がる感情は、まるで好天に恵まれて雪崩を起こす直前の雪山にいるかのような、見えず、匂わず、無音で、にもかかわらず？ここにいたら死ぬ？ことだけがまざまざと感じ取れる恐怖だった。

「どったのセンス？ 古砥部がまた何かやったん？」

古砥部を知覚できない石和ののんびりした声が、なかば呆然と立ちすくんでいた祁答院を現実に取り戻す。

「……古砥部、それは本当か？」

「古砥部はウソつかない！ 気配だけで姿は見えないけどな」

古砥部も口調こそ変わらないが、顔はマジメそのものだった。祁答院と違って緊張感が見えないのは、戦って勝てればよし、ダメなら尻尾を巻いて逃げればいいという彼女一人に限定された対処法が確立しているせいだろう。

「だとしたら、マズいな……」

「あの、センス、俺にも分かるように……」

「修二ちよつと静かに。センス、どのくらいマズいんですか？」

有川とて、多少なりとも人外を識^しる者。古砥部を信じている。その問いは、これまでにない固さを帯びていた。

「うん……」

どのくらい説明するのが妥当か。祁答院は言葉を選びながら口を開く。

「まず、見えない人間に直接的な影響はない。が、それは直接見たり触れたりできないというだけで、それ以外の手段、たとえば古砥部の呪いなんかは万人に等しく作用するんだ。ここの龍神なら、おそらく大嵐を巻き起こせるだろう」

これ以上を言うべきか。正確な情報を与えないのは問題だが、まだ発生していない出来事をムダに大きく喧^{けんでん}伝し、恐怖をあおる結果になっても問題だろうと祁答院は口をつぐむ。

祁答院の経験則を語るならば、伝承の類にうたわれるモノは真実としてその力を持っている。

ここの龍神ならば、天候操作に加えて寺を一撃で焼くほどの雷を
発し、釣り鐘をも溶かす炎も吐けるということだ。たとえ姿が見え
なくとも。

むしろ姿が見えない分やっかいすら言えた。いや、やっかいで済
ませられるならばヨタ話で終えられる。問題ない。問題は、その与
太話が現実としてこの地を壊滅寸前に追い込める力を持っていると
いうふざけた話を、まともに対処できる人間ほど聞く耳を持たない
だろうその一点だ。

「……そんなの、どうするんですか？」

「どうするもこうするも、専門の人をお願いして鎮めてもらうのが
一番なんだが……」

一市民として、手にあまる危険をしかるべき対処が可能な公的組
織に連絡して解決を頼む。思考を中断させる有川の問いに、祁答院
はもっとも簡単かつ現実的な解決法を提示した。

ただしそれは、

「でもさっきの神主さん、気付いてるようには全然見えませんでし
たよ？ まったく当てにならなそうですけど？」

そんな機関や人間が存在すれば、の話だが。

「うん……」

有川の指摘に、祁答院は頭をかきながら考える。
カノジヨラのような存在は、良くも悪くも伝承という人々が持つ

イメージに縛られる。裏を返せば、その力は伝承が伝えられている範囲に限定されるということ。奥村町は甚大な被害を被るだろうが、範囲がそれ以上となる可能性は低い。自分や身内の安全だけを優先すれば、避難するだけで事は足りるのだ。

「古砥部は？」

逃げてても根本的な解決にはならない。自分達にできることはないか。祁答院は頼みの綱に話を向ける。

「だいたい同じくらいの強さだけど、ここでは勝てないと思う。こんなくらい、アキラにも分かるだろう」

古砥部の返答はやはり説明が足りなかった。

「どういうことですか？」

解説を求める有川に、祁答院は口を開こうとする。開きかけた瞬間、石和が何かを問いかけてきたような気もしたが、かまわず話した。

「無視ですか？」

「そう。簡単にいうと、ホームとアウエーだ。神様や妖怪が力を発揮するには、そもそもその力に加えてその土地における知名度、信仰そのモノがどのような姿をしていて、どんな力を持っていると人々が思っているか、などの要素が複雑に絡み合う。結論としては、ここに祀られる龍神にとって、ここはまさに最高の力を発揮できる場所なんだ。一方の古砥部はよそ者。不利だな」

「そついうことだ！」

人様の解説に胸を反らして大いばりする古砥部に、なぜか落ち込んでいる石和。

「力尽くはムリだということだな。古砥部、会話はできると思うか？」

「まだ暴れ出したわけじゃないし、きっと平気だ。でも姿を見せてくれないと、どうしようもないぞ」

「ま、それもそうか。うん……」

祁答院はアゴに手を当てて考える。

実を言うと、フィールドワーク先でこういったケースに遭遇したことは過去にゼロではないのだ。

その際、あるツテから紹介され、実際に手を貸してもらった専門家がいる。

彼は個人としても信頼のおける人物で、仕事に関しても有能かつ迅速、料金は私立探偵を雇うより安い。三拍子も四拍子もそろった掘り出し物だ。

ただ正直に言って、彼を頼りたくなかった。その理由は、彼が人外関係のトラブルバスターというより、人外を専門とする殺し屋だから。

いや、殺し屋という表現すら生温いかもしれない。料金の安さはこれが原因だと祁答院はにらんでいるのだが、彼は自殺願望があるとは思えないウォーマニアックスである。

戦えるならなんでもいい。とにかく俺を戦わせろ。自分の命は、

戦争という最高の娯楽に参加するため最低限用意すべきチップである、と口に出したりはしないものの、そうとしか思えない態度なのだ。

彼に全面解決を頼むイコール、彼が相手のどちらかが死ぬということ。

救いは、平時の彼が高校二年生という歳には不釣り合いなほど道理をわきまえた男であり、仕事に忠実でもある点か。依頼内容を細かく指定すれば、たとえどんなに不可能な作戦であっても、道義的である限りはその通りやってくれる。エ。アばりにブチ切れるまでは。

これは前回依頼したときに祁答院も目撃したのだが、とある地に祀られる鬼が復活した際、苦戦した彼は暴走を開始、もはや人間とは思えぬ雄叫びを上げながら鬼を八つ裂きにし、斬り飛ばした腕をくわえまま四つん這いでどこかへ走り去ってしまったのだ。

その後しばらくして戻ってきたのだが、

『すみません。見苦しいところお見せちゃいましたね』

と口の端から血をたらしままにつこり笑った光景は、いまだに忘れられない。古砥部もビビってシッポを丸めていた。

「アキラ」

顔色を見た古砥部は、ある程度こちらの思考を読んだらしい。首を横に振りながら祁答院のソデを引っ張る。

「……そうだな。彼は最後の手段だ。まず我々で出来ることをやっ

てみようか。私が話して解決の方法を探ってみよう」

「……そんなんで大丈夫なんですか？」

「ま、できる限りな。それに……」

自信はないが、やらないよりはマシ。有川の言葉に祁答院は肩をすくめて応じる。

「古砥部がいれば、逃げるくらいは平気だぞ」

加え、万が一の方策もある。古砥部は頼もしげに胸を叩いた。

「そういうことだ。あせっても仕方ないし、こっちはちよくちよく様子を見に来ることにして、我々は当初の予定通り調査を進めてみよう。ひょっとしたら、ヒントがあるかもしれない」

「……分かりました。じゃあ、行きましょうか。ホラ修二、どうしたの？ 置いていくよ？」

「説明しろよ……」

下を向いて何やらぐちぐち言っていた石和を有川はうながす。皆に不安を与えないよう微笑を形作った祁答院は、振り向きざまに視界のはしにとらえた伊織ヶ淵の湖面が——一瞬、赤く染まったのを見逃さず、密かにメールを打った——

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

* * *

メールは時間をまたぐことなく千里を越え、彼——やしまよしかけ八島義影の携帯を揺らす。

ただ、彼の姿を見る者がいたとしたら、はたしてメールが本当に現代へ届いたのかと首をひねっただろう。

彼は今、昼なお暗い原生林を疾走していた。

無音で枯葉のつもった地面を蹴る足には長足袋ながたびを履き、スネには脚絆きゃはんと金属製の足甲が巻かれている。下衣は黒い短袴たんこ。上衣には同色でソデ無しの着物を着て、その下にのぞくはずの胸板は鎖かたびらに包まれている。上腕にもやはりものものしい手甲が装着されていた。

これだけで総重量は二十？以上になるだろう。にもかかわらず、彼の俊足はまさしく疾風だった。頭巾ずきんこそ被っていないが、背には目測でおよそ全長二尺と思われる小太刀も背負われている。見る者の時代を錯誤させるその姿は、

——忍者。

の形容以外に、ふさわしいものが見当たらない。

その得手とするスキルも、見た目に違わぬ隠密行動。しかし元来

は戦士であり、決して殺し屋ではない彼にとって、心情的な用途は暗殺ではない。相手に気付かれなければ手間も省けるし、何より殺す相手に無駄な心労をかけずに済むという彼なりの気づかいった。

それは思わぬジャマを受けて水泡すいぽうと化す。

（ち。切つときゃよかった）

義影は懐から届く振動に内心で舌打ちした。

このわずかな音で、風上にいるターゲットの気配が変化したのだ。こちらの追撃がまだ続いていることを察知したらしい。緩められていた速度は、再びトップギアへと切り替わる。

それでも彼我の距離はみるみる縮まっていた。

もはやターゲットの体力は限界へと差しかつていたのだろう、義影の耳に激しい息づかいが届き始め、風に乗って運ばれるカレの恐怖も、目を覆いたくなるほどに増大していく。

（仕事とはいえ、こういうのはやりきれないな。報酬は割増だ）

眉間にシワを寄せた義影の目が、前方に横たわる巨木を捉えた。幹の太さは直径で二mに達するか。間髪入れず体をひねり、ムーンサルトで飛び越えたとき――

退路を失い、覚悟を決めた一匹の狽むじなが義影を見上げた。

狽の体が飴細工でも作るように溶け、別の何かへと変容していく。またたく間にふくれ上がる五体が巨人の形態をとり始める。

（大入道か。今さら遅い）

内心で断言する義影の手が、上衣の内側にある隠しへ伸びる。
取り出される棒手裏剣——クナイは三本。霊力を通したそれを落下しながら投擲し、直後に空中で一回転する。墜落する直前に大木を蹴り、低空を飛んだ。

義影がふたたび視界にとらえた貉は、クナイの着弾による苦痛で身をよじらせ、元のカタチへ戻ろうとしている。そこへ、

ずむ、と。

衝撃で後方へ飛ばないよう胴体を押さえ付けた義影の小太刀が、貉の頭部を串刺しにした。

介者剣術——剣の腕を競って勝つ道場剣法ではなく、戦場をわたる鎧武者達を確実に殺すための剣——は、まさしく一撃であわれな妖怪の命を奪う。せめてもの慰めは、痛みを感じる暇すら与えられなかったくらいであろうか。

「悪いな。お前のテリトリーを破ったのは俺の依頼人だし、お前はここを守らないと生きていけなかったんだろ？」

着地し、崩れ落ちようとする貉へ逆手でトドメを突き下ろした義影は、カレの体が地面に横たわる前に受け止めた。

「けど、俺たち人間がメシを食ってくには金がいるし、俺はこういう金の稼ぎ方しか知らない。依頼人には伝えとくよ。お前がいなくなっても、必ず次のヤツが立ち上がるだろうって」

義影は貉の亡骸を抱えなおし、あたりを見回す。

濃密な木の匂いに覆われたこの場所は、本当にここが日本であるのかと疑いたくなるような大自然。かつてのこの国の原風景を今なお保つ、本州最後の秘境だった。

義影の依頼人は、この森のリゾート開発を施工する大手ゼネコンと、それを推進する地方公共団体。森は切り崩されていき、住み処を脅かされたカレは、たった一匹でそれに立ち向かったのだ。

それは絶望的な戦いで、勝ち目は最初からあるはずもなかった。カレの一時的な善戦は五名の犠牲者を出したが、それもゼネコンが事態を解決すべく霊能者を雇うまでの話。結末は語るまでもない。

義影は灰となって消えてゆくカレの骸を掲げ、森を見すえた。

「お前らが臆病風に吹かれて、見捨てたコイツを見る。もし悔しいと思うなら、立て。立って力の限り抵抗しろ。お前らには座して死を待つ以外、それしか道はない」

人と、動物ですらないそれ以外のモノ。話し合いの余地など、どう考えても存在しない。ただ義影は少ない双方の橋渡しを担える存在として忠告した。

黙して答えを待つ彼に対し、無風の森がさわさわと囁き合^{やや}うように揺れる。

——どうする、どうする、どうする。

——この人間の言う通りだ。悔しい。このままでは我々は。

——戦うのか。不可能だ。勝てっこない。

さえずる森達に義影はかすかな失望の念を示し、もはや重さを感じなくなった貉の死を悼^{いた}むべく目を閉じた。

オマエ、ムダ死にみたいだぞ。お互い同族に恵まれてないな。

黙^{もく}禱^とをやがて終えた彼は目を開き、こんなところによく届いたものだと呆れながら携帯を開く。メールには祁答院の現在地と大まかな状況が簡潔に説明されていた。

「あの先生もいかげんトラブルに巻き込まれやすい人だね」

苦笑しながら携帯をしまい、義影は走り出す。自分と同じく人外の理^{ことわり}を知っていると信頼するがゆえ、特別価格で仕事を提供している依頼人の許へ。

途中、義影は木々に向かって言い放った。

「言い忘れてた。お前ら、やるなら死ぬつもりでかかってこいよ。こんなつまらん虐殺はなるべく俺もやりたくないからな」

求めるのは、死闘。貼り付けられた笑みは三日月のごとく。

——戦場を求めさまよう？ 狂犬？ は、ここに召喚される。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？（後書き）

.....。

私の作品を両方お読みになっている方は、混乱する可能性がありますね。

このお話はまちがはなく「妖怪学」です。

筆者がまちがえて投稿したわけではありません。

過去に実績のあるヤツが言っても信じてもらえないかもしれません（爆）。

繰り返します。筆者が「まちがえた」わけではありません、よ？

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

＊ ＊ ＊

奥村警察署おくむらに戻った前園俊馬まえそのしゅんまは、捜査課一係にある自分のデスクに寄りかかってタバコをふかしていた。

同僚達がオフィス——俗称デカ部屋をあわただしく出入りしているのは、間もなく署内の講堂に設置されるだろう仁科政義殺害事件にしなまさよし特別捜査本部の下準備を行っているため。

殺人事件ともなれば、捜査に参加するのは所轄しよかつの警察署の刑事だけではない。県警本部の刑事一課からは本部長を務めるべく管理官が来るし、それ以下の刑事達もやって来る。機動捜査隊と呼ばれる県内広域捜査を担当する連中も来れば、犯罪の形態に合わせてさらにいろいろやって来る。外国人がらみなら組織犯罪対策二課、暴力団がらみなら同四課、銃器や薬物がらみなら同五課、といった具合に。

こうして集まった刑事達が一堂に会し、よくドラマである捜査会議が開かれる。実際にはあんなきれいな会議場がある警察署などめったにないが。

「ふん……」

周囲に一瞥いちべつをくれた前園は、ぶかりと煙を天井に吐き出しながら

鼻を鳴らした。

喧騒^{けんそう}に包まれた署内の空気は、まるでお祭りの準備に奔走^{ほんそう}しているような、どこか楽しい活気^{てい}を呈している。これから始まるやりがいのある仕事に心を躍らせているのだろう。

（気に入らん。何年もこの商売やって来て感覚がマヒしちゃってるのは分かるが、人が殺されたんだぜ？　もう少し感情を隠せよな）

彼らとて、もちろん表ではしおらしくしている。これは内部の人間にしか見ることができない彼らの素顔だ。

内心で毒づく前園がちらりと横目で開け放されたドアの外をながめると、カタギにはとも見えない連中——マル暴と呼ばれる四係の人間が気忙^{きせわ}しげに走り抜けていった。まだ彼の耳には届いていないが、そちらの可能性もあるのだろう。

「どうよ？　病院行ってるトクさん、なんつつてんだ？」

タバコを灰皿でもみ消しながら、たったいま電話を終えた折田新^{おりたしん}一郎^{いちろう}に問う。

「はい。ガイシャはやはり仁科政義で間違いないと。妻のみすずさんが確認したそうです。死因も鑑識の見立て通り、失血。それと凶器に関してなんですが、司法医は傷の大きさや深さから、ドス、あるいは小振りのポン刀（日本刀）ではないかと言ってるそうです」

「ドスカ……」

どつりでマル暴の連中が動くわけだ、と前園は納得して頷^{うなづ}いた。

次いで、考え始める。

対策本部が置かれた場合は、所轄の刑事と本部のエリート刑事がコンビを組んで行動する。が、それは命令されるのが嫌いな前園にとって苦痛でしかない。なら、役立たずの折田を引き連れて行った方がいくらかマシ。ここまで情報があれば充分に動けるだろうし、のんびり本部ご一行様の到着を待っている時間はムダというものだ。

（今すぐ動くべきだな……）

考えをまとめた前園は「行くぞ」と折田の腰をたたき、歩き出した。

怪訝^{けげん}な顔をした折田は、しかし置いて行かれてはかなわないとばかりに付き従う。

「のび太。今後、オレ達が捜査すべき点を挙げてみる」

追いついてきた折田に、前園は口を開いた。

「へ？ 聞き込みじゃないんですか？」

「バカ。そんなの当たり前だろ。オレは、オレ達だけで金星を上げるための具体的な作戦を聞いたんだ」

「なら、先にそう言って下さいよ……」

「何か言ったか？」

「いえ！」

エレベーターに乗りながらぎろりと目玉を動かす前園に、一階のボタンを押した折田はあわてて首を振る。

「たく……お前はそんなだから、いつまでたってもものび太なんだよ。確かにオレ達は全体の中の一部分だ。けど、頭とカンを働かせて常にいいところ見せようと思ってねえと、いつまでたっても上にアゴで使われるだけだぞ」

事実、そう。警察は組織である以上、捜査も当然チームプレイなのだが、中には単独行動が見逃される刑事も本当に存在する。それは言うまでもなく優秀な存在で、放し飼いにした方が有益だと上に認められた連中ばかりなのだ。

自由がある分、とうぜん周りの見る目はシビアになるが、文句を言わせないだけの戦果を上げればいい。前園もそうして自由を手に入れた男だった。折田がその結果として押しつけられた相棒なのも、いわば必然の巡り合わせなのだが。

「そうですね……」

まるで納得していないが、殴られるのが嫌な折田はとりあえず賛同した。

そもそも彼は、自分で考えて失敗して責任を負うくらいなら、よほどその方が良いと思っている。

人付き合いがお世辞にも上手でないと自覚している彼は、キャリアで入れば権力争いに巻き込まれ、ドロドロした人間関係にストレスばかり溜めてしまいうと判断し、なおかつ警察官になれと厳命してきた父親も納得させるため、わざわざノンキャリアの道を選んだのだ。

結果はごらんのとおりで、どちらにせよダメだった。ちなみに、折田がこれまでの警察生活四年間で経験した同僚達の中で、まだその暴力に愛情が感じられる前園は、一番まともに相手をしてくれる人間である。

「分かったら、説明！」

エレベーターを降り、事務受付窓口へ手を振りながら轟く前園の怒声に、折田の元来は極めて優秀な頭脳が回転する。

「はい！　まずは犯行時刻に不審な声や人物を見なかったか、近隣住人への聞き込みです。現在、トクヤマ先輩が奥さんからガイシャの友好関係を聞き出していますので、それが判明次第、その聞き込みも開始すべきでしょう。中でも凶器が刀剣の類と判明した以上、管轄内の刀剣類所持者の中からガイシャの知り合いを洗い出し、事情を聞くべきだと思います」

「よし、まあまあの答えだ。その心は？」

「前者は情報収集および捜査対象の確定。後者は一本釣りです」

「上出来だ。けどのび太、お前聞かれるとスラスラ出てくるのに、なんで一人だとダメなんだよ？」

「問題を解くのは、簡単ですから」

駐車場に移動して車のキーを取り出す折田の姿は、彼にしては自信に満ちあふれていた。

「じゃあ、問題を考える頭がないのか。頭が良いんだか悪いんだか、

よく分からないな」

ロック解除を確認した前園は、かぶりを振りつつ助手席のドアを開ける。

「問題を考える頭、ですか……。そんなこと言われたの、初めてです」

「そうか……。まあいい、出せ」

シートに肥えた体を収めた前園は、アゴで前を指し示した。

「はい！ あの……」

素人丸出しの指さし確認でシートベルトをしめ、ルームミラーの角度を調節した折田は、ハンドルを握りながら何かを言いよどんだ。

「んだよ、さつさと出せ」

前園はもう一度、天井へ向けんばかりにアゴを突き出す。

「……ゾノさんは気付きましたか？ あの神社の雰囲気？」

「んん？ 神社なんだから、神秘的な印象があっても不思議はないだろ。だがな、そんなのは単なる気のせいだ」

言葉には意外なほど力強さが無い。超常現象などハナから信じていない前園でも、死体をあつかう中で不可解としか言い様の無い体験をしたことはあるのだ。いずれも偶然で片付けられるレベルなのだが、これは長く刑事を勤めた経験を持つ者にとって共通の認識だ

った。

「そうじゃなくて！ 何かこう、もっと悲しい感じの……」

前園の煮え切らない態度に力を得たのか、折田はここぞとばかりに声をはりあげ、最後はやっぱり彼らしく尻すばむ。

「気のせいに決まってるだろ。もしそんなあるとすれば、ホトケさんがオレ達に早く犯人を挙げてくれって言ってるんだよ。そう解釈しとけ」

前園自身、死体を見て何も思わない木石ぼくせきではない。折田の指摘もあながち見当はずれではないと思っている。が、それをいくらわめいたところで自分達のやるべき仕事は変わらない。気の持ちようだとアドバイスする前園に、折田はなおも食い下がった。

「だって……それにあそこ、なんか変なのいましたし……なんか犬っぽいヤツ」

「頭おかしくなったのかお前？」

「違いますよ！ ……たぶん」

「ち。のび太のたわごとなんか聞いてるヒマはねえんだ。さっさと出せ」

「気のせい、なのかな……」

まだ納得いかないといった表情で、折田はブレーキから足を離す。飾り気のない、しかし毎日の洗車でやたら小綺麗な覆面パトカーは

ゆるやかにガレージから動き出した――

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

* * *

「……と、言うわけだ」

午後三時。相手の指定通りの時刻に屋敷を訪問した祁答院^{けとついでん}は、通された応接間で値段がはると一目で分かるソファに腰かけ、朝の出来事を石和^{いさわ}に語っていた。

「龍神ねえ……。んなの、リアルにいるわけないでしょうに」

にわかには信じがたい。常識人として当然の反応を示す石和は、これまた高級感あふれる大理石のテーブルにヒジを置き、わざわざ頭をもっていつて後頭部をかきむしる。

「私もそう信じたいよ。しかし古砥部^{こてふ}がそうだと言った以上、まぢがない」

「俺、そもそも古砥部が見えませんし。センセやにしきがいるっつーから、まあいるんだろうなって感じですから」

「のわりに、石和君は妙^{みょう}に妖怪とかにくわしい。何かあるのか？」
「……俺も本読むのは嫌いじゃないんで。んで、ウチにある本ついたらオヤジの蔵書になりますから」

「なるほど。門前の小僧、というわけだな」

納得のいく回答をえても、祁答院の笑顔はさえない。理由の一つは、なるべく避けようと思っていた話題、父親についてはからずも触れてしまったからだし、

「……しかし、おちつかない部屋ですね」

露骨^{ヌグツ}に顔をゆがめた石和が話を切り替えるべく持ち出した話題もおもな原因だった。

「私もだ。見るからに金がかかっていそうな部屋だし、しかたないだろ」

高級品^{おんこう}。これは穏当な表現で、目の前に展開する光景はそれどころではない。

話をふってきた石和ともども、祁答院は通された部屋を目で物色する。インテリアはすでに紹介したソファやテーブルも含め、小物一つにいたるまで高い品だと素人にも判別がつくすばらしい物ばかりだった。

にもかかわらず、全体のアンバランスぶりはどうであろう。アジアやヨーロッパはおろか、中東や南米、アフリカンテイストを感じる物まである。まったく統一感がない？和室？だ。

しかも、それらが見事に反発しあっている。フランス風の柔らかい印象を持つクローゼットには、ウイスキーやラム、老酒などハード系の酒が混然一体と並べられ、脇には濃淡^{のうたん}の筆づかいがすばらしいかけ軸。そのとなりには前衛的なNYアートの絵が飾られている。ソファの下に敷かれたカーペットはラテン系の極彩色だ。はじめは畳^{たたみ}がのぞき、照明は豪華なシャンデリア。家主は武具の収集にも熱心なようで、ヨーロッパ風の全身鎧が立つとなりには、源平合

戦に出てきそうな大鎧もすわっている。もはや見ているだけで酔いそうだ。

その片隅には、蒔絵まきえの刀架とうかにしぶい拵しじゆえを持つ大小が鎮座していた。

目ざとくそれを発見した石和は、どうもこの部屋の毒氣に当てられていたらしい。おちつきというより無氣力の結果として動きたがらない彼が、ふらふら立ち上がって近付いていく。

「見て下さいよこの刀。なんか偉っそうに名札付いてますよ。相州五郎正宗うごろうまさむね」

「さわるなよ。本物だとしたら、とんでもないお値段だ」

「いくらくらいなんすか？」

「刀剣は私もあまり……。しかし正宗といえば、最低一千万、物によつては三千万以上だ」

「マジすか？　こんなのが三千万？」

「石和君、席にもどりたまえ」

石和の様子がおかしい。とっさにそう判断した祁答院は、やや言葉尻を強く言った。

「……ういっす」

いや、やはり普段と変わらないのか。理知的な光を宿す石和の半眼にくもりはない。座るのもおつくうだという態度で石和が元の場

所に収まると、話題を失った二人はふたたび沈黙した。

「なあ……」

が、やはり落ち着かない。まぎらすためには会話が一番だと祁答院は口を開く。

「なんすか？」

「今からお会いする奥村さんってのは、どどういう人なんだ？」

「センスだって知ってるでしょ？ 昔こころ一帯を治めてた奥村藩の殿様の子孫ですよ」

「それくらいは知っている。私が聞きたいのは、現当主の奥村さんがどんな人なのか、と言うことだ」

「んなの知りませんよ。俺も初対面なんだから」

「そうか……」

「ああでも、こころじゃ有名な奥村建設の社長です」

「あまり参考にならないな。だいたい、金持ちなのは屋敷を見た時点で分かる」

祁答院はもういちど部屋を見回した。趣味がいいのか悪いのか微妙なもの、この部屋を見れば分かる。個々の品を観察するかぎり、見る目が確かなのもまちがいないようだが。

「そりゃ失礼しました。付き合いのあったオヤジが生きてりゃ、もちっとマシな説明もできるんじゃないかな」

祁答院の返答が気に入らないのか。それとも、自分が父に劣る点を悟って虫の居所が悪くなったのか。石和は機嫌の悪さをアピールするように全身を弛緩^{しかん}させてへらず口をたたいた。

「そういえば、石和君のお父さんは……」

ここでもつきまとう石和隆史の影。話題にこまつた部分もあるが、祁答院は自らの興味を抑えきれずに訊ねる。

「あのクソ親父なら、三年前にくたばりましたよ」

もはや気分を害するのも心外といった態度。石和はそつけなく掲げた右手で空をつかんだりひろげたりして見せ、蒸発のサインを出した。

「む……」

「んなこと、どうでもいいじゃないですか。それより、ようやく来たみたいですよ」

常に第三者の立場を崩さない人間ならではのといえる、状況判断のよさ。いち早く来室者の気配を察知して席を立つ石和に、祁答院は続いた。

「お待ちせいたしました。私が奥村家第二十三代当主、奥村信保^{おくむらのふやす}でございます」

間もなくふすまは開き、四十歳前後と思われるご当主様——奥村信保はあいさつしながら部屋に入ってくる。

インテリアの趣味はさておき、本人がまとう和装はダンディズムを感じさせた。貫禄も申し分なく、地元の名士と呼ぶにふさわしい。それでいてどこかおっとりとした品の良さがただよるのは、やはり血統なのだろう。

どうぞ、と差し出された奥村の手に従い、祁答院達は再びソファへ腰を下ろす。

「どうも。私立実岡大学で民俗学を教えている祁答院晶けどういんあきらと申します。本日はお忙しい中、お時間を取っていただいて恐縮です。よろしく願いたいします」

「はっはっは、そうお気になさらず。今の私は先祖代々の財産を食いつぶしているだけの道楽人です。ヒマを持てあましておりますから」

丁寧に頭を下げる祁答院に、金齒せんすをキラリと輝かせる奥村は手にした扇子せんすを閉じたり開いたりしながら鷹揚おつように応じた。

「じゃあなんで、こんなに来るのが遅いんだよ」

と、たいへん正直なつぶやきをもらす石和を目で制しながら、人物的にまずはご機嫌うかがいだろうと話の方針を固めた祁答院が糸口を作っていく。

「当代は敏腕の建設会社社長、とおうかがいしましたが？」

敏腕かどうかは、もちろん知らない。ただのヨイショだ。

「この不況ではね……仕事をすればするほど損をします。開店休業状態ですよ」

それをさも当然と受け取る奥村は、ある意味で偉大な男だろう。ただ擁護するなら、彼は奥村町で最大の会社を十年以上にわたって切り盛りしてきた経営者である。決して無能な男ではない。経営は先祖代々の人脈を活かした公共工事に多くを頼るが、それも人脈を活用できる才覚があつてこそ。まず、優秀の部類に入る男だった。「当代でもですか。厳しい世の中になりましたね……」

ほほえみの中に苦みを走らせ、祁答院は同情を装う。

「いや何。おかげで毎日ゴルフ三昧です」

奥村の返事はどこか一般人と感覚がズレていた。まるで、パン（仕事）がないならケーキを食べれば（遊んで暮らせば）いいじゃない、といった感じだ。

「それはうらやましい。私などは貧乏ヒマなしですから」

「はは、失礼いたしました」

祁答院のかすかな皮肉は不発だった。奥村の分厚いツラの皮はみじんも揺るがず、ビッグな態度も崩れる気配をまったく見せない。

「この人、ナチュラルに殿なんだ」

ふたたびつばやく石和でなくとも、その結論にだれしもが早晩達そうばん

するだろう。

「ヒマにまかせて始めた骨董収集も、気付いたらこの有様ですからな」

自分のコレクションに目をやった奥村は、うつとりとマイワールドに突入中。目の前で言われた悪口をまったく聞いていなかった。

「すばらしいコレクションですね」

「けど趣味が」

「いいと思います!」

祁答院はすかさず追従する。話を聞いてもらう側として、それしか道がないと判断したから。ツッコミを連発する石和のツイートは言葉を接いで押しつぶした。

「そうでしょう! 特にあの正宗は、私がさる蒐集家に無理を言って譲っていただいた品でして……」

とたんに奥村は顔を輝かせて解説を始める。ほめ言葉には耳ざとらしい。都合のいい耳だ。彼の人生はこれから幸せであろう。

「ところで! 本日おうかがいしたのは」

長くなりそうな予感をひしひしと感じた祁答院は、話の流れを強引にもどした。まるで自分を相手にしているような気がするの、きつと気のせい。

「おお、そうでしたな! 先生は伊織神社と奥村藩の歴史にご興味

「がおりとか？」

奥村はそれedyやく我に返り、少し気恥ずかしげに居住まいを正す。

「はい。できれば資料などお借りできれば、と思ひまして」

「かまいませんよ。さつそくご案内しましょう」

「ありがとうございます！」

作戦成功。祁答院の領きを合図に、三人は席を立てて部屋を出た。奥村と祁答院が並び、後ろに石和が続く形で長い廊下を進んでいく。

「しかし伊織神社は、亡くなった郷土史家の石和隆史さんいさわたかしもずいぶん熱心に研究されていました。今さら新しいものが出てくると思ひえませんが……」

その道中、奥村が口を開いた。

「石和さんですか……」

また、石和隆史。祁答院はその話題を避けたいと言外に意味を込めて返す。

「先生はご存じないのですか？」

「直接の面識は。ですがこちらの……」

「……石和修二っす。奥村さんにはオヤジが生前お世話になりました」

うながされ、これまでつとめて祁答院の影に隠れていた石和が頭を下げた。

「おお。そうか、キミが……。たしかに面影がある。大変だっただらう?」

一転、神妙な顔をする奥村。その石和を見る目は、どこまでも優しい。彼と石和隆史のつながりの深さを想像させた。

「いえ……」

複雑な表情を浮かべた石和はそれきり口ごもり、沈黙する三人はやがて目的地にたどりつく。

「こちらです」

「ほう……」

「こりゃ、すげえ……」

うながされて中に入った二人は感嘆の声を上げた。倉の一つ分もあるつかという広さの部屋に、天井まで届く高さの書棚がずらり。そこへみっちり和本が詰まっていた。

「昔は城にあった文書を、すべてこちらに移設したと父から聞いております。ここらは田舎ですからな。さいわい、太平洋戦争の空襲

で損失した物は一つもないそうです。郷土史家だった石和さんの助言で除湿器や空調も付けましたので、保存に關しても太鼓判を押せますよ」

奥村は誇らしげに言う。が、それほどの物だろう。これだけあれば、相当に重要な文書も少なからずあるはず。伊織神社の伝承のみならず、それこそ歴史の定説をくつがえすような新しい発見があるかもしれない。ここは祁答院にとって宝の山だった。

「これだけあれば……！ 奥村さん、必ずいい研究成果をご報告できるでしょう。ご協力に感謝します」

奥村の手を取って頭を下げる祁答院のかたわらで、またしても石和は顔をくもらせる。祁答院は振り向いた。

「石和君。強くは言わないが、今は素直に感謝するでしょう」

「……そつすね」

「よし、さっそく作業に取りかかるぞ。早くしないと日が暮れてしまふ」

多少なりとも気を取り直した石和と連れだつて奥に向かおうとする後ろで、奥村の携帯が鳴った。それに虫の知らせのような不穏を感じた祁答院は思わず足を止める。

「もしもし、私だ。どうした？ ……うん、……うん、で、私にも話を聞きたいと？ 分かった。聞きたいならこっちへ来いとその礼儀知らずに伝えておけ」

電話を終えた奥村の態度は、これまでの和やかなものから一変していた。

「どうかされましたか？　もし急用であれば、我々はこれで失礼いたしますが？」

何かあった。そうにらんだ祁答院は奥村に向き直る。

「……石和さんのご子息がいるならお話してもいいでしょう。今朝、うちの社員の仁科が、伊織神社で……」

「っ！　……そうでしたか」

「知っておられましたか……」

「はい。こちらへお邪魔する前に伊織神社へ立ち寄りしたので」

「それならお話が早い。これからすぐ刑事がうちを訊ねてくるそうなので、残念ですが私はこれで失礼せざるをえなくなりました。先生はお気になさらずとも結構ですよ。研究の成果、楽しみにしておりますので」

「ありがとうございます……」

笑顔を形作り、踵^{きびす}を返す奥村を祁答院は見送る。その目つきは、胸に引っ掛かる異物感のせいで自然と鋭いものに変わっていた――

？章 事件「情報収集およびその成果について」？（後書き）

文脈につじつまが……表現技法もひどい……

しかし、あまりお待たせするのも申し訳ないので、これでとりあえずアップです。今後予告なく改定する可能性は大いにあり。てか、必ずやります！

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

* * *

一方、古砥部ことへと有川ありかわの留守番組はといえば。

「にしきと散歩だー！」

「で、また神社に来ちゃったワケだけど。……先生いなくて大丈夫なのかな？」

用事もなく、こんな田舎いなかでは遊べる場所もなく、トドメに近所の地理も分からず、ふたたび伊織いおり神社を訪れていた。

「なんでだ？」

立ち止まった有川がつぶやきに、古砥部はダッシュを中止。小首をめいっぱい傾かしげながらもどってくる。

「だつて龍神……つまり、伊織さんが復活したんでしょ？ ふらふら境内に入っちゃったりしたら、怒ったりしない？」

「たぶん大丈夫だ。龍神は怒ってるんじゃない、悲しい、さびしいって思ってるだけだから」

「古砥部は、そんなことも分かるんだ？」

屈託くつたくのない瞳で自分を見上げる古砥部に、有川の頬ほおは思わずゆる

む。反射的になでなで。

「分かるんだ！ それにアキラはへたれだから、ケンカの役に立たないぞ」

古砥部は腰に手を当ててえっへん。ちっこいのでそうはまったく見えないが、本人的には大いばりだ。

「あゝ、やっぱり弱いんだ、先生。実は意外と強かった、みたいなオチがあってもおもしろいんだけどね」

「ぜんぜんダメだ。アキラもキョージユなら強くなきゃダメだぞって言ってるのに」

「え、なんで？」

古砥部の空間トーク発動。有川もさすがに意味が分からず聞き返す。

「だってキョージユが探検に出かけると、岩が転がってきたり、天井が落ちてきたりするんだろ？ 悪いヤツにも追われて、すごく危険だ」

それはどこにあるアナザーワールドの話であろうか。眉間みけんに人差し指をあてて考えた有川は、しばらくして心当たりが気付く。

「……ねえ古砥部。その教授ってさ、ひょっとして帽子がぶつてムチ使う人？」

「そうだ！ ムチをバシーって打って、変テコな帽子は手放さない、

なんとかジョーンズって人だ！」

大マジメな顔で動作を再現する古砥部に、有川は「やっぱり」とこめかみを押さえる。

その一方で、むーむーうなりながらテレビにかじりついている古砥部の姿を思い描いて笑ってしまった。さぞ握った手に汗をかきながら観ていたのだろう。危機を脱した際には大騒ぎしていたにちがいない。

とはいえ、放っておけば祁答院^{けどういん}が古砥部式の特訓を課せられる可能性がある。祁答院が死んでしまうこと受け合いだ。さすがにかわいそうなので、有川はまちがいを正すべく、しかしなるべく夢を壊さないよう言葉を選んで諭^{さと}していく。

「あのさ。その教授は、かなり特殊な人だと思うなあ……」

「む、そうなのか？ でも、アキラだってヘンなヤツだ」

「特殊と変の境界線って、どこだろう……」

解ければ哲学の真理を究められそうな、とても難しい問題だ。

「む！」

「え、ちょっと古砥部！」

悩み始めた有川を尻目に、古砥部は何かに気付いたらしい。制止も聞かずに境内へ突入してしまった。

「ま、古砥部なら大丈夫か…… なんとって神様なんだし」

取り残された有川は、ため息をつきつつ神社を見る。鳥居の前には立入禁止を示すカラーコーンとトラバーが置かれており、奥手にある林の中にはブルーシートで囲われたままの一角があった。

が、それ以外は涼やかなたたずまいに変化はない。

「うん…… まだ立入禁止だよね。でも、警察はもういないんだ……」

つぶやいた有川は、誘われるようにトラバーを乗り越えて境内に入った。

……誘われるように、と言わざるをえないだろう。

？魔？に魅^み入られたように、と言い換えてもいい。もし彼女がいつもの冷静さを保てていたなら、いくつもの異常に気付けたはずだ。先^{せん}だって祁答院が気付いたセミの鳴き声はもちろん、殺人事件発生から半日も経たない場所に現場保全用の警官が残っていない異常にも。

——古^{いにしへ}来、日本人の間で信じられていた概念^{概念}に？境界^{きょうがい}？という考え方がある。

境界とは、人間が普通に暮らす世界と妖怪などが棲^{すま}む？異界？を繋ぐ地点であり、現実と非現実が交^{まじ}わるところ。すなわち様々な怪現象が起こりえるとされる場所だ。

境界は、我々が生活する場所にもいたるところに存在する。
たとえば、わたると向こうに行ける橋、上り下りすれば違う地点

に出る坂や峠、家の内と外をへだてる門、居住空間と非居住空間を分ける天井などがそう。これら境界を出現場所とする妖怪が多いのも、理屈にかなうのだ。

さらに言えば、境界は怪奇にであう危険な場所として、それに遭わぬようルールが言い伝えられる一方、超常の力を利用する種々（しゅしゅ）の儀式を行うには最適の場所とされた。そのような場所に神社仏閣が多いのも、また必然なのだ。

ゆえに、鳥居をくぐることに。それは、

「っ！」

境界へ踏み込む、ということ。羽虫が飛ぶような音を聞いた有川は、突如として赤い光に包まれた境内に立ち尽くす。

夕焼けのような赤い闇。しかし空をあおげば青空がひろがる結界は、ここが周囲から隔絶された異界であるかと思えず。およそ人が存在していい空間とは思えない。

元来、人の想いは時の流れと共に消え去るもの。それを乗り越え、しかも三百年ものあいだ増幅され続けた想いは、重く、引きずるような悲しみ。思わずもらい泣きしてしまいそうになる悲痛な感情が、まさに物理的な重しとなって有川の肩にのしかかる。

声は聞こえない。が、もしマンドラゴラという植物がこの世に実在したとしたら、こんな叫び声を上げるのではないか。まるで、想いだけで人を殺せそうな。有川はそう思い、息を呑んだ。

「にしきにしき！」

「古砥部……」

脱兎だつとのごとく自分のもとへ駆けもどる古砥部を見て、有川はかろうじて声を出せた。

「大丈夫。にしきは古砥部の後ろにいるんだ」

まともに考えれば、逃げるべきだろう。見た目とはケタ違いな古砥部の膂力りょりきょくなら、仮に有川が動けない状態であっても抱えて行くことができる。二人がそれをあえてしなかったのは、

？章 事件「情報収集およびその成果について」？（後書き）

女性キャラって、書くのが難しい……

私の作品に登場する人物の男女比が男性に傾いているのはそのせいだったり。

中でも、有川はいちばん性格づけに苦労したキャラ。

普通の女の子を目指したら、来島的にこうなりました（笑）。

次回、彼女の性格が炸裂します！ お楽しみに！

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

二人がそれをあえてしなかったのは、

「小兵太様……」

ついに姿を見せた彼女に会えるかもしれないという、好奇心に他ならなかった。

「あれが龍神だ」

目をつり上げてささやく古砥部は、四肢を目一杯に下げる。獵犬が獲物へ飛びかからんとする様を彷彿させる姿勢は、彼女が第一種戦闘態勢に入った証だ。

「あの子が？ 人間にしか見えないけど……」

声をひそめる有川にも、言葉とは裏腹にそれが分かった。このプレッシャーは、まちがいなく胸に脇差を抱いて立つ巫女装束の少女から発せられていると。だから、

「見た目にだまされちゃダメだ」

「でも……」

否定は彼女がそんな恐ろしいモノだと信じたくない、有川の気持ちだった。

「だれ、ですか……？」

そこでようやく二人に気付いたらしい伊織は、ゆっくりとふりむく。

「っ！」

「えと……」

他に人間がない境内で、隠れてもいない。気付かれて当たり前なのだが、しかし緊張で頭が回らない二人は体をこわばらせた。

場に吞まれた二人がふたたび動きを止める中、それをまったく意に介さない伊織はしずしずと近付いてくる。

「もし……小兵太様を……石和小兵太様を、ご存じありませんか？」

「え？」

あまりにも予想外な伊織の質問に、いや、今の有川の状態を考えれば何を言われても同じ反応しかできないだろうが、彼女は思わず聞き返してしまった。もちろん質問の意味は分かるのだが、頭が付いていかない。

「目が覚めたばかりだから、たぶん記憶がごっちゃになってるんだ」

どう返答したものと必死に逡巡する有川に、古砥部は小声で教えてくれる。

その指摘は冷静だったが、このさい有川にとって内容はどうでもよかった。

「えと……」

重要なのは、古砥部の声で有川の頭が正常な判断を取りもどしたこと。とにかくこの場を切り抜けねばと口を開きかけた矢先、

「あら……。かわいい犬ですね。あなたの犬ですか？」

古砥部を見た伊織の様子が変化した。はりつめた気配と、それに対極するゆっくりした口調やぼんやりした雰囲気と同じだが、ほのかな笑みをたたえた顔を古砥部の鼻先へ近付けていく。

「犬じゃない！ 犬神だ！」

それに古砥部が反射でいつもの癪癢かんしゃくを見せると、有川の心には余裕すら出てきた。

「犬神様ですか？ はじめて見ました。たいそう恐ろしいものだと聞いておりましたが、こんなにかわいいのですね。これなら、ちつとも怖くない」

「む……」

すでに伊織の手は古砥部の頭に伸びている。意表をつくなどでなで攻撃に、古砥部は難しい顔をした。

「犬神様。お名前は、なんとお呼び申し上げれば、よろしいのでしょうか？」

「むむっ……」

そんな古砥部を見てますますにつこり＆なでなでする伊織に、ますます顔を難しくする古砥部は、ごろごろしたい衝動と必死に戦っている。勝負は決したっぽい。

「ふふっ、ほら、自己紹介してあげたら？」

もうダメだ。有川はこらえきれない笑いを吹き出すように仲裁へ入った。

「……古砥部だ」

気持ちを見透かされた恥ずかしさと自尊心、今なお続くごろごろ衝動に、古砥部は複雑な表情をして不機嫌そうに言う。

「古砥部様……。私は伊織と申します」

手を止め、丁寧に頭を下げる伊織の顔には、悲しみを押し殺すやさしい笑みが浮かんでいた。

「にしき、こいついいヤツだ。伊織、よろしくな！」

裏にある感情も読み取ったのだろう。古砥部は一転、にぱっと笑う。

「こちらこそ。犬神様となかよくなっただなんて言ったら、父上は腰を抜かしておどろくでしょうね」

「古砥部は偉いから、そうだろうな」

次いで、鼻息もあらく大いばり。伊織は顔をほころばさせ、有川も苦笑混じりに目をほそめる。

が、有川が笑っていられるのはここまでだった。

「はい、本当に。……あの。古砥部様、おうかがいしたいことがございます。石和小兵太という侍を、ご存じないでしょうか？」

伊織の顔色は、言葉を紡ぎだすほどに元の色へもどっていく。

「む、小兵太むぐ」

「ちよつと、失礼しまゝす」

それに気付かず、会話を続けようとした古砥部の口を有川はあわててふさぐ。そのまま満面の営業スマイルでごまかしながら引きずっていった。

「なにすんだにしきー！」

やや距離を置いた場所で有川が手を離れた瞬間、古砥部は怒りの声を上げる。が、ここは引けない。有川は端的に自分の結論を言いたとした。

「古砥部。いま伊織さんにホントのコト教えたら、何するか分からないでしょ」

これは直感。だが論拠もある。伝承にうたわれる暴れっぴりと、

最初に見せつけられた問答無用のプレッシャーだ。あばれ出されたらヤバいと有川に思わせるには充分過ぎた。

それによく観察すれば、まだ理由をつけ足せる。こちらをうかがう伊織の目はいまだ夢でも見ているかのようにはんやりとしているが、どこか危険な光を放っている。ささいなきっかけでたやすく自制心を失いそうな目だ。全体の雰囲気も、ゆったりした中にかすかな、しかし強烈かつ正真正銘な？本物？の気配をただよわせていた。

さらに、

その事実^{きょうがく}に気付いて驚愕する有川は、凍り付いた背筋に大量の汗が伝っていくのを感じた。

伊織の横に伸びる影が、人の形を取っていない。小ぶりでこそあるが、ヒゲや角まではつきり確認できる雲龍がゆらゆらと揺れている。もとが人智を越えたモノである以上、物理法則など期待できないだろう。大きさは自在に調節できるはずだ。とすれば、変身すれば空を覆うようなサイズまでふくれ上がったても不思議はない――

「む……そうだな」

古砥部も理解し、おとなしく賛同する。彼女も本来の姿は犬であり、変化して人型をとっているに過ぎないのだ。イヌ耳やシツポが消えないのは術がハンパな証拠なのだが、それはいま論じるべき問題ではない。あと、冬毛と夏毛の中間期に抜け毛がひどいのも問題ではない。祁答院^{けとういん}いわく『コロコロは必需品』だとか。これも問題ではない。

「ここは私がうまくごまかすから、古砥部はちょっとおとなしくして。あとでおいしいもの、おごったげるから、ね？」

「むー。……分かった。その代わり、約束だぞ。サーロインだからな！」

「任せなさいって」

古砥部の説得に成功した有川は、「請求書は先生に付けるから」と黒くつぶやきながら伊織の許へもどっていく。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

有川は伊織いおりの許へもどる。

「お待たせしましたー」

営業スマイルを再発動させながら。

「はい……？ あ……？」

「私は古砥部の友達で、有川にしきって言います。よろしくね、伊織さん」

「にしきさん……あの……」

「石和いさわ小兵こへいた太さんのことですね？ 申し訳ないんですけど、私達はよく知らないんです」

「そう、ですか……」

伊織は沈痛な面持ちで顔を伏せる。

そのまま、徐々にすすり泣き始めた。

「でも！ いま私の先生が小兵太さんの行方について探しています。ひょっとしたら見つかるかもしれません！」

あまりにも痛々しい消沈ぶり。目にあまらせた有川はとっさに励

まそつとして、思わず口を滑らせた。

「それは……！ 本当のことにございますか……！？」

「はい。なので、伊織さんは……」

内心でやってしまったと後悔もしているが、言えばどうなるか分かったものではない以上、今さら「嘘です」とも言えない。

「よろしく、お願いいたします！」

だから、自分の右手をすがりつくように握りしめる伊織に、

「……伝えておきます。ところで伊織さん、私もその手がかりを知りたいんです。小兵太さんのこと、教えて下さい」

即答はできなかった。しかし情報さえあれば、それは可能となるかもしれない。有川は感情と別の部分で思考回路を回して質問する。

「はい！ 小兵太様は……、小兵太様、は……」

頷いた伊織は、たぶんしゃべろうとしたのだろう。ただ、どれほどのことが思い出せたのかは想像にたくない。愕然とし、壊れた機械のようにたった一つの名前をつぶやく彼女は、つぶやくことに焦点の定まらない目を見開いていく。それが真円になったとき、龍神の影がふくらみながら鎌首をもたげはじめ――

「伊織さん！」

「っ、はい」

有川によるネコだましの大声に、元のぼんやりした空気を取りもとした。

「私は、伊織さんが高熱で寝込んでいたと聞いています。思い出せないのはそのせいでしょう！」

安堵あんどの息をつくヒマも、全身からふたたび吹き出す冷や汗あせを拭ぬぐっているヒマもない。怪訝けげんな表情を浮かべる伊織に考えるスキを与えないよう、有川はマシンガンのように口を動かす。

「そうです！ また明日、私はここに来ますから！ 伊織さんは今晩ゆっくり休んで、ゆっくり思い出して、その時に教えて下さい！」

「え……？ はい……」

話について来られず、とりあえず頷いた伊織の両肩を有川はつかみ、強引にまわれ右。引きつっていると自分でも分かる顔をなんとか笑顔に保ちながら、

「お帰りはあちらですよー。ささ」

丁寧かつ迅速に送り出した。

「はあ……。では、失礼いたします……」

伊織はためらいの表情を見せるが、ド笑顔でぶんぶん手を振る有川に押し切られる形で立ち去っていく。ここで有川は大きくため息をついた。が、名残惜しげにふりむく気配を見せた伊織に気付き、瞬時に元の動作へもどる。「がんばれ、がんばるんだ私！ スマイ

ルスマイル！」と自分に言い聞かせながら。

けっきょく、有川は伊織の姿が完全に見えなくなるまで、子供むけ番組の司会を担当するお姉さんのようにド笑顔で手をふり続けた。当てレコするなら、セリフは「また来週も見てねー」で決まり。もちろん競演した子供（古砥部^{ことへ}）にも手をふれと、カメラ（伊織）から見えないようどつくのも忘れずにやった。

「ふうー、あぶなかったあ」

収録の終了を確認した有川は、がつくりと肩を落として脱力する。

「にしき、見事だ。伊織があのまま爆発してたら、古砥部が全力で戦うしかなかったぞ。それも、たぶん勝てない」

「やつぱり。そんな気がしたんだよねえ。でもこれはセンセに話したら、ビックリされるだろうなあ」

古砥部の指摘に、有川は自己判断の正しさを再認識した。いま彼女は、奥村町の平和を守ったのだ。演技力と押しの強さで。

「つつかれたー。先生にこのこと連絡しなきゃいけないし、ノドもかわいたし、帰ろ。って、どしたの古砥部？」

見れば、古砥部はいつものごとく唐突に何かへ興味を持ったらしい。転々と場所を変えながらふんふん鼻を動かしたりむーむー言ったりしている。やがて納得がいったのか、有川の許へもどってきた。

「にしき、伊織が作ったこの結界はすごいぞ。この境内の中なら、修二^{しゅうじ}みたいなヤツでも古砥部が見えるはずだ」

「ホントに？　じゃあ、いま修二をここに連れてくれば」

周囲を見まわす有川は、むりやり明るい声を出す。そうしなければ、伊織の感情をそのまま流したかのような結界に心を押しつぶされそうな気がしたから。

有川の感覚は、おそらく正解だろう。結界の性質はともかくとして、周囲を包む赤い闇は伊織の力の源泉たる悲嘆と、意志の強さ、なによりも、その裏側に潜む暗い激情の色に他ならない。

「でも、それはsonだけ伊織の力がすごいってことだ。あんまりウロウロしない方がいいぞ。今も伊織は古砥部達を見てるから」

それがどれほど強烈なのかは古砥部のつたない説明でも充分に理解でき、

「う……古砥部、やっぱりウロウロしちゃダメなんじゃーん」

有川は魂の叫びを上げた。

「む、そうだったか？　でも安心しろ。この結界の張り方、古砥部は憶えた。作るのにちよつと時間がかかるけど、そのうちアキラの研究室に張ってみる」

だました古砥部の答えは完璧に無自覚。どのへんに安心材料があるのかもまったく謎だった。

「ホント！？　じゃあ先生にも連絡しなきゃいけないし、そろそろ戻ろっか？」

ただ、ここは気分を盛り上げていきたいところ。意識的にハイテンションを保つ有川に、

「アキラは本読みはじめると長いから、まだだと思っぞ。にしきはその前に、サーロイン！」

古砥部はとても気分が盛り下がる約束の履行を迫る。

「え……。お金、足りるかなあ……」

「気合いでなんとかするんだ！」

「それはムリ……」

古砥部と手をつないで伊織神社を後にする有川は、肩を落として「センセ、古砥部にお金の概念をちゃんと説明しといて下さいよ……」と呪詛^{じゆそ}の一言をつぶやいた――

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

* * *

あれから日没まぎわに奥村邸を辞去した祁答院は、石和と二人がかりで山盛りの古文書を石和家に持ち帰っていた。

「ふむ……」

居間を占拠し、ちゃぶ台に和綴じの本を所せましとつみ上げた祁答院は、手にした文書をのページをまた一枚めくる。

「センサー、茶アー、淹れてきましたー」

そこへお盆に急須と湯飲みを乗せた石和が台所からもどってきた。

今晩はざんねんながら蘭生の手料理はなし。夫を失い、子供もなく独り身となった叔母の家へ泊まりこみに行っている。本人は謝っていたが、祁答院としては心労のネタがへって胸をなでおろしている部分がなくもない。ただ、夕飯はわびしく男二人のコンビ二弁当だった。

「悪いな。そこへ置いといてくれ」

「ういっす」

石和はいかにもぞんざいな手つきで茶を淹れ、一つを祁答院の前に置く。祁答院が本に目を落としたまま手探りで湯飲みを手にする。と、石和も一口すすりながらドカリと座布団に腰を下ろした。

「さて、と」

聞く者の脱力感をさそうかけ声を上げ、石和も作業に没頭ぼつとうしていく。

昨晚のうちに読破した石和家の蔵書ぞうしょ分もふくめ、研究は確実に進んでいた。

まず分かったのは、小兵太こへいたの父についての詳細。

名前は右馬之介うまのすけで、やはり当初の仮説にまちがいはなく、奥村藩国詰め（地元勤務の意味。藩が所有する江戸屋敷で働く者は、江戸詰めと呼ばれる）の城方しろかた（内勤。外回りの者は郷方さとかた）役人だった。

役職は勘定所かんじょうしょの検計方けんけいがた。現代風に言えば、会計課の検算係くらいに相当するだろうか。同様に小兵太は蔵所御蔵方くらしょおくらかたの役人で、これはそのまま倉庫の管理係。いずれも下っぱだ。

なお、石和家の家禄は三十石。奥村藩が二万石の小大名である点を差し引いても、これは相当に貧乏と言える。

当時の侍たちの給料は米の現物支給で、それを換金して生活費にあてていたため、どのくらいの給与水準かと聞かれればその時の米相場にもかなり左右される。が、強引に推しはかれば年収七百万程度だろう。

かなり裕福なように感じるが、これは石和家全体に対しての給与。親兄弟が何人働いていてもすえおきで、働き手が二、三人でいどに對しての給料と考えれば、かなり安い。事実、収入が百石未満の家では内職に励むのが普通だった。よく時代劇で見かける浪人の傘は

り、虫かご作りなどがそれで、中には複数の家で協力しあって農地を借り、みずから田畑を耕していた家もあったという。

さらに判明したのは、二人を殺した下手人である五郎左の素性について。

本名は須貝五郎左。禄は百石。役職は奥村藩剣術指南役で、これは言うまでもなく藩おかかえの剣術師範だ。

また、須貝家は代々奥村藩に仕えていた家ではなく、五郎左がどうやら事件の数年前にやとわれたらしいことも分かった。

当時の侍たちの就職は先述した通りに厳しいもので、浪人が就職しようと思つたなら、どこかへすでに勤めている家の婿養子に入るくらいしか手がない。この唯一とも言える例外が、剣術指南としてやとわれることだった。

江戸幕府は武士の軟弱化を防ぐため、たびたび武術奨励の命令を出している。これを受け、各藩ともきわめて少数ながら剣豪たちを探し求めていたのだ。もちろんなり手は無数にあり、中には歴史に名をのこすような剣豪でも仕官できなかった例がある。それを突破した五郎左の腕と運は、推して知るべしだろう。小兵太の挑戦は、それを読み知った祁答院や石和の目から見ても無謀と映った。

また、伝説と直接の関係があるかは不明だが、おもしろい点もいくつか判明している。

一つは石和家の家禄が伊織神社の管理を任されて以降、百石になっている点。

石和の家には小兵太の他に男子がなく、小兵太も当然ながら未婚なので子供はいなかった。ゆえにここで家系は途絶えているのだが、親類から養子を立てて跡目を継がせることで再興をはたしている。石和蘭生、修二の姉弟はこちらの子孫となるわけだ。

もう一点は、小兵太が旅に出たさいに腰へ差していた刀について。

重代の家宝、相州五郎正宗の大小とあった。入手の経緯については不明で、推測としては先祖が戦場でひろった以外に考えられないのだが、にわかには信じがたい事実である。

鎌倉時代の伝説の刀工である正宗の刀は、日本刀の代名詞とまで言われる銘刀。当時ですら大名クラスの逸品だ。三十石取りの下級武士の家においそれと転がっている品ではない。

ある大名が正宗の短刀を購入したさい、七百二十両もの大金を支払ったとの記録もある。仮に一両を五万円として換算すれば、三千六百万円。これは行きすぎにしても、小兵太では逆立ちしても手が出ない高級品だろう。その剣をあえて持ち出した小兵太の、決意のほどがうかがえる。あとに続く者が存在しない以上、彼の仇討ちはまさに石和家のすべてを背負った総力戦だったのだ。その無念ははかりしれない。

「ん？」

二人して無言で資料を読み進める中、不意に石和が声を上げた。

「どうした？」

「いえ……たいしたことじゃないっす」

「見せてみる」

ちゃぶ台に越しに顔を近付ける祁答院に、石和も腕を伸ばして本を示す。第七代藩主——奥村主計頭信雄おくむらかずえのかみのぶかつと記されたすぐ下。

「ここ。城代家老、鹿神将監じょうだいがろう かがみしょうげん。めずらしい名字だし、あそこも昔っからここにある家だから、まちがいないっすね。鹿神さんちって、城代家老の家系だったんだ」

「ふむ……。おもしろいが、まあ関係ないだろ」

「ま、そうですね。……さて」

「石和君。次はこれを頼みたい」

手にしていた奥村藩士名簿を読み終えたらしい石和に、祁答院は山積みされた本の一角を指した。

「うげ。奥村さんち、そんな物まで保管してたんすか？」

石和はそれを見て露骨ろこつに顔をしかめる。

「ああ、あった。で、該当する年代の本はすべて借りてきた」

「それ、読むのは楽そうだけど、計算はそうとう時間かかりますよ？」

「かまわない。ひよっとしたら、数字が合わないかもしれない」

「へ？ 合わないんですか？」

「そうだ。それも大幅に」

「どういふことです？」

「ああ、これは右馬之介闇討ちの真相に関する私の仮説なんだが…
…」

「ただいまだー！」

祁答院の小声は、途中で元気よく帰宅した古砥部こてへの大声に阻まれた。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？（後書き）

今回は祁答院と石和、二人による資料調査の報告ですね。

それにしても、説明長っ！

そして筆者のマニアぶりを見事に浮かび上がらせております。

まごうかたなき歴史ヲタ（爆）。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

「ただいまだー！」

祁答院けどういんの小声は途中で元気よく帰宅した古砥部こていぶの大声に阻まれた。

「ただいまー」

続いて有川ありかわ。祁答院は話を中断して二人を迎える。

「ああ、お帰り」

「ずいぶん遅かったな。どこ行ってたんだ？」

言葉を継ぐ石和のかたわらで、古砥部はびこびこシッポをふりながら祁答院に突進してくる。このへんはやっぱり犬と同じで、しばらく離れているとさびしくてしょうがないらしい。

「夕飯食べに、古砥部となり街まで。あと先生。これよろしくお願いします」

有川は遊べなでると古砥部にじゃれつかれる祁答院に一枚の紙切れをわたす。

「……なんだこれは？」

「領収書です」

「それは見れば分かる。お食事代一万二千円、というのは？」

「古砥部の接待費です」

「サーロイン、うまかったぞー」

ほくほく顔な古砥部が吐く息には、ほのかなガーリック臭がただよっている。かなり上等な肉を食べてきたようだ。

「……有川さん。私にも事情が分かるよう、説明してもらえると助かるんだが？」

おもに懐具^{ふくぐ}合の事情により、こんな領収書は通せない。断固^{だんこ}戦うべく祁答院は詰問^{きつもん}の目を向ける。

「えーとですね。まずセンセと修二が奥村^{おくむら}さんちに行った後、私と古砥部で伊織神社まで散歩に行っただです。そしたら、伊織さんがいました」

が、有川の答えはそんな金銭闘争を吹き飛ばすものだった。

「何!？」

「ホントかよ？」

祁答院、それへかぶせるように石和のおどろきと疑惑の入り交じった声上がる。

「で、お話ししてきました」

「話ができたのか？」

「はい。パツと見、普通の女の子でしたから。で……」

有川は順を追って神社での出来事を話していく。

「……よく、生きて帰って来られたな」

説明を聞き終えた後、訪れた重苦しい沈黙を裂いて出た祁答院の言葉は、有川が遭遇した状況の結果を表すに充分なものだった。

そして、続く有川のセリフに祁答院の狼狽は最高潮に達する。

「そうかもしれませんが。で、そのとき思わず先生が小兵太さんを探してるって言っちゃいました」

「な………！」

絶句。祁答院の手から本がぼとりと落ち、さすがに黙っていられないと判断したのか石和が口を挟んだ。

「にしきー、いくらなんでもそりゃムリだろ。どこで死んだかも分かってないのに」

彼のおちつきは、超常現象を頭から信じていない現実感ゆえ。その冷えた頭脳から繰り出される舌鋒するどい批難の言葉で、有川を責め立てていく。

「だって……」

「どうすんだよ？ マジにその伊織がいたとして、だまされたってあとで思ったら、やっぱり暴れんじやないのか？」

「う、それは……」

反論の余地もない正論。返す言葉が出ない有川に、石和は視線のみでさらに彼女を追いつめていく。

「よせ、石和君。終わったことを責めてもしかたない」

そこへ祁答院は仲裁ちんさいすべく間に入った。

「……そうですね」

もともと、そこまできつく有川に当たるつもりはなかったのだろう。石和ははっと祁答院に顔を向け、それを隠すように仏頂面ぶつちやうめんで押し黙る。

「うん。それより前向きにとらえるべきだな。記憶があやふやでも、当時を知る存在だ。うまく話せば、有力な情報を引き出せるかもしれない」

「あ、その点はバッチリです。明日また聞きに行くから、一晩ゆっくり思い出してほしいって言っとききました」

助け船に顔色を取りもどした有川が、場を取りつくろうように明るい声を出した。

「さすが有川さん、抜け目がないな」

「……それ、微妙にほめてませんよ？」

「良い意味で受けとってくれ」

まだ空^{から}元気が、有川はいつもの調子にもどったようだ。それを見て取った祁答院は軽い笑みを浮かべ、もう一つの懸^{けん}案^{あん}事項に話題を移す。

「で、話を元にもどすが、この領収書は？」

「口止め料です。古砥部がホントのコト、ペロツとしゃべっちゃいそうだったんで」

「古砥部が伊織とお喋りしなかった、お駄賃^{だちん}だ」

当然と言わんばかりに主張する古砥部に、祁答院にもなんとなく想像が付いた。というか、その情景が目に見えるようだった。

「……いい判断だったと言っておこう。しかし有川さん」

「責任者は先生です」

「なあ、石和君」

「知りませんよ。飼い主の責任です」

こういう話題だと、やはり祁答院に味方はいない。顔にいつもの黒い笑みを取りもどした有川は、瞬時のアイコンタクトで石和との連合（仲なおり）も果たしたようだ。

「飼い主言つな！」

一方で、発言を聞きとがめた古砥部が怒って石和をバシバシたたいていた。が、見えない彼には影響がない。平然としている。

「く、分かった……」

包囲網に屈した祁答院が、是非におよばずと財布を取り出した瞬間、

「むうー、シュウジー！」

通常攻撃はダメージにならないと悟った古砥部が、石和の後頭部をお盆でぶん殴った。

「痛！ 何すんだにしき！」

効果あり。かなり痛かったらしい。ちよっぴり目に涙をためた石和が、彼にとつての真犯人である有川をにらむ。

「え、私じゃないよ？ 古砥部が」

「ウソつけ。俺はこの目ではつきり見たぞ。先生も見たでしょうが！？」

「いや、古砥部だ。アイツは犬あつかいされると怒る。石和君の飼い主発言が気に入らなかったんだろう」

「そつだ！ あやまれ！」

古砥部の絶叫を最後に、居間には沈黙が訪れた。

？章 事件「情報収集およびその成果について」？

「そつだ！ あやまれ！」

古砥部ことうべの絶叫を最後に、居間には沈黙が訪れた。

後頭部をさする石和に、グーにした両拳をボクサーみたいに胸の前で掲げてにらみ上げる古砥部。有川も振っていた手を静止させている。

祁答院けとういんは一つ咳払いせきをし、状況を打開すべく口を開いた。

「……古砥部は石和君いさわに謝れと言っている」

「……分かりましたよ。古砥部、悪かった」

不本意だ、と顔で言う石和は思い切り古砥部に背を向けて頭を下げる。

「そつちじゃない！」

と古砥部が両手を突き上げて存在を主張しているが。

「これでいいんでしょう？」

ふり向き、石和は祁答院に確認を取る。

なんと答えたものか。半笑いで応じる祁答院に、

「センセ、これは回収しない方が楽しいと思います」

有川ありかわからは毒しかないアドバイス。

「二人とも、なんすかその態度は？」

対し、自分がバカにされていると悟った（だれにでも分かる）石和は、怒りを閉じ込めた冷たい目で二人を見回した。

「ちゃんとあやまれ！」

その間も古砥部は地団駄じだんだを踏んでいる。いまや石和家の居間にただようゆるい空気は最高潮に達していた。

「しかたないな。有川さん、頼む」

このままでは研究が前に進まない。祁答院は休み時間終了のチャイムを鳴らすよう学級委員にお願いした。

「分かりました。ほら古砥部、こっちおいで」

ほほえむ有川の手招き。親鳥の呼びかけに、古砥部はトテトテと彼女の腕の中に収まる。

「はい修二。いま私の前にいるから、もう一回」

「……悪かったよ」

「うむ！」

古砥部が満足顔に頷き、一件は落着した。

「よし、作業を再開するぞ。有川さんはこれを頼む」

祁答院は出席簿で教卓を叩くように手を打ち、授業へもどろろとする。

付き合ってられねえ。石和がつぶやきながら座布団に着席する中、

「あの、センス」

あたえられた課題を開いた有川から、おずおずと手が挙がった。

「どうした？」

「これ、読めません」

「やぶけているところは拾い読みしてくれてかまわないぞ」

「そうじゃなくて。こんなミミズがのたくってるようなの、読めな
いってコトです」

祁答院は有川の手にある本をのぞきこむ。

そこには、格調高い手蹟で筆記された草書体の文章があった。年代は比較的新しいのだが、それでもダメな人間にこれはさっぱりだろつ。

「……そうだったな。じゃあ石和君の計算を手伝ってくれ」

「分かりました。ってなに修二、その本の山は？」

本を置いた有川は、石和を見るなりゲッソリした声を出す。

「これか？　これはお蔵米吟味帳くらまいぎんみ、これは勝手方御用金帳かてがたごようきん、これはお納戸方ご入用金帳なんどがた　いりようきん、これは物産取引分調べ帳ぶっさんとりひきぶんしら、で、こつちがお物成諸払い積もり帳なりしよばら　なつちがおものだな」

「……暗号？」

「日本語だよ。いいから手伝え」

「この、オタクどもめ……」

有川の発言は、もちろん祁答院も含む。ただ本が読めない以上、彼女に手伝える作業はこれしかない。無精無精ぶしよつ　ぶしよつといった手つきで有川が携帯を取り出して電卓モードにしたとき、祁答院の胸元でも携帯が着信を告げた。

開いて画面を確認する。どうやら内緒で呼びよせた？狂犬？は到着したようだ。祁答院は全員にことわって席を外した。

廊下を抜け、玄関から広い庭先へ。屋内の明かりをたよりに門の外へ出る。

そこにいるはずの彼の姿はなかった。

祁答院はムダなことをせずに待つ。気配の遮断しゃだんを得意とし、暗闇を味方につける彼を一般人が捜そうなど、徒勞とらうでしかない。

実際、

「お待たせしちゃったみたいですね」

真正面に立つ八島義影に、やしまよしかげ 祁答院は声をかけられるまで気付かなかった。

月夜に浮かぶその姿は、どういう原理かなかばが闇に沈んでいる。とらえ続けなければ見失いそうになる希薄きはくな存在感。そして裏腹な闘気は、静かにして見る者の嫌悪感を呼び起こさせた。

なれていても体をおそう恐怖は、伊織神社で感じた無味無臭の恐怖と同じでありながら別種のもの。たとえるなら、龍神の怖さは願うあまりに壊れそうな自分を押しとどめる情緒不安定けつじふあんていがもたらすものであり、彼の怖さは、すでに壊れているのに願いを追い求めるもの。

分かりやすく言えば、目的のために人を殺しかねない者と、目的の前提ぜんていとして人を殺す者の差だ。冷静で行動にためらいがない分、義影が上とさえ言えた。

「……心臓に悪いから、気味の悪い登場の仕方はカンベンしてくれ」

祁答院は凍り付いた口を強引に動かした。目の前の彼は、なんど会っても人間とは思えない。いったいどんな過去が、高校生の彼にこんな迫力をもたらすのであろうか。

「めだたないように来てくれってメールしたの、先生じゃないですか……」

義影は心外、といった顔を作る。あくまでも作っているだけだ。彼が何を考えているか、うかがい知ることができない。

「そうなんだが……」

祁答院はこまかい事情と、追加となる状況変化について説明する。そして、覚悟をもって告げた。

「今回、私は龍神の説得をころみたい。あらゆる情報を整理すれば、その余地は充分にあると思う。あわせて八島君に依頼するのは、監視だ。それと、龍神があばれ出したさいの食い止め。これは……」

「先生が失敗した場合、ですね」

イコール、祁答院もただでは済むまい。義影の顔が嗤い^{わら}のカタチに歪^{ゆが}んだ。

「そうだ。報酬^{ほうしゅう}に関しては、いつも通りで頼みたい」

「日当一万円で経費は別。セカンドミッション発生時は、先生の生命保険で報酬の支払いですね。了解しました」

「あとは……」

「万一のさい、古砥部の引き取りですね？　ウチは妖怪屋敷ですから、今さら一人ふえるくらいどうってことありませんが……」

「よろしく頼みたい。古砥部は嫌がるかもしれんが、な」

かるい難色を示す義影に、祁答院は頭を下げた。

「了解しました。？死力？を尽くしましょう」

気安い口調。だが、絶対の真実をただよわせる言葉を捨て、義影は背を向ける。

できる、とは言わない。ただ彼がリスクに対して積む掛け金は、常に命。ゆえに信頼できるのだ。

祁答院は義影を見送る。伊織神社へと遠ざかる彼の？女影？おんなかげは、まるで別人のように悲しく動き揺らめいていた――

間章（2）

彼女は水底で夢を見ている。

それは、昔々で語られるべき物語。我々にとって三百年前の出来事だ。

そこは、彼女にとって見知らぬ場所。燭台しよくだいからロウソクのわずかな光がもれる、ある寺院で繰り広げられた一幕だった――

「お待ち申し上げておりました」

須貝すがい五郎左ごろうざは客人を迎え、片ヒザをついていた。

相手が相手であるし、ここは屋内。平伏するのが妥当なのだが、あえてしないのは常在戦場を旨とする彼の矜持きんじである。

「うむ……。使いの者より、上首尾じやうしゆびであつたと聞いておる。どうであつた？」

もう一つの理由は、いかに上位の者であれ自分を粗末そまつにあつかおうものならただではおかないという、脅おどし。事実、陣笠じんがさを目深まぶかにかぶって上座に立つ男の声は、威厳を保ちながらもかすかにふるえていた。

「造作もなきことにござりました」

「……して、証拠の品は？」

上座に立つ男のわずかな間は、五郎左の態度に対する不快感である。

「これに」

鼻を鳴らした五郎左は、脇に置いた大小をかかえて立ち上がった。剛腹こつぷくとは名ばかりよと嘲あざける内心を威圧の視線で押し隠しつつ歩み、陣笠の間近でふたたび片ヒザをつく。

（かような場に、礼儀もなくもあるまい。宮仕えも楽ではないわ）

これも五郎左は口にせず、大小を置いて立ち上がった。前を向いたまま後退し、また元の場所でヒザをつく。

五郎左の一連の動作がすべて終わってから、ようやく陣笠の脇に控える侍が動いた。大小を手に取り、そのうちの太刀を陣笠にわたすと、渡された陣笠は鞘さやからなかばほどを抜いて確かめていく。

「うむ……。たしかに、正宗。しかと受け取ったぞ。五郎左、大義であった」

やがて満足したのか、五郎左に顔を向けながら太刀を侍に返した。

「は……」

そのやりとりをさげすみの目でながめていた五郎左は、形ばかりにしか聞こえないねぎらいの言葉へ、やはり形ばかりに頭を下げる。ただ、たとえその言葉に心がこもっていたとしても、五郎左の心

の琴線^{きんせん}をゆらすことはかなうまい。彼にとって、そんなものは一文^{いちもん}の価値もないのだ。

価値があるのは報酬だけである。武士と主人のあいだに存在する関係は、鎌倉の昔よりご恩（報酬）と奉公（仕事）。武士道など徳川將軍家が学者に命じて作ったまやかしに過ぎないと考え、今なおつらぬく五郎左は、ある意味で真の武士であろう。

（ ）

ゆえに、五郎左は続く言葉を待った。

が、何もなし。どころか陣笠は、侍に顎で命じてこの場を立ち去ろうとする。

「お待ちくだされ」

彼らがそばを通り過ぎようとしたとき、依然^{いぜん}としてヒザをついたままの五郎左は低い声を放った。

「お約束の件、いつになりましたようや？」

立ち止まった二人へ響く、殺意すれすれの恫喝^{どっかつ}。

「ひかえよ五郎左！ 無礼であろう！」

侍が恐怖に耐えかねた犬のように吠える。それを陣笠は頼むに値せずと見たのだろう。迫力のみで侍を脇に控えさせ、おもむろに口を開いた。

「五郎左。そちにも分かつ。ただちに、という訳には参らぬ」

「それはむろん、承知のこと。なれど手前はただいまのところ、人目を忍ぶ隠者暮らし。いつまでも待てるほど、手前の首は長くござりませぬぞ」

「……できるだけ、急ごう」

「よろしくお頼み申し上げます。今ひとつ」

「申せ」

「このところ、懐がいささかさびしゅうござりまする。金子など、いくらか用立てていただきたい」

さらに場の温度を下げる五郎左は、意図的に身じろぎした。

それを抜き打ちの予備動作と理解した陣笠は気色ばみかけたが、彼にも悪党としての冷徹な計算がある。この場を穩便におさめるべく、侍をつながした。

舌打ちする侍の手より、何枚かの小判が乱暴に投げ出される。それを一瞥した五郎左は、

「足りませぬな。短刀の代金にもなりませぬ」

不快もあらわに吐き捨てた。陣笠を見る目は、もはや敵を見るそれとなんら遜色ない。

「……不足はあとで届けさせよう。代わりにおとなしくしておれ」

「……御意」

陣笠達は去る。足音が消えるまで動かずにいた五郎左はやがて立ち上がり、

「薄汚い御仁よ……。まあ、俺も人のことは言えぬが」

居合いで虚空に一撃を見舞う。つぶやきは、真の剣客が振るう剣の証明たる風勢、太刀風が吹きすさぶ伽藍へとかき消えていった。

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

奥村町^{おくむら}で迎える二度目の朝。石和邸^{いさわて}で朝食を済ませた祁答院^{けとせいん}たちは、天候に恵まれすぎた今日も徒歩で伊織神社へ向かっていた。

古砥部^{こつとべ}と手をつないで歩く祁答院の前方には、この暑さにもめげずポケットに手をつ突っ込んで歩く石和の猫背と、それにあわせて早足で付いていく有川^{ありかわ}の背中がある。祁答院は年甲斐もないヤジウマ根性で、二人の会話に耳をそばだてていった。

「古砥部が見えるって、ホントかよ？」

「ホントだって。修二って、そういうトコだけは現実家だよね」

どうやら昨晚聞いた有川の説明のうち、伊織神社の結界^{むすび}について話しているようだ。

「だって、なんだよ？」

石和の不満げな問いを見て、祁答院は思う。

有川からあれだけ露骨な好意をぶつけられているのに、まったく気付かない彼の精神回路はどうなっているのであろうかと。他にについては人並み以上にするどいのに。

いや、気付いていないという仮定がまちがいのかな。ならば、彼は気付かないふりをしているということ。だが、その理由には思い当たるフシがない。

「じゃ、卒業後のコトとか考えてる？」

有川はこれが言いたかったらしく、石和へ問い返す。二人とも大
学三年生だ。この夏休みが終われば、就活は本格化する。祁答院と
しても、それをいっさい相談してこない石和は心配のタネだったし、
世話好きな彼女としても、好きな異性という以上に心配なのだろう。

「……にしきは？」

痛い所をつかれたらしい石和は、苦々しげな表情でふたたび問う。

「言ってなかったっけ？ 高校の先生。教職取ってたでしょ？」

「聞いたような気もする」

「でしょ？ じゃ、修二しゅうじは？」

はきはきした有川の受け答えに、石和は沈黙する。

「ほら、非現実的。早い人なんか、もう就活はじめてるのに」

「……テキトーに就活して、テキトーに働くよ」

たまらない、これ以上は突っ込んでくるなとそっぽを向く石和に、
有川はため息を交えながらかみ付いていく。

「なに考えてんのか知らないけど。私は、修二がもうちょっと生き
ることに一生懸命になってくれたらなって、思っただけだなあ」

「……ほっとけ」

会話を打ち切ろうとする石和の、短くもたしかな拒絶。その様子を見て、祁答院はやはり何かあると思った。

屈折した性格や冷淡な態度は、おそらく家庭事情に起因するものだろう。思春期に経験したトラウマが一生払拭できない人間というのは、よく存在する。これは容易な推理だ。

しかし、あそこまでかたくなに差し伸べられた手を払うのは重症と言っほかない。

人の手助けを嫌がる、あるいは人を信用しない人間は、多くが人に傷つけられた経験を持つ人間だ。ただ、その多くは同時に助けも求めている。加えて、助けの相手が付き合いの長い異性とくれば、その器量によほど不満がないかぎりはずがり付きなくなるのが人情。人付き合いの範囲がきわめて狭い石和にとって、有川は神様のような存在のはずだ。

それすら拒否する人間も、たしかにいる。

そんな人間は、祁答院の経験則から言って例外なく、

とても優しく、とても弱く、とても自信がない人間――

だ。彼らはだいたいにおいて自己完結している場合が多く、他者には理解されない。常に自殺衝動あるいはごくまれに殺人衝動を持つ者も多いが、自制心でそれを抑え込んでいる。それで手一杯となってしまうがゆえ、何もできないのだ。

脱出への道は二通り。

一つは素直に助けを求めること。石和の場合は、さいわいとして有川がいる。彼女がその気であるかぎり、祁答院の手助けはむしろ大きな世話だろう。

二つ目は、独力で心に熱を与え続けること。

本当に一人であればこれしかないが、勧められない。傷がふさがることは一生ないし、焚き続ける釜かまの燃料調達やメンテを、一人で休みなく永遠にやり続けなければならないからだ。たいていは途中でどちらかが破綻はたんする。

（石和君。君はすなおに有川さんを頼るべきだ。でなければ、一生そのままだぞ）

ノドまで出かかった言葉を祁答院は飲み込む。忠告には意味がない。悟り、身につけねば役に立たないと知っているがゆえ。

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？（後書き）

お待たせいたしました。？章のスタートです。

けど、いきなり説教モードから入るのはどうなのよ筆者？

主人公が年長者なことをアピールしようと書いたら、なんか流れでこうなりました。スイマセン（爆）。

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

立ち止まって待つ石和の肩を叩き、けどういん 祁答院は鳥居をくぐる。
と、ぶつちやう 仏頂ツラのまま黙ってしたがいさわ う石和が境内に入った瞬間から
さわぎ始めた。

「うわ、なんだコイツ？ 離せ！」

「コイツってなんだ、シュウジ！」

見れば、するりと祁答院から手を離れたこへん 古砥部が石和にまわり
ついている。

「ほう。ありかわ 有川さんの言ったとおりだな」

納得顔でアゴに手を当てる祁答院の代わりに、脇でうなづ 頷く有川が明
るい声で指摘した。

「でしょ？ しゅうじ 修二、その子が古砥部だよ」

「コイツが？ おい、くつつくな。離せ！」

「だから、古砥部って呼べ！」

「分かった。お前は古砥部、これでいいだろ！」

離せ嫌だと押し問答を続ける二人は、はたから見ればほえまし
い光景でしかない。放っておけばいいと祁答院は本題に移る。

「で、有川さん。あとはどうすればいいのかな？」

「私もよく分からないんですけど……」

有川の答えはきわめて頼りないもの。しかし、まともに考えれば仕方ない。どうやったら神様を呼べるのか、という問いに答えられる人間はむしろ危険人物だろう。

しばらく待ってみようか。祁答院が言いかけた矢先、

「む！」

石和への強制スキンシップを続けていた古砥部が、ピタリと動きを止めた。

その意味を、のこる全員が理解する。そろって息を呑む中、境内はゆっくり？異界？へと変貌を遂げていった。

夕闇と似て非なる赤闇せきあんに包まれる場。ずしりと肩へのしかかる悲嘆たんの想いに、初体験の祁答院は重みに耐えかね中腰をとる。それは、

もう、とうの昔に狂っているのでは。

と、祁答院に思わせるのに十分なプレッシャーだった。

（心配ない。万一のさいは八島君やしまがなんとかしてくれるはずだ）

彼は今この瞬間もどこかに潜み、状況を見守っているだろう。祁答院は失敗を怖れるべきではないと心火しんかを点し、意志を強く保つべく眉間みけんにシワを寄せる。

と、古砥部が無言である一点を指し示した。

全員がそちらを注目すると、彼女は社の脇から誘われるように姿を現した。

胸に両腕で短刀をしっかりと抱く龍神の巫女は、社の清楚な佇まいに劣らぬ楚々とした所作で歩む。ただ有川の話にあつた通り、雰囲気は夢でも見ているようだった。こちらにもまだ気付く様子がない。

「あれが……」

「どうやら、そのようだな」

彼女の影に龍神の姿を確認し、言葉が続けられない石和の台詞を祁答院が接いだ。

「センセ、修二、お願いしますよ」

隠しきれない動揺に顔を青ざめさせて有川が言う。

「伊織ー、こっちだ」

ころは良しと見計らったのか、頷く二人よりもわずかに早いタイミングで古砥部が大声を出した。彼女のみは普段とあまり変わらない。基本的に人見知りしない彼女は、気持ち的にもうなかよしらしい。

「……あ、古砥部様。おはようございます」

その呼びかけでようやく古砥部の存在に気付いた伊織が、こちら

へゆつくりと歩み寄ってきた。

「伊織さん、おはよ」

「はい。にしきさんも、おはようございます……」

おだやかな見た目の奥に潜む、張り詰めた糸。かすかなきっかけで崩壊しそうな危うさをただよわせる伊織は、それでもゆつたりとした口調で頭を下げる。そして頭を上げた後、かたわ傍らに立つ祁答院を見て小首を傾げた。

「あ、紹介しますね。こっちは……」

「伊織さん。お初にお目に掛かります。私は、城下で私塾を開いておりますけどういん たてわき祁答院（帯刀）と申す者。ぜひお見知りおきを」

あわてふためく有川を受けて、祁答院はかねて用意の自己紹介を行う。城下で私塾うんぬんは、もちろん伊織によけいな刺激を与えないよう適当に考えたでつち上げだ。

「にしきさん。では、こちらの方が……」

伊織のかんばせに宿るかすかな喜色。それは、

「そうです。私の先生です」

「はい。このたび殿より直々の命を受け、こへいた小兵太さんの搜索に当たることになりました。非才の身ですが全力を尽くしますので、どうかよろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願いいたします!」

さらに重ねた祁答院の嘘に爆発した。何気なく差し出されていた祁答院の手をしっかりと握り、伊織は深々と頭を下げる。ために、祁答院が一瞬作ったやりきれなさど罪悪感を表す^{じゅうめん}渋面は気付かれずに済んだ。

「伊織伊織、こっちは修二だ」

古砥部は、そのままいつまでも顔を上げない伊織の服の裾^{すそ}を引っぱる。

「あゝ、石和修二っす」

石和は祁答院と同様の思いをとぼけ顔に隠して名乗ると、伊織は顔を上げた。

「石和?」

それは、彼女にとって最も重要な名前だろう。軽いおどろきの声を上げた伊織は、目を丸して石和を凝視する。

「ああ、彼は小兵太さんの遠縁に当たる私の一番弟子だ。優秀な男だよ」

とって食われるとでも思ったのか、身を竦ませて押し黙る石和に代わって祁答院が答えた。

「性格に問題あるけどね」

そこへ割り込んだ有川が、石和のビビりを意地悪く観察しながら茶化す。

「そして、昨日お会いした有川さんと……」

「古砥部だ！」

「の、四人で小兵太さんを探します。伊織さん、改めてよろしくお願ひしますね」

何はともあれ、不安を与えてはならない。場をまとめる意味と安心感を持たせるため、祁答院は恭しく一礼した。

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

祁答院は恭しく一礼する。

「よろしくな」

祁答院の堅苦しさを補うフレンドリーな古砥部。対照的なだけに、二人が人に与える印象は信頼感と親しみやすさを両立させていた。

「ま。古砥部様もお力を貸して下さるんですか？」

伊織はほっとしたように息をつき、顔を和ませる。

「おう！ 任せろ！」

「お願いしますね」

大いばりの古砥部に始まる伊織のなでなで攻撃。そのおちつきに機会を見出した祁答院は本題を切りだしていった。

「さて伊織さん。小兵太さんを探すにあたって、いくつかお聞きしたいことがあります。よろしでしょうか？」

「……はい。なんなりと」

「ではまず、最初の質問。小兵太さんなんですが、勤めていたのは御蔵奉行（ぶぎょう）

麾下の御蔵方でまちがいないでしょうか？」

「……はい」

「小兵太さんのお父上は、右馬之介さんうまのすけですね？」

「……はい」

「右馬之介さんは、勘定所かんじょうしょの検計方けんけいがただった。これも、そうでしょうか？」

「……勘定所、だったと、思います。それ以上は……」

「そうですか。では、奥村藩は二万石。藩主は奥村主計頭おくむらかずえのかみ信雄様」

「……はい」

石和と有川、古砥部の三人が沈黙で見守る中、祁答院と伊織の一问一答は続いていく。いずれもすでに判明している事実ばかりを並べ、肝心の部分にわざと触れないのは、まずは伊織に自分を思い出してもらいたいという祁答院の配慮はいりょだ。

伊織の返事がだいぶ力強くなってきた感じた祁答院は、不意に核心の糸口となる質問を放った。

「さて。小兵太さんなんですが、どのくらい前に仇討ちの旅に出たんでしょうか？」

「……え？」

ここで伊織は初めて疑問符を使う。冷や汗をそつと拭う祁答院の

耳に、石和と有川がノドを鳴らす音が届いた。

「小兵太さんはお父上の仇を討つため、須貝五郎左を追って旅に出た。そうではなかったでしょうか？」

祁答院は恐怖を笑顔の仮面で覆い隠して質問を続ける。どこかで八島義影が「命を張らない奴に、価値のあるものは手に入りませんよ。他人がうらやむ物を棚ぼたで手に入れても、人はそいつに大した価値を感じないでしょう」と嗤ったような気がした。

「……そう、です」

うつむく伊織は、小刻みに肩を震わせ始める。

「それはどのくらい前だったんでしょうか？」

「……三年前、でした」

「そうか……。伊織さん、疲れただろう？ 今日はこの辺にしておこうか」

震えは止まらず、大きくなっていく。祁答院はここを潮時と見て、優しく言葉をかけた。

「いえ、私はまだ！」

「伊織さんは自分で思っている以上に疲れていますよ。私たちは明日も来るし、今日はもう休んだ方がいいでしょう。古砥部、途中まで送っていてくれないか？」

祁答院は目でも合図を送る。それを受けた古砥部はひとつ頷^{うなづ}き、強引に伊織の手を取って歩きはじめた。

「いいぞー。よし伊織、帰ろう」

「でも……」

「いいから。行くぞー」

こういつ時にかぎり、古砥部のマイウェイっぷりは頼もしい。まるで玩具コーナーへ引つ張る子供と渋る母親だった。

やがて伊織が立ち去ると、石和がおずおずと口を開く。

「どっすか、センセ？」

「聞いてただろ？　ほとんど収穫なしだ」

肩をすくめて応じる祁答院。

「そっすね」

「ただ、収穫が一つ。他にも、疑問点が一つできた」

続けた言葉に、祁答院はかすかな自信をのぞかせた。

「それは？」

与えられた設問に沈考する石和に代わり、有川が問う。

「聞いて見てたら気付くだろう？ 収穫は伊織さんの記憶が、おそらく自殺前後で止まっているということだ」

当然といえば当然のことだが、これは重要だ。今後の質問事項へ大いに影響するだろう。

「じゃ、疑問点はなんですか？」

「二人とも聞いてばかりだな。少しは考えたまえ。伊織さんは、なぜ脇差を抱えていたんだ？」

これが疑問点。 祁答院の答えに、石和がはつとした表情で顔を上げる。

「……なるほど。 伝承に、伊織と脇差に関する事柄はいつさい存在しませんね」

「そういうことだ。 あれが何かの力ギになると思っただが……」

完璧に理解した教え子に口の端^はを上げて見せた祁答院は、しかし言葉尻を言いよどませた。

「センスでも分かんない、と」

そのセリフを有川が受け継ぐ。

「ノーヒントでは、さすがの私でもな……」

これだけの情報で謎が解ければ、神がかり的な名探偵だ。 祁答院が腕組みして眉を下げていると、胸ポケットの携帯がメールの着信

を告げる。

差出人は義影。どこかで見ていたらしい。内容は、

『お疲れさまです。先は長そうですね』

ねぎらいとも擲^{やゆ}掄とも取れる短文だった。

もう一段、祁答院の眉が下がる。絶対に後者だと大きく息を吐くと、境内を包んでいた茜色は徐々に薄れていく。間もなく古砥部がもどってきた。

「送ってきたぞー」

「お帰り古砥部。ご苦労さま」

古砥部はびこぴこシッポを振りながら、手近な有川へダンプ。受け止めた有川はほえんだ。

「よし。それじゃ、いったん引き上げよう」

祁答院の号令に、一同は伊織神社を後にする。道中、不意に石和が口を開いた。

「センセ、俺、午後から別行動になりますから」

「葬式の手伝いか」

「はい。姉貴はもう行ってるし、男手が足りないそうなんで」

「分かった」

「ういっす」

それきりで会話は終わり、誰ともなしに黙りこくる。

高く登った陽光は祁答院に言いしれぬ焦燥感しょうそうかんを与え、落ちる短い影は、夢の後を思わせる夏草のように揺れていた――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

＊ ＊ ＊

——こういうのも、たまにはいいもんだな。

前園俊馬まえのしゅんまは、通された和室に響く風鈴の音色に耳を傾けながらそう思っていた。

開け放たれた窓からかすかな涼風がそよぐ。昼下がりというもつとも暑い時間にもかかわらず、周囲を木々に囲われたこの和室は過ごしやすい。扇風機いらずだった。

前園があぐらをかくその前にはちゃぶ台があり、上に置かれたコルクのソーサーには、琥珀こはくのような色合いを放つ麦茶入りのグラスが載っている。大汗をかき、いくつかの氷を浮かべているそれを手に取った前園は、炭酸とアルコールがプラスされていればなおいいんだが、と考えながら喉を潤した。

からん。

なかばを飲み干して元の場所に置いたグラスが、氷とガラスのぶつかり合う涼やかな音を立てる。

と、ふすまを開いたままとなっていた廊下から、木を踏みしめるリズムが近付いてきた。

「どうも、大変お待たせいたしました」

それが部屋の前で止まったとき、いつもの衣装に身を包んだ家主かがみあきのり——鹿神昭典が一礼しながら和室へ入ってくる。前園は居住まいを正した。

「いえ、こちらこそ、突然おジャマして申し訳ありません。では、さっそく拝見させていただいてもよろしいでしょうか？」

「はい」

さすが神職とでも言うべき洗練された所作しよさで着席した鹿神は、小脇に抱えていた二振りの刀を差し出す。

「のび太」

それを、前園の指示で白手袋を装着した折田新一郎が受け取った。渡された刀を静かにちゃぶ台へ置いた折田は、まず太刀を取って鞘さやから抜き放つ。次いで取り出したメジャーを使って刀身を計測していく。

「こちらの刀は、いつごろ手に入れられたのでしょうか？」

その様子を横目でながめながら前園は口を開いた。

「先祖代々のもの、と父より聞いております。まあ、本当のところは分かりませんがね。銘はありません」

少し考えた鹿神は、おだやかな態度を崩さずに答える。

「ふむ……。しかし、佳い品に見えます。無銘でも、さぞお高いのでしょうなあ」

「はあ……。実は、よく知らないのです。私も剣道の心得はありませんが、刀剣の目利きはまた別の問題ですから」

「おっしやる通りですな」

前園は素直に同意した。彼も今回の事件に携わるに当たって、多少なりとも刀剣について勉強したのだ。分かったのは「素人に目利きは無理」だということ。一人前の鑑定ができるようになるには、もはや「刀剣道」ともいうべき勉強と実地が必要になる。そんな金持ち道楽につき込む熱意を、むろん前園は持たない。真偽の確認を放棄して言葉を接ぐ。

「脇差の方は？」

「そちらに関しては、私にもよく分かりません。ですが、少なくとも私が子供の頃から家にありました。こちらは無銘のものです」

鹿神は目線を外し、申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「なるほど……」

これも言葉のみの同意だ。前園では確認のしようがない。鹿神が目を伏せたのを幸いとし、言動から真偽を確かめようとながめ回したが、これも分からなかった。

あきらめた前園は、仕方なく折田へ話を振る。

「どうだ？」

「まちがいありません。長さも登録通りです」

ちょうど脇差の計測を終えた折田が、おっかなびっくりといった手つきで脇差を鞘に収めていく。

「そうか。鹿神さん、ありがとうございました」

頷き、向き直った前園は、内心で舌打ちしながら頭を下げた。本
当なら試薬を用い、刀身から血液反応が出ないか調べたいのだ。

「いえ、このくらい。たいしたことではありませんよ」

鹿神は微笑を崩さず、大仰に首を振る。が、目は折田の手元を心配そうにながめている。

（やはり頼めないか）

そんな鹿神の様子を見て、前園は内心で歯がみしながら検査をあきらめた。

刀は粗悪品でないかぎり、百万円単位で売買される品。素人同然のあつかいを見せる折田に気をもむのは当然だった。

それに、血液反応の確認に使う試薬は液体である。液体である限りは刀身に垂らして反応を見るのだが、日本刀は所有者が美術品として所有している場合が多い。液体の付着にいい顔をしないし、どころか刀にとってサビは天敵で、所有者は吐いた息が刀身にかかることさえ嫌がる。だいいち、血液が洗い流されていれば試薬は反応しないし、強引にやれば補償問題にも発展しかねないのだ。

やはりこれ以上の任意捜査は難しいと判断した前園は、次の話題への布石を打つ。

「すみませんねえ。しかし、困ったモンですよ。目撃者はおるか、物音を聞いた人すら出てこない。仁科にしなさん自身もずいぶん社交的な

方だったようで、知り合いに話を聞いて回るだけで一苦労です」

「ご苦労様です」

折田から刀を手渡された鹿神は、安堵の表情を見せながら腰を折る。その折田がメモ帳を取り出したのを確認した前園は「しっかりメモれよ」の意味を視線に込めて折田を見つつ、話をこの訪問の真の目的である情報収集に切り替えた。

「鹿神さん。おうかがいしたいんですが、仁科政義さんにしなまさよしってのはどんな方でしたか？」

「そうですねえ……。もうご存じかと思いますが、昔からこの辺りに住んでいらした方です。男気のある方で、皆さんの評判も良かったですよ。当奥森神社で催すお祭りにも、有志としてまとめ役をこなして下さっていましたし。神職の私は大きな声で言えませんが、何度かお酒をご一緒したこともあります。盛り上げ上手な方でしたね」

「なるほど。では、仁科さんと何かトラブルを抱えていたような方に心当たりはありませんかね？」

「うーん、そうですね……。私は心当たりがありませんが、頑固な方でもあったので、つかみ合いのケンカ沙汰は、何度かあったと聞いております」

「そうですか。では、仁科さんと懇意こんぎにされていた方のお名前を、知っている限りで教えていただけませんか？」

「はい……」

鹿神は時に考え込みながら知人の名を列挙していく。が、前園が途中で折田に目をやると、メモ帳から顔を上げないまま首を横に振っていた。どうやら新しい収穫はないようだ。

「お力になれず、申し訳ありません」

その様子を見て、二人の成果を悟ったのだろう。名前をすべて挙げ終えた鹿神はすまなそうに三度頭を下げようとした。

「いえ、充分です」

「ゾノさん、そろそろ……」

それを前園が手で制すると、時計を確認した折田が肘で前園をつく。

「もうそんな時間か？」

「はい。今から行けば、ちょうど間に合います」

折田の目がメガネ越しに光った。この手の秘書的な仕事をやらせれば、彼は本当に優秀な人材なのだ。前園は頷き、まっすぐ鹿神の目を見た。

「鹿神さん。あわただしくてすいませんが、我々はこれで」

「もう、ですか？」

「はい。これから仁科さんのお通夜に顔を出さなければなりません

ので。失礼いたします」

「いえ。こちらこそ、なんのお構いもできずに……」

仕事中に刑事の訪問を受けた民間人が、迷惑がっていないはずがない。それでも鹿神は残念そうに目を伏せた。さすがにこの態度は表面上だろう。が、それをよく知る前園ですら「ではもうしばらく」と言ってしまうそうになるほど見事な社交辞令だった。

腰を浮かせた二人になおも引き留めるそぶりを見せ、再度の固辞に「ではせめて玄関まで」と申し出た鹿神の見送りを受け、二人は奥村神社の母屋を辞去した――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？（後書き）

ども、ひさしぶりに「妖怪学」を更新した筆者です。

物語を書くにあたって、私は資料を購入する（妖怪関係の資料はデフォで存在する。つか、放っておいても勝手に増える）のですが、今回のお話はそのモトを取ろうとしたフシが見え隠れします。刀剣関係の説明あたりですね（笑）。セコいな、私。

それにしても「ぜんぶ書き直してえ！」とか、まだ書いている途中で思う私はダメ人間でしょうか？

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

「どう思う、のび太？」

外へ出た前園まえそのは、玄関の戸を閉めるなり折田おりたへぶつきらばうな問
いを放つ。

「どうって……。普通の人に見えましたよ。話のかぎりでは、仁科にしな
との関係は知人以上友人未満って感じですかね？」

「そのまんまだな。アリバイもないし、いちおうは捜査対象に入れ
ておこう」

「というか、アリバイのある人がいませんけどね」

「まあな。んじゃ、行くか」

次の目的地に向かうべく、境内へと足を踏み出した前園は考え始
める。

先ほど鹿神かがみの言葉にもあった通り、仁科政義にしなまさよしは勤め先の奥村建設
の同僚と何度かトラブルを起こしていると判明していた。長引く不
況のあおりを受けた最近では、仕事をよこせと社長の奥村信保おくむらのぶやすの許
へどなり込んだこともあったという。

いずれも酒を飲んだ勢いらしく、地元の駐在がケンカの仲裁に入
ったことも一度や二度ではないらしい。事実、仁科の死体からは泥
酔と言えるほどのアルコールが検出されている。酒の席で仁科とも
めた犯人が突発的な犯行におよんだ、というのが現状はもつとも濃

厚な動機で、この情報を鹿神のような顔見知り程度の人間が知っているとこの事実が、訪問におけるいちばん大きな収穫だった。

引き続き、前園は脳内で状況を整理していく。

まず、目撃者は皆無。

今後に期待するとしても、現状はそちらの方向から容疑者を特定するのは不可能に近い。

次に、凶器である刀剣類の行方。

きのう訪問した奥村信保や先ほどの鹿神など、被害者の知人かつ所有の届出をしている人間を優先的に訪問して所在の確認をする一方で、遺棄された可能性も考慮して搜索していた。

が、いまだ発見に至っていない。ようするに、物証も皆無。

凶器さえ出てくれば。

と、前園は思う。刀剣類は法律の規制で都道府県教育委員会への所有届け出が義務づけられている（銃器は警察庁となる。これは刀剣が法律上は美術品とされているせいで、所有に対する規制は届け出のみ。だれでも購入可能）ため、所有者の割り出しが容易なのだ。しかし、すでに当たった刀剣商や所有者はいずれも空振りに終わっていた。

最後に、犯人の交通手段。

このあたりは田舎。近隣住民でないかぎり、移動にはかならず車がバイクを使用することになる。が、これも目星は付いていなかった。

（徒歩か？）

前園は自分の思考に立ち止まる。

盲点かもしれない。伊織神社近辺の夜間は、かなり静かな場所。車が通れば普通の人間はまず気付くし、近隣住人から犯行時刻に物音を聞いたという証言も得られていなかった。とすると、これは正解の可能性が高い。

（伊織神社の近所に住んでるヤツか？）

あるいは車やバイクを遠方に停め、そこから徒歩で移動したか、だ。

しかし目下のところ、候補がない。引き続き、知り合いの中で怪しそうな人間を当たっていくしかないだろう。そのためにも、まずは仁科政義の通夜に顔を出すべきだ。ひよっとしたら、弔問客に挙動不審者を見いだせるかもしれない。

（初動の二日間で捜査がここまで進展すれば、まあ上出来か）

肩をこきりと鳴らした前園が、奥村神社の鳥居をくぐった時だった。

「お……」

「あ……」

若い女性を引き連れた色男と目が合ったのは。

「また見えるよ……。ボク、やっぱり頭がおかしくなったのかな……」

「アンタたしか、石和修二いさむしゅうじと一緒にいた……」

またしても怪しげな独り言をつぶやく折田を無視し、彼女なし生活が長い前園は男に半分やつかみを込めた視線を向ける。

「伊織神社でお会いしましたね。私は実岡大さねおかで助教授を勤めている
祁答院けどういんと申します。石和君は私のゼミ生です」

慣れているのか、取り合わない祁答院は涼しい顔でお辞儀した。
ただ、鹿神とは違って演技がある。うさん臭さを感じる慇懃いんぎんさだ。

「なるほどね。で、その助教授さんは何をやってるんだ？ オレたちの行くとこ行くとこ現れて？」

あやしいと思うと、とたんに態度が悪くなる。前園は刑事の悪癖を全開にして問いただした。

「伊織神社の調査ですよ。私は民俗学を専攻しておりますので」

「なるほどね。失礼ですが、なんの調査ですか？」

「伊織神社の伝承についてですよ」

「じゃ、なんで奥村神社に？」

「こちらで宮司をやっている鹿神さんにも、お話をうかがおうと思
いましてね」

身長の都合で見上げる形となった前園の凶悪な視線に、祁答院は
顔に微笑すら浮かべた冷静さで応じる。昼下がりの奥村神社は、さ

ながら二人の剣士がにらみ合うコロシムのような緊張感に包まれていった。そこへ、

「ひiiiiiii!」

必死に何かを振り払おうとジタバタする折田の絶叫が響きわたる。

「のび太うるせえ! の、わりにゃあ石和修二の姿が見えないが?」

興^{きよう}を殺^{ころ}がれた前園は顔を向けてどなりつつ、横目で祁答院をにらみ上げた。

「仁科さんのお通夜が今晚なのを、刑事さんもご存じでしょう。石和君はお手伝いに行きましたよ」

「そついや、父方の叔父だって言ってたな」

仁科政義の妻であるみすずは、石和の父親である石和隆史^{いさわたかし}の妹だと裏が取れている。石和と仁科の両家には、ほかに付き合いがある親戚^{きんせき}がいないことも。

「そつでしょう?」

「うむ……」

すじは通る。前園は祁答院を見すえたまま顎^{あご}に手を当てた。

「では、私たちはこれで。有川^{ありかわ}さん、古砥^{こてい}部、行こう」

途切れた会話を、祁答院は行ってよしと受け取ったらしい。前園

の目に勝ち誇るような笑みを浮かべ、去っていく。

それを見送らない前園の背に、唐突な声がかかった。

「刑事さん……。伊織神社ですが、あまり近付かない方がよろしいでしょう」

「……どういう意味だ？」

振り向く前園の目に、やはりこちらへ向き直っていた祁答院の姿が映った。

「龍神は、目覚めました」

にこりともしない、しかし己の言動にまったく迷いが感じられない、真摯な瞳。それは長年にわたって刑事生活を続けてきた前園にも、絶対の真実を告げている者の瞳と見えた。

だが、セリフ自体はトンデモ話もいいところ。混乱する前園をよそに、祁答院はふたたび背を向けて歩き去っていく。

彼らが手水舎の手前を曲がって視界から消えた後、前園は呆然と感想を口にした。

「なんだあの先生さまは？ 頭がおかしいのか？」

非常識を常識として語る人間への評価は、まともに考えてそれしかない。白昼夢のような邂逅から我に返った前園は車にもどろろとし、

「……折田、何へたれてやがる」

ようやくその場で腰を抜かしていた折田に気付いた。

「だって……ゾノさん見えなかったんですか？ あいつら変なの連れてましたよ？」

「変なのって、なんだよ？」

「昨日も言った、あの犬っぽいヤツです」

「のび太もかよ……」

前園はこれ以上キ。○イどもの相手はゴメンだとばかりに頭を振る。もう帰って酒を飲んでふて寝したかった。

「しかし露骨^{ろこつ}に怪しいな、あの先生は。……それに、石和修二か……。のび太、石和修二についてはどうなってる？」

だが、仕事は明日の酒のためにしなければならぬ。気を取り直して言葉を続けた。

「え……。まだ、誰も話を聞いてないみたいですね」

立ち上がってメモをめくり始めた折田は、びっしりと書き込まれたそれからまたたく間に情報を引き出す。

「ち、うちの連中は何をやってるんだ……」

「あ。石和の家もポン刀を一本登録してます」

能なしどもめ、と地面にツバを吐き捨てる前園に、メモの一点で指をとめた折田の聞き捨てならない一言が突き刺さった。

「のび太」

前園の目が光る。思い出したのだ。仁科政義に近しい人間で、伊織神社へ徒歩で現れた人間がいたことを。

「はい、折田です」

「んなことどうでもいい！ 課長に連絡しろ。石和と仁科の関係について、徹底的に調べさせるんだ！」

叩けば必ずホコリが出るはずだ。自らのカンを確信して詰め寄る前園に、なぜか折田は顔を青ざめさせる。

「どうしたのび太？ さっさとしろ」

身内にも連絡できない非常事態には、ほど遠い。疑問を覚えてつめ寄る前園に対し、

「だって……課長……怖いんだもん……」

折田の事情は全力で脱力感を誘うものだった。

「オレと、どっちが怖い？」

ひく、とこめかみに青筋が立つのが自覚できる。それでも前園は握った拳を後ろ手にして笑顔を作った。すると何をカン違いしたのか、折田は妙に晴れやかな顔で、

「そりゃもちろんゾノさ」

最後まで言わせるわけがない。前園は思いきりぶん殴る。もちろん、答えがどちらでもそうするつもりだった。

「じゃあ、答えは一つだよな？」

もう一発いっとくか。前園がにこやかな凄みを利かせると、ふるふる首を横に振った折田は泣きながら携帯を取り出した――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

＊ ＊ ＊

けつきよくのところ、けどういん 祁答院以下によるおくむら 奥森神社訪問に得る物はなかった。

ただ、祁答院個人は大いに満足している。かがみ 鹿神との対談はきき 記紀（古事記と日本書紀を指す）の知識をひろう 披露し合い、その解釈をめぐつて討論するという、まさに神のロマンに魅せられた者たちの熱き語り合いであつたからだ。

また一人、ライバル（しんゆう）を得た。

思いは共通で、祁答院は鹿神に「今晚は飲み明かしませんか」とまで誘われたのだ。

が、さすがに固辞こじして石和家の門をくぐっている。停めた車から降りてみれば、先行して降りた有川が石和から預かったカギで玄関を開けていた。そのそばに立つこへ 古砥部ともども、やつれているような気がするのには正解だろう。

「ただいま、だ……」

「ただいま。だれもいないけどね……」

「二人とも、お疲れさま」

「ホントにそうですよ。神様のお話で、なんで五時間も話題が続くんですか？」

その理由は有川の言葉通り。後ろから声をかけた祁答院に振り向くその顔は、少しこけているような印象があった。

「勉強になっただろ？」

祁答院の言葉は決して嫌味ではない。神道を正しく理解することは、エコロジーにもつながる最新の？理論？であると彼は思っている。信者としてではなく、学者としての見地からそう思っているのだ。

「さっぱりでしたよ。しかも、肝心かんじんの伊織神社については収穫なしですし」

もちろんそんな思想は、げっそり返事をする有川に理解できるわけがない。

「しかたないだろう。それに有川さん。君も国語か日本史の教師を目指そうというなら、記紀くらいは大まかな内容を知っておいた方がいい」

「そうですけど……。今日のお話は、むずかしすぎです」

露骨ろこつに眉まゆを寄せる有川にとって、奥村神社で強制的に聞かされたトークは拷問ごうもん以外の何物でもなかったようだ。

タタキを上げて廊下を抜け、もはやおなじみとなった居間へ。到着した祁答院は、そのまま無言で畳に寝転がる古砥部を尻目に言葉続ける。

「たしかに、今日の話は少しだけむずかしかったかもしれない。しかしせっかくだ。今晩は奥村神社に祀しろられている白山比やまひめのかみ？神について軽く講義しようか？」

「嫌です」

にっこり断言する有川は、お茶を用意するため台所へと消えていく。聴衆を失った祁答院は静かに古文書の調査を再開した。

——奥村信雄日記。おくむらのぶかつそう表題された本のページをめくる。

この本はタイトル通り、小兵太こへいたに仇討ちあだうの許可を与えた奥村家第七代当主、奥村信雄の日記だ。当初は借りてくる予定ではなかった本なのだが、まぎれ込んでいたらしい。ただ小兵太に縁のある人物と判明した現在は、それなりに読む価値があるだろうと判断した物だった。

「うつむ……」

が、感想はうめき声しか出てこない。これは日記というより、デ。ノート江戸時代版だ。

何月何日アイツがムカついた、何月何日アイツのここが許せない、といった内容がえんえんと書きつづつてある。他人への悪口など、聞いて楽しいものではない。まして、読むとなると相当の苦痛。頭痛をこらえながら読んでいくと、さらにその偏執へんしつぶりが浮かび上がってくる。同じことを繰り返し書いているし、特定の個人に対する攻撃頻度が高いのだ。

「ん！」

読むだけムダか。そう思って閉じようとした直前、祁答院は小兵太に関する記述を見つけた。

彼が旅立つにあたって、特に謁見を許したとの内容だ。

「む……」

しかし、読み取れるのはそこまでだった。大いに期待していると伝えたうんぬんといった内容のみで、単なる部下への激励だけ。さほどの意味を持たないだろう。

「どうぞ」

「ああ、すまない」

有川の声。ちゃぶ台に湯飲みが置かれた気配に祁答院は顔を上げ、一口すすった。

「古砥部は？」

「冷たいのがいいぞー」

「そう言うと思った。はい」

置かれた麦茶入りのグラスに反応し、起き上がった古砥部は両手を使ってこくこく飲み始める。

（それにしても……）

その様子を横目でながめる祁答院は、帰りの車内で彼女が指摘した一件について思考を巡らせていく。

あの刀はすごいぞ。あれに斬られたら、古砥部もケガをするくらい――

これが古砥部の言。あいかわらずの説明不足だが、言いたいことは分かる。おそらく彼女は、鹿神の所有する刀が？妖刀？であると言いたかったのだろう。

不思議ではない。聞けば奥村氏はかつて信濃（長野県）に勢力を張った諏訪氏や阿蘇の宗像氏などと同様に、神社が軍事力を持って発展、大名となった一族だという。血生臭い説話は数多くある。いわくつきの刀の一本や二本が転がっていても、むしろ当然ととらえるべきだ。

妖刀についても多少の説明を差し挟むならば、人を殺し、殺される過程で刀にやどる様々な想い。これがおそらくその神髄であろう。

神が制作したと伝承にうたわれるような剣はさておき、造られた時点での刀にこもる念は、佳品を作りたいと願う作者の想いしかないはず。学術的な見地に立てば、村正の妖刀伝説はあまりの切れ味がもたらした悲劇から後付けされた迷信にすぎない。とはいえ、真田幸村など村正を手にした歴史上の人物に非業の死を遂げた者が多いのも事実。偶然で片付けるにはできすぎた話なのだが。

（しかし……）

あの刀が石和小兵太のものである可能性もあるのか。祁答院はその思考にいたり、すぐさま自説を否定した。

対談のさい、興が乗った鹿神は刀を披露してくれている。柄を外し、茎と呼ばれる部分も見せてくれたのだが、そこにはなんの銘も彫り込まれていなかった。彼の説明通り無銘の品であることは疑いがない。

それに加え、小兵太は旅立った三年後、どこか遠方の地で殺されたという。当時を考えれば遺品がもどってくる可能性はゼロに近い。

「センセ、どうしたんですか？」

湯飲みをみつめて静止していた祁答院に、有川が胡乱ごらんげな声をかけてきたときだった――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？（後書き）

「妖怪学」ひさしぶりの更新ですね。

もう一本の方は一段落ついているので、当面はこちらに集中したいと思っています。おそらく連続更新（一日二回の可能性も）しているので、よろしくお願いします！

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

湯飲みをみつめて静止していた祁答院けどういんに、有川ありかわが胡乱うろんげな声をかけてきたときだった。

「む！」

古砥部ことへがピクリと耳を動かしたのは。

二人も会話をやめ、聞き耳を立てる。聞こえてくるのは、空ぶかするエンジン音。どうやら石和家の玄関先へ侵入した車が駐車しようとしているらしい。それが停止すると今度は玄関扉をガラガラと引く音が響き、まもなく喪服姿の石和いさわが居間へと入ってきた。

「ただいまー」

「あれ、修二しゅうじ？」

今晚は仁科政義にしなまさよしのお通夜。帰ってくるはずのない男の帰宅に、有川は疑問の声を上げる。次いで、目を丸くした。

「お邪魔します」

「失礼しま、うわ、またいるし！」

前園まえそのと折田おりた。対照的な刑事二人の登場に、有川は目をそちらへ固定したまま訊ねる。

「えと、お通夜は？」

「刑事さんたちが一刻も早く確かめたいことがあるってんで、抜けてきた」

ポーカーとぼけフェイスを保つ石和の返答に、剣呑（けん）のんな雰囲気の前園が「そうだ」という視線を有川によこした。

「じゃあ刑事さんたちは、その辺で待ってて下さい」

ぶしつけな態度が自分以外の人間へ向けられることへ、さすがに不快感を覚えたのだろ。石和は顔をしかめながら隣の部屋へと消えていく。

「……何かあつたんですか？」

隣室で石和が何やらごそごそ動き始めるのを確認し、祁答院は口を開いた。

「悪いが話せない。我々も見るもの見たらすぐ帰るから、先生は研究にでも精を出してくれ」

横目でにらむ前園は、部屋の様子で祁答院が何をしていたかを即座に判断したらしい。ケンを売るような口調で会話を打ち切った。

それきり全員が沈黙し、それぞれが何をするでもなく所在なげに視線を空へさまよわ始める。祁答院たちは招かれざる客の訪問に面食らい、いまだ事情も分からないこの状況にどう対処すべきかを模索していたからだし、前園たちは前園たちで自分が他者の平穩を乱したことに自覚があり、にもかかわらず事情を話す以外の話題を持

たなかったからだ。

はっきり言って、居心地が悪い。

それが、この場から立ち去る理由を持たない全員が抱いた感想だった。

「おつかしいな。仏間に置いたはずなのに……」

ゆえに、いつもの調子で頭をボリボリかきながら戻ってきた石和へ、全員の目が集中したのはムリもなかった。

口を開いていいものか。そんな空気に支配された場に一石を投じたのは、もともと蛮勇に優れる男。

「なんで手ぶらなんだ」

持ち前のだみ声に低音の磨きをかけ、前園が威嚇する獣のように唸る。^{うな}

「いや、見つканなくて。ちょっと待って下さい。電話して姉に聞いてみますから」

それを軽く手で制した石和は携帯を取り出す。履歴から素早くコールし、この場にいる全員がやけに長いと感じるわずかな時間が流れた後、話し始めた。

「……もしもし、姉貴？ 仏間に飾ってあった脇差って、どこ片付けた？ ……え、置きっぱなし？ 動かしてない？ ……うん、分かった。じゃあ」

「ないのか？」

さらに低音。通話を終えて携帯をしまふ石和に、もはや暴力に等しい前園の詰問が迫る。表情は、敵へ向けて突進せんとする猪のそれだった。

「んな、怖え声出さないで下さいよ」

「ないんだな？」

「ええ、見当たりません。ちょっと待ってて下さい。も一回探してみますんで」

それすら軽くないなし、いつもの調子を崩さない石和に対し、前園がかねて用意の宣戦布告文を叩きつける。

「いや、いい。石和修二、悪いがお前は仁科政義殺害事件の重要参考人だ。署までご同行願おう」

「――」

部屋が不意に暗くなったように感じられたのは、はたして祁答院の錯覚なのか。

ふたたび舞い降りる沈黙に全員の様子をうかがえば、蛍光灯の光の下で石和と有川の顔が白くなっているのが分かる。肌寒さを覚えた祁答院は、熱を求めて湯飲みに手を伸ばした。茶を一口飲む。それは、とてつもなくぬるかった。

「ちょっと、どういうコトですか？」

ことり、と。湯飲みがちゃぶ台に置かれる音が妙に大きく響いたとき、いぜんとして絶句したまま目を見開いている石和をかばうように有川が割って入る。

「部外者には話せない」

正当な、しかし無情さしか感じさせない前園の返答。

「俺も納得いきません。説明をお願いします」

その有川の肩に手を置き、石和がふたたび前へ出た。彼の目もようやく感情を示し、怒りもあらわに前園をにらみ返す。自分に向けられるべき物を他者へぶつけた外道に対する、正しい怒りだった。

「それは署でする」

しかし前園はあまたの凶悪犯を相手にしてきた男。たかが小僧二人の徒手空拳に等しい抵抗に揺らぐはずもない。自由業の人間さえ震え上がらせる武闘派デカの目は、二人の口を恐怖で凍らせるには充分だった。

「あー、刑事さん」

ここで、ひとり冷静に状況を把握しようと三人を見守っていた祁答院が口を挟んだ。このやりとりに、ようやく付け入るスキを見つけたのだ。

「先生も部外者だ。口出しは遠慮願いましょうか」

むき出しの敵意を自分へも走らせる前園に、祁答院は自信の笑みで応じる。

「令状の提示も説明もなしに、強制連行ですか。違法捜査ですね」

「……拒否するなら、公務執行妨害をつけてもいい」

「今の状況を私が弁護士に証言すれば、あなたを罪を問うことができます」

祁答院はさらに唇の端を^は上げ、自らの笑いを追^{つい}従^{じよう}した。

理路整然としたそれを挑発と受け取る一方、場にさらした札では反撃不能と見た前園は、くやしげに舌を打ちつつ新たな手札を切る。

「……なら、ここで説明してやる。だがその前に、まず質問だ。石和修二、おとといの午後十一時から昨日の午前一時までの間、どこで何をしていた？」

「え……。気分が悪くて、部屋で寝てましたけど」

「一人か？」

「そりゃ寝てるんだから、一人ですよ」

「じゃあ、アリバイはなしだな？」

「……そうなりますね」

「説明しろ」

祁答院と石和を交互ににらみすえたまま、前園が話とアゴを折田に向ける。と、ようやく自分の出番を得た折田がメガネを光らせながメモをめくり始めた。

「はい。まず石和修二君。君のお父さんである石和隆史いさわたかしさんは、三年前に病死しているね？」

「……その通りっす」

「隆史さんは生前、証券取引に失敗、三千万の借金を遺している。その負債は、相続人である君に引き継がれた。まちがいないね？」

二度目の衝撃が、走った。

初めて聞く話に祁答院と有川がおどろきの目を石和に向け、前園がその二人へ「どうだ」と言わんばかりの眼差しを送る。各自それぞれの思いを乗せた視線が居間を交錯する中、

「ち、そうですよ」

渦中かちゅうの人物である石和は、祁答院達に事実を知られたことに顔をゆがませながら肯定した。

頷うなづいた折田は説明し続ける。

「仁科さんの家は去年、長女、ようするに君の従姉いとこが交通事故で死んでいる。今回の事件で政義さんが殺され、残るのは隆史さんの妹にあたる、妻のみすすさんだけ。そうだね？」

「んなの、当たり前でしょ」

「仁科政義さんには、生命保険が二つ掛けられていた。そのうち一つの受取人が、死んだ長女から君に切り替わっている。金額は、三千万」

「……そりゃ、初耳っすね」

石和の声にもおどろきが混じった。本人も知らなかったらしい。ただ、彼以外の全員にその真偽は分からない。仮に姉の蘭生や仁科の妻であるみすずなど、周囲の人間が勝手にやったことで石和には伝えていないと証言しても、石和がだれにも知られずに知ることが容易。石和の言葉が真実だとの証明は不可能だ。誰にも確かめようがない。

嘘か、真か。祁答院達が問いを無意味と悟って沈黙する中、

「事実だ」

それのみがすべてである——前園は厳然と告げた。

言葉尻を継ぎ、折田がさらに状況証拠を列挙していく。

「そしておとといの晩。仁科政義さんはドスあるいは日本刀と思われる凶器で刺殺されました。凶器はまだ見つかっていません。ですが仁科さんの知り合いの中で日本刀を所持しており、なおかつその所在が不明となっているのは、石和修二君と蘭生そのおさんの二人だけです」

「……………」

「そして、これが蘭生さんを疑わない理由となります。石和君、君の靴のサイズは？」

「……二十六・五センチっす」

「犯行現場で採取された犯人のものと思しき足跡おほそくせきは、二十七センチのスニーカーです。メーカーによつては二十七センチのスニーカーも履きますね？」

「まあ、そうっすね」

「さらに君は、犯行当日の夕方に帰省してきた。保険が切り替わつてからは初の帰省だ。ここまで、何か疑問点がありますか？」

「……ねえっす」

「以上の点について、石和君には署で詳細な説明をお願いしたい」

「これで拒否するなら、公務執行妨害だ。来てもらえるな？」

王手、と。勝ち誇る前園の言葉は、どちらかといえば祁答院に向けてられていた。

祁答院はにらみ返す一方、起死回生の手を模索する。が、周到な準備の上でこの場に臨んだ前園たちとは差があり過ぎた。石和が犯人でない証拠があるせよ、発見する時間も思考を整理する時間もない。

「……分かりましたよ。行きゃいいんでしょ、行けば」

打つ手なし。祁答院が敗北を認めて目を閉じると、タイムアップ

を宣告するように石和がさつさと歩き出した。続いてまだしも丁寧に折田が付き添い、最後に前園がけれんみたっぷりの流し目を残して退出していく。

三人が呆然と居間に立ちすくんでいると、玄関から石和の声が響いた。

「にしきー。姉貴も葬式の手伝いで戻れないから、ワリいけど家事とか頼むわー」

いつもとまったく代わらない調子の声は、心配するなという彼女の心配りだろう。なんともしまらない捨てゼリフに続いて玄関を開け閉めする音が聞こえ、まもなく始動したエンジン音が石和家から遠ざかっていった――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

＊ ＊ ＊

石和修二いさわしゅうじがパイプイスに座るこの部屋は、はてしなく狭かった。

面積にして二畳もないのではないかと思われる部屋には、スチール製のデスクが向き合う形で二つ並べられている。照明も暗い。おかげですぐそばに顔を寄せてがなり立てる小太り刑事の顔もよく見えないし、その顔自体も影ができて凶悪さを増していた。

刑事ががなる内容もひどい。同じことの繰り返しだ。壊れたスピーカーでも、入力さえきちんとやれば違う音楽を流すだろう。聞き難くても、そちらの方がまだましというもの。右から左に聞き流す石和は、思い返したくないこの事態の元凶について思い返していく。

——石和隆史いさわ たかし。石和の父であり、三年前に病死した郷土史家。

地域屈指の研究者である彼に対する石和の記憶は、書斎で書物を読み散らかすその背中から始まっている。

まだ石和が子供のころ、寝食を惜しんで研究に没頭する隆史は尊敬まつ的だった。高い知識を持たなければ読むことすら叶わない古文書を楽し々と読みこなし、石和に嬉々として研究内容を語り、どんな疑問にもよどみなく答えてくれる隆史は頼もしかった。理想的な父親だったのだ。

が、それは石和がお金のお金の概念をよく理解できていない時期まで。大黒柱が働かず、自分の趣味に埋没する一家の生活が立ちゆくはずもない。郷土史の研究など、ぜに金を産み出さないのだ。石和がもは

や顔も覚えていない母は、記憶に隆史と口論している姿しかない。それもいずれ口を閉ざし、ある日に家を出たきり帰って来なかった。理由や目的は、語る必要もないだろう。

隆史の行動はそれでも改まらなかった。どころか、ますますのめり込むようになった。

家事は蘭生そのおが一身に担にない、石和への直接的は負担増は限定的だったが、それよりも重大なものが石和に父への不信感を持たせ、やがて憎悪へと変化させていく。

この父は、どこから生活費を工面しているのか。

本人は、出版された本の印税だという。信用できるわけがない。強面の連中が近所をうろつくようになってからは、なおさらだった。姉に質問しても、大丈夫の一点張り。どこが大丈夫なのだ叫んでみても、義務教育の過程にいた石和に何ができるわけもなかった。

不安に覆われた彼の高校生活が終わったとき、それは表面化する。ヤミ金から借金してFX取引を行い、利ざやをその返済と生活費に充てるという自転車操業は、財テクの知識に乏しい隆史には不可能だった。むしろ、ここまで保ったのが奇跡に近いだろう。

おりしも隆史は病気を患わい、あつけなく世を去る。残されたのは、売り払ってもスズメの涙にしかない田舎の土地と、莫大ばくだいな裏金融の借金だった。

本人が亡くなったから、借金はチャラ——という理論が彼らに通じるはずもなく、それはそのまま石和が背負い込む形となる。隆史は石和にマイナスしか残さなかったのだ。

せめてもの慰めは、隆史の死後に事実をようやく知った叔父の仁しなに

科が極道者に顔を利かせ、一般金融機関の借金に切り替えてくれたこと。それがなければ、たとえ奨学生といえども石和が大学へ通う余裕はなかったし、蘭生にいたってはどこに売り飛ばされているか分かったものではなかった。

（そんな恩人を、この俺が殺すと？）

喉^{のど}まで出かかった激情を、石和はぐつと抑える。目前にいる人間に感情を訴えてもムダだと、冷えた頭脳が結論を囁^{ささや}くがゆえに。

信頼できるのは、自分。あとは苦勞を分かち合うわずかな人間のみ。他人とは接点をできるだけ持たず、関わらず、知り合いたくない。信用ならないから。これが借金に追われ続けた石和のたどり着いた信条だった。

そして、何より許せないのが自分。

かつて父がのめり込み、身を持ち崩した学問に興味がある自分だ。父への憎悪と、同等の自己嫌悪。気が付けば、縛^はられて動けない自分がいる。それも許し難い。なぜ、自分はやりたいこともできないのか。意志も、実力すら備えているというのに。

それでも、あのクソ野郎と同じ道だけは歩みたくない。そのためなら――

？章 邂逅「情報より導かれる仮説とその裏付けについて」？

「……おい、オマエ人の話を聞いているのか？」

これまで沈黙していた石和いさわをただの黙秘だとカン違いしていたらしい前園まえぞのが、ここでようやく気付いて静かな怒声を上げた。

石和のそれは普段とまったく変わらないとぼけ顔だったので、初対面に近い前園が分からなくてもムリはない。石和が「聞いてませんでした」あるいは「さあ？」といくらでも意味が取れるように首をななめに振ると、息をついた前園はそれでもめげずに話し始める。

「じゃあもう一回、最初から確認するぞ。四日前の昼に帰省してから、一昨日の朝までの行動を、もう一度くわしく説明しろ」

「……………」

「お前の家にあつた脇差は、どこにいったんだ？ 犯行に使って、捨てたんじゃないのか？」

「……………」

「犯行現場から採取した足跡とお前のスニーカーの足跡は、ピッタリ一致したんだぞ？ それについてもうちど説明しろ」

前園の手元には、先ほど石和が脱いで提出したスニーカーと、現場で採取された二つの足跡のデータがある。それは石和の目から見ても同一のものだった。だが、

「その辺についてはもう話したでしょ。その通りですよ。それとそれ聞くの、もう五回目です」

前出した質問も含め、すでに一回説明している事項だ。話す義理はないと石和は視線を遊ばせる。

「確認だ。いいから話せ」

それでも前園は食い下がった。彼としては、話させなくてはならないのだ。それに石和が嘲りあざけの意図をたっぷり込めて鼻を鳴らすと、前園はさらに身を乗り出してくる。

「おい。オレは話せつつったんだ」

「……………」

「話せよ！」

ついに激昂げっこうした前園が、席を蹴る勢いを利用してデスクを叩く。プラスチック製の使い捨てコップがジャンプし、倒れて中のお茶をこぼした。

「刑事さん。ワリいけど、俺も少しは知ってたんだ。こっちのこと世間知らずのガキだと思ってバカにしてるでしょ？ 容疑者に何度も同じことを訊いて、矛盾点むじゅんが出たらそこを徹底的に追求する。取り調べの常套手段じょうそうしゅんです。そんなくらい、俺だって知ってますよ」

緑色の液体がデスクに拡がり、縁ふちの段差でかろうじて止まったのを確認しながら、斜しゃに構えた石和は伶俐れいりな分析を披露ひろうする。

「ち……よく知ってるな」

彼が見せる余裕は、前園にとってもおどろくべきものだった。

取調室という空間にあつて、正常な思考を保てる一般人は少ない。初めて入る場所への不安や緊張、狭い空間がもたらす圧迫感、延々と繰り返される質疑応答に、たいていの人間は錯乱状態へおちいる。そこへ石和が話した通りの要領で質問を繰り返せば、証言には絶対に食い違いが出てくるのだ。

むろん個人差はあるし、それは単なる言い回しの違いなど、ささいなものではない場合も多い。が、微に入り細に入り質問していけば、一つ一つの出来事をこまかく憶えている人間などいないため、かならず矛盾が生じる。それを糸口に混乱させて真実を引き出すのが、尋問の常道なのだ。

これに対抗するため、黙秘という手段も存在する。ただ、関係ない話からいつの間にか本筋へ話を引き込むというテクニックもある以上、素人が知っていたとしてプロ相手にいつまでも黙りおおせるものではない。

「最近は、情報が簡単に手に入りますからね」

だが、チンピラのような笑みを浮かべる石和の態度は、たとえば悪いが熟練の犯罪者のそれだった。

「ふん。じゃあ質問を変えようか。お前から見た^{にしまさよし}仁科政義はどんな人間だったんだ？」

想像以上に手強いガキだと感じた前園は、手順に沿って遠回りする。

「親父が死んでからは、俺と姉の後見人ですよ」

「それは分かってる。お前の印象が聞きたいんだ」

「うん……。なんつか、典型的な土方どかたのオッサンですね。ガンコで、情にもろくて、暑苦しい。嫌いじゃないですけど、苦手って感じですよ」

「個人的な怨恨はない。そう取っていいんだな？」

「ないですよ。むしろ感謝してるくらいです。親父が借金遺して死んだとき、大学除籍寸前だった俺を助けてくれたの、叔父さんでしたから」

「にしちゃあ、感謝とか悲しいとかいった気持ちか、まったくお前から伝わってこないんだが？」

「そりゃ性格です。しかたないでしょう」

石和にとつては、真実そうとしか答えようがない。感情をいちいち面に出す方が、世の中をわたっていく上で損なのだから。

「じゃあ、保険金の受け取り。お前は知らないと言ったが、なぜお前なんだ？」

「んなの、俺ア知りませんよ。叔母さんが、死んだ叔父さんに聞いて下さい」

知ったこつちゃないと嫌味を天井へ吐き出す石和に、誘導していったつもりで自分が弄もてあそばれていただけと悟った前園は肩を震わせる。

「口のへらないガキだな……」

「理屈で考えて、もの言ってるだけです。ハラが立つのは刑事さんの責任でしょう」

さらに石和は挑発する。頭の一つでも小突こつかせれば自分の勝ちだと目算しての言動だ。

「オレは保険金の受け取りについて、お前がどう思ってるか聞いたんだ。それなら答えられるだろ？」

だが、さすがにここまで見え透いた手にかかるほど前園も単純ではない。眉を軽く動かしてかわしつつ、逃げ道を封じ込めにかかった。

「そりゃ、感謝してるに決まってるじゃないですか」

あっさり逃げられるのは、役者の違いというより前園の自爆だが。

「……それもそうだな。じゃあ、これについてはどう考える？ なぜ相続人は社会人の姉じゃなくて、お前なんだ？」

「さあ？ それこそ叔父さんか叔母さんに聞かないと分かりませんよ。しいて言えば、叔父さんは昔気質むかしかたぎの人だったから、相続は男とか、んなモンじゃないっすか？」

事実、石和にも分からない。どころか、仁科以外のだれにも分からないはずだ。これは現国のテストによくある？その時の作者の心情をのべよ？という設問と同じ。第三者がいかに推し量ろうと、本当のところは本人しか知り得ないだろう。切々と愛を歌い上げながら、内実は「こんなこと思っているわけねーだろ。バーカ」と考えているかもしれないのだから。

「うん……」

もつともな意見に、前園は返事の最後を濁す。新たな糸口を考えているのだろう。

と、黙考し始めた前園に水を差すようなタイミングで折田おりたが入室してきた。

「失礼します。トクヤマ先輩、ありがとうございます。交代します」

記述役を務めていた壮年刑事が声をかけられて退出していく。

「石和いさわ蘭生そのおはどうだ？」

代わりに席へ座った折田が記述に目を通し始めると、やおら席を立った前園は折田に小声で話しかけた。

「……ビックリするくらい、こっちと同じことを言ってますね」

狭い室内だ。おまけに片方は地声がでかい。石和が特に聞き耳を立てなくても聞こえてくる。内容——姉も別室で取り調べを受けているという事実——に関しては耳を塞ぎたくなるものだったが、集められる情報を集めておかねばと石和はことさら聞いていないふり

をしなから耳をすませる。

「口裏を合わせている可能性は？」

「さあ……」

「違うのか？」

「なんとも言えません。ただ、他に有力な容疑者はいませんし」

「……そうだな。オレはちょっと席を外す。留守番しててくれ」

短いやり取りを終え、前園がタバコを吸うしぐさをしながら部屋を出て行った。

会話の内容から推察するに、自分の取り調べは長期戦になるだろう。当面は帰れないのかと石和がおおきく伸びをすると、イスへ後ろ向きに座り背もたれに両腕を乗せた折田がキャスターを利用して石和に近寄ってくる。

「ねえ石和君。一つ訊ねたいことがあるんだけど？」

もの問いたげな視線に、前園のような威圧感はない。どちらかといえば、質問をすべきかどうか迷っているように石和には見えた。

これまで石和が見聞きしたかぎり、折田は常にこのようなキャラだ。ただ、かいま見える頭脳めいせきの明晰さは前園以上に警戒すべき人物。加え、こういった尋問で相手から情報を引き出せるのは、北風と太陽の寓話ぐっわに例を取るまでもなく、押しが強い人間より柔軟な人間。それを知る石和は、心持ち体を強張こわばらせて無言を押し通した。

「ああ、捜査には関係ないことなんだ」

それを即座に見て取った折田は、あわてて手を振る。やはりこちらをよく観察している、とますます警戒を強める石和に折田が続けた言葉は、石和にとっておどろきに値するものだった。

「君の先生のことなんだけど。……あの先生、変な生き物を連れてないかい？　なんか犬っぽいヤツ」

「刑事さん、アンタ」

石和は横を向けていた体を正面に向ける。思わずデスクについた手から、こぼれたお茶の不快感が伝わってきた。

「折田だ」

ハンカチを取り出した折田が訂正する。受け取った石和は、拭きながら反射で思いついたことを口にした。

「ああ！　だからのび太なんだ、アンタ」

「……君、ずいぶんズバツと言うね」

「ひょっとして気にして……ますね。その反応は。スンマセン」

背もたれから腕を滑り落とした折田に、石和は憐憫れんぴんを押し隠しながらあやまる。相当に痛いところらしい。ほぼ初対面の年下にまでそう呼ばれれば、男として確かに傷つくだろう。

「いいよ。半人前なのは事実だしね」

ズリ落ちたメガネをかけ直し、乾いた笑いを浮かべる折田は、それでもここ何日か抱き続けた疑問に決着をつけるべく言葉が続ける。

「で、どうなんだい？」

質問に、石和は返答を迷った。知ってもいいことは何もない。周囲から電波あつかいされるだけで、むしろマイナスだらけだ。折田の今後を考えれば、知らないと言っのが親切だろう。

「折田さんが言ってることは、正解です。アイツは俺のセンスに取り憑いてる犬神ですよ」

しかし、石和はそんな親切キャラではない。それに知りたいと言った相手に真実を教え、その情報を相手がどうしようが、それも石和の知ったことではない。なので、折田を困らせる意味で素直に教えた。

「やっぱり。ボクの頭がおかしくなった訳じゃなかったんだ。でも、なんであの先生に？」

「俺もあんまくわしくは。けど、ずうっと一緒にいるらしいすっすよ」

「じゃあ先生が言ってた、龍神が復活したってのは？」

「センス、そんなことまでしゃべったんすか？　ったく、ただでさえ行動が怪しいんだから、黙ったときゃいいのに」

これは本音。一緒にいる人間のことも考えて欲しいという、石和

の切なる願いだった。

「やっぱり、本当なんだ」

「嘘みたいな、マジ話ですよ。今んとこ暴れる気配はないですけど、
すげえ情緒不安定っぽいすから、一步まちがえりゃドカン、ですね」

「……爆発したら、どうなるの？」

怖い。けど、知りたい。まるで怪談話で盛り上がる中学生のような顔で折田は問いかけてくる。

「さあ？　けど、たぶん伝承通りになるでしょうね」

としか石和には言い様がない。彼には靈感こそないが、この世ならざるモノたちへのありあまる知識がある。その知識から導かれる結論は、一つのものだ。

折田がごくりとツバを飲み込むのを確かめ、石和はトンデモ話に決着を着けるべく言葉を紡ぎ出す。

「おどかしついでに一つ、おもしろいおとぎ話をしましょうか。伝承ってのは、事実ではなく、言い伝えられていることが大事なんです。多くの人が、そうだと思っている。それが空想にリアルの力を与える。もし妖怪とかが本当にいるんだとしたら、アイツらはまさにそういう存在でしょう。だから……」

ここで石和は言葉をいったん切り、たっぷりのためをもってオチを宣告した。

「いると思ってる人には、見えるらしいですよ。」

間章（3）

彼女は水底で夢を見ている。

それは、昔々で語られるべき物語。我々にとって三百年前の出来事だ。

それは物語の終焉。吹き荒れる炎に彩られた暗闘にして、一匹狼を貫き続けたある男の最後だった。

強烈な雨に叩かれる須貝五郎左すがいごろうざの背後で燃え盛るのは、先ほどまで隠れ家だった寺。

十重二十重に自分を囲む包囲網の向こう。赤く照らし出された襲撃部隊の最後方に位置する陣笠を、五郎左はにらみすえる。

「あのような男にシッポを振っておったとはな……」

こみ上げる笑いは、自嘲。うすうすはこうなるだろうと五郎左にも分かつていたのだ。

足下に目を転ずれば、退けなかった理由が転がっている。己と苦楽を共にし、一足先に黄泉路へ旅立った郎党たちは、三倍する陣笠の手勢と折り重なるように倒れ伏していた。

すでに、己ひとり。

対し、陣笠側は目に見える限りでいまだ三十余名を数えていた。

五郎左は手傷に顔をしかめつつ、戦況を分析していく。
いかに数が多く、個々の戦闘力は油断ならないとはいえ、集団戦

闘の経験がある者など絶無。五郎左の腕なら、立ち回り次第でなんとかなるかもしれない。

ただ、そのためには指揮能力を持つ陣笠をつぶさねばならない。たどり着くためには少なく見積もって十は切り伏せる必要がある。長槍を持ち出している者もいるし、そもそも日本刀は三十もの敵を斬り捨てられる強度を持たない。途中で刀を奪えればいいが、敵もそれなりの手練れぞろい。それを許すほどに甘くはあるまい。

不可能だ。

ならば、逃走はどうか。

現実的な選択と言えた。が、すでに時機を逸している。郎党が生きていれば、彼らを楯——郎党共とて、自分に付いてくる以上はそれくらい覚悟している——に逃走して意趣返しのを機会をうかがえばよかったが、己すら手傷を負った今となつては、これも不可能だろう。

と、すると。

「本能寺、か……」

是非もなし。血気と手柄に逸つた雑魚を一合で斬り捨てながら、五郎左はつぶやいた。刀を無形に構え、じりと踏み出して威圧するかたわらで、己の死に様について思考をめぐらしていく。

切腹する気は毛頭なかった。このようなだまし討ちを行う連中がそれを許すほど武士道に忠実であろうはずがないし、そもそも自殺は連中を喜ばせるだけ。ならば、一人でも多く道連れにした方がいい。

「ふ……」

ふと、五郎左は嗤^{わら}う。汗と雨。すすと泥。返り血までを化粧にし、炎を背に嗤うその顔は、凄惨^{せいさん}の一言に尽きた。

「ハハハハハハ……！」

嗤いは、やがて哄笑へ。これまで以上の気をみなぎらせ、狂ったように目をギラつかせる五郎左に、気圧された陣笠たちは思わず後ずさる。

「答えは、今しがた俺が自分で吐いたではないか。では皆の衆、さらばである。先に地獄で待つておるぞ」

言い捨て、五郎左はくりと後ろを向いた。恐怖から解放されず、コがまた一人打ちかかっていくが、歩みをゆるめぬ五郎左は振り返りざまに哀れな首を斬り飛ばす。そのまま、

ひゅおん、と。

血ぶるい一つ。

死に急ぐなら、付いてこい。

背で語る五郎左は、心底からの笑いを途切れさせることなく、今にも焼け落ちんとする仁？（にんしょう）寺へと踏み込んでいった

間章（3）（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

さて、今回は登場シーンがほとんどないにも関わらず目立つ男、須貝五郎左の最後を書かせていただきました。

実はこのキャラ、筆者はかなり思い入れがあります。

というのも、舞台版として公開された本作において須貝を演じたのが、他ならぬ筆者だったからです（爆）。

ちなみに、私はそれまで舞台経験ナシ。殺陣の経験もナシ。

しかも、諸般の都合で役を決めた（変更した）のが本番一週間前という荒技ぶり。

小兵太役のK君と侍役のU君。この場を借りて、もう一度お礼を言わせていただきます。ありがとうございます。ホントに迷惑をかけました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3018r/>

妖怪学助教授 祁答院晶の調査レポート

2011年6月2日11時06分発行